
神様。俺はアンタに何か悪い事したか？

火だるま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様。俺はアンタに何か悪い事したか？

【Nコード】

N02450

【作者名】

火だるま

【あらすじ】

俺は呪われているかも知れない。

昔っから面倒事がたくさん俺のところに来てきた。

今度もいつもどおりだと思っていたさ。

ある日に、俺は一気にいろいろなものを抱え込む羽目になっちゃまった。

女だったり、女だったり……あれ？ 女だけだな。

ずるいつて？

そう言うな。だけどな女と一緒に厄介事も舞い込んで来るんだ。

死にかけたり、死にかけたり、殴られたり。
ボロボロだ。

神様。俺を苛めて楽しいか？

あらずじがわかんないって？

とにかく主人公である俺 あきたゆづすけ 秋田優介が女の子を守るために戦う、
そんな感じだ。

感想、評価、待ってます。

できれば書いてくれるとテンションが上がりますので書いてくれる
と嬉しい限りです。

1話 面倒事の始まり（前書き）

これからよろしくお願いします。

更新の目安は約一週間です。

誤字脱字等ありましたら報告してくれると嬉しいです。

感想なども待っておりますのでどんどん書いてくれると嬉しいです。

1話 面倒事の始まり

今日は早く家を出てきたのでいつもと違う道で学校へ向かっている。

天気もいいし、気持ちいいなあ。しばらく歩くと信号が見える。

……点滅し始めてるんだけど。

全力疾走して赤になる前に渡ろうとしたが、点滅が終わり赤になっってしまった。

お、俺の全力疾走返せ。

仕方なく信号の前で立っていると、目の前を黒い服を着た女の子が俺の前を歩いていった。

それを半分目閉じながら見ていると、信号に気づかなかったのか、そのまま歩いていく。

さっき俺が何で全力疾走したんだっけ？ もちろん信号が赤になりそうだったからさっ。

つまり今は赤で、普通に車が通りかかろうとしている。

ぬおおおおおおお！！

女の子を抱えて走り抜ける。女の子は片腕で担ぎ上げられるほどに軽かったのでそれほど苦労はしないで運べた。

抜けた後ブーとクラクションが聞こえたが今はそれどころじゃない。

「おまえ何やってんだよ！」

何で好き好んで車に轢かれそうになってんだよ。
女の子は俺に無表情顔を向け、

「私が死んだらあなたはどう思う?」

いきなりすぎて俺は首を傾げる。意味が分からない。

でもこの子は無表情だけどその顔は悩んでいる人がする顔に似ている。

もしかして自殺志願者とかか!?

どうにかこの子の自殺を止めなくては。

「俺はあんたの事知らないが、家族の人は悲しいんじゃないのか? 俺だってもう一応知り合いではあるんだから悲しいかもな」

意外と真面目に言えたと思う。変な事は言っていないはずだ。
女の子は少し首をかしげながら、

「あなたは私に生きてほしい?」

「そりゃあな。お前みたいなかわいい子が死んだらもったいないし」

この子とはびっぴりかわいい。まだ子供みただけで将来有望な子だ。

いつもより早く出たのにこれだけ時間をくうといつもと同じくらいの時間になっちまうよな。

「ありがとう」

僅かに頬を染めながら女の子は口を動かす。その顔は抱きつきたくなるほどに可愛い。

「どうも。俺そろそろ学校行くからな。じゃーなー」

俺は女の子に手を振って別れた。

「気をつけて」

「おまえもなあ」

俺は背中にかかった言葉に振り返らないで返事をした。最後に言葉を交わして俺は学校へと向かった。

学校に着き、下駄箱で靴を履き替えていると目に何かが映る。

おお！ 青いボールペンだ。

ラッキー。ちょうどインクが終わりそうだったんだよな。

誰もいないか周りを確認する。よし、今のうちだ。

俺は俊敏な動きでそのボールペンを盗り、カバンに入れそのまま教室へ向かった。

「優介^{ゆうすけ}。助けてよ！」

声をした方を見ると女の子……のような顔つきをしている男。こいつは俺の友達の伊達^{だて}みどりだ。

女顔なのを結構気にしているので、下手にからかうと怒るんだよ

な。

本人は女の子好きだから問題ない……？

「おうおう！ 優介——！ お前にも手伝ってもらいたいんだが
明後日は暇か？」

あごに手をやり思案顔でしゃべる倉井京也。
だけど、これでみどり逃げ回っていたのが分かる。

「分かったって。どうせ俺は行かなきゃいけないんだろ？」

「当たり前だああああ！ みどりもいいだろうっ——？」

「行くから！ お願いだから朝からはやめて」

ほんとに嫌そうだな。まあ、俺も朝からこんなヤツの相手をする
のは嫌なだけだ。

ムダに元気な京也。イケメン顔なんだが基本頭のネジがとんでる
から特にモテるとか聞いたことないな。

「それだけ聞ければ十分だ。では、俺は自分の教室に戻るからな。
さらばだ！」

ああ、うるさい。みどりは俺の後ろで怯えちゃってるよ。
男っぽくなる！ とか宣言してたくせにこれはないね。

「もう、行った？」

俺の後ろから首を出し辺りを見まわす。

こいつは別に京也の事が嫌いなわけではない。でもそのテンション

ンについて行けない時と今回のような時は小動物のようになってしまっ。

まずい。みどりが俺の背中を掴んでいる力が上がっている。い、痛いって！

「行ったから！ イタイイタイ！ 離れてくれよ。あと、もっとシヤキツとしろよ」

「う、うう。……はあ」

こいつはこの学校では人気がある。男子、女子両方からだ。さすがに男子はかわいそうだよな。

俺には関係ないけど。

午前最後の授業。場所は教室ではないので移動を開始する。

移動したらちょうどチャイムが鳴り授業が始まった。

ノートをとろうと思ったら、ノートを間違えることに気づいた。

もっと早くに気づけばよかった！

先生にノートをとって来ると伝えて教室を出た。

「ほ、ほえ？」

先生のマヌケな声が聞こえたけど気のせいだよな。

教室に着きドアを開けると、赤い髪が目に入る。なんだ？

赤い髪の正体は女の子。で、そいつは弁当箱を開き食べている。

赤い髪に対応するかのようには赤い半そでの服を着ている女の子は廊下側の一番後ろに座っていた。

つまり目の前だった。

女の子の座っている席は俺の席だ。女の子の手の内にある弁当箱は俺のにひじょくに似ている。

女の子は弁当を掻きこむながら俺の方を向く。

そして、顔を前に戻したと思ったたら勢いよく弁当の中身を噴いた。時間差攻撃。

ああ、もつたいない。俺の前の人の机にご飯がのってるよ。まあ、それをキレイにするつもりは皆無だけど。

「おまえ、何者！」

「お前が何者だ！！」

女の子の服はどう考えてもこの学校の制服ではない。というか目も髪も真っ赤で目立つのに誰も何も言わなかったのか。

女の子は何か気づいたかのように、俺のほうを上から下までジイイイッと見てくる。なんかはずかしい。

俺が頭をかきながら照れていると、女の子はあごに手をやりながら口を開く。

「おまえ。青いボールペン拾わなかったか？」

青いボールペン……今朝拾ったやつか？

「知ってるんだな！ 早く渡せ！ おまえ死んじゃうぞ！」

ぎゃああああっ！ い、息ができない。

首が絞められていて、ものすごい勢いで口から酸素が消えていく。

死ぬ？ ああ、俺はお前に殺されそうだ。

この状況でどうやって返せばいいんだよ。

「かえすから……離せ！」

何とか俺が声を出す。女の子は手を離して、その手をこちらに向
けながら、

「いいから早く出せ！」

こいつはそんなにあのボールペンがほしいのか。いや何かあれに
ある、とか。

こついつときの俺の力は太抵当たるんだよな。これは面白そう
な予感がする。

まあ、面倒事の予感もするけど。

「返してやるけど、なんか理由があるんだろ？ それを教えてくれ
れば返してやる」

俺の言葉を聞いた瞬間。女の子の雰囲気が変わった。どうしたん
だろっ。

女の子を眺めているといきなり拳が飛んでくる。

とても小さい女の子が打つスピードではないそれを俺は避けて、後ろに下がる。

あ、あぶねえ。俺はあと少しで死ぬ所だったよ。

俺が避けた事に女の子は驚いている。俺は殴られた事にビビッている。

だってそうだろ？　かわいい女の子がいきなり殴ってくるって、何それ？

「今のを避けられた!？」

「なぜに俺は殴られそうになったんだよ!」

女の子は

俺は喧嘩とか、そういうのに慣れているからなんとか見切れたけど普通なら直撃だ。

それで頭がスイカを割るようにはっくりいったね。

女の子は特に悪びれた様子もなく、頭の後ろに手を回してめんどつくさそうに言った。

絶対面倒だろこいつ。

「だって説明するの、めんどかったから気絶させて奪おうと思っただけだ」

何か文句あるか！　とばかりに俺を睨んでるんだけど。ありまくりだ。

でも睨んでいる姿はかわいいので許してやるか。

俺はカバンの中に入れっぱなしのボールペンを探しながら話す。

「この際、弁当食った事も、許してやる。だからその拳を下ろしてください！」

女の子は俺をまた殴るつもりなのか、パンチの練習をしている。急いでボールペンを見つけて渡す。死にたくはないからね。

無事女の子の手に入ったと思ったら、俺のところに戻ってきた。あるえー？

その後も何度かやるが変わらず俺のところに戻る。

女の子は見るからにイラついており、俺は殴られないかヒヤヒヤしながら続ける。

そして、

「うがああああ！　なんでだっ！　これじゃあ、時間の無駄だー
ー！」

あっ、切れた。

そしてポケットに手を突っ込み中から物を勢いよく出す。

中から現れたのは携帯電話。

意外と普通だった。いやだってこの子普通じゃないからナイフでも取り出して俺をブスツとやるのかと思ったんだよ。

女の子は携帯のボタンを押して誰かと会話を始めた。電話をかけ

ながらも俺を逃がさないように睨んでくるとは用心深いヤツだ。

授業。遅れるどころか、もう受けられないかも。

やることもないので悪いかもしれないが、女の子の電話に聞き耳を立てる。

拾えた言葉は、

「……えっ！？　つまりこの男が使い手ということ！　分かりました」

ツカイテ？　つかいてー！　みたいなの？　なにをだよ。

俺には全然分かりませんよ。

そこで電話が終わり、携帯を閉じて俺を見てくる、いや睨んでくる。もしかして、聞き耳立ててたの怒ってるのか？

俺は女の子を警戒していたらいきなり、手を動かす。

その手は俺の右手を握っており、女の子は怒った顔ではなく笑った顔。
意味が分からん。

「あたしはエナ・スピリットだ！　これからよろしく！」

何がよろしくなのか分からないが俺もだいぶ焦ってたみたいだ。

普通に返事をした。

「えーと。俺は秋田優介だ」
あきたゆうすけ

「よし！　ユウスケだな。あたしについてこい！」

それにしてもいろいろな事が起こりすぎてよく分かんなくなった

ぞ。

学校に来る前に女の子を助けて、そして次は違う子に殺されかけた。

何なんだろうな。

ズンズン廊下を歩いていくエナの背中を眺めた後さっき見つけたノートを持ち、逆へ行く。

ついて来いとか無理だから。

2話 日々が試練

授業はほとんど受けられなかった。まあ、特に怒られなかったからいいか。

そして昼休み。

「何で俺の机に米がこんなについてるんだああー！」

名前の知らないクラスメイト。ごめんよ。

犯人は赤髪、赤目の女の子だよ！ と心の中で叫ぶが聞こえないよなあ。

そして、俺の弁当箱は赤髪のせいで空っぽだ。

「優介ー。お昼ごはんは？」

みどりが俺のところに来てくれる。弁当箱はあります。しかし中身はありません。

エナとかいうヤツめ。ふざけんなよ。

「忘れた。食堂で食べてくる」

「そうなんだ。僕も弁当忘れちゃったから行くよ」

財布を持って、みどりと食堂に向かうためにクラスのドアを開ける。

変態がいた。

「これは偶然だなあああ！ 優介えええええええ！ みどりいいいいいいー！」

「そりゃ俺達のクラスの前で待機していれば会うだろ。そんなでどうした？」

「飯を忘れたあああ！」

無駄にリアクションがオーバーな京也。みどりは何とか耐えているが時間の問題だろう。

それにしても今日はいつも以上におかしなテンションだ。

何かいい事でもあったのだろうか？ 京也は両手を広げながら、

「食堂に行こおう！」

「分かったから落ち着け」

さすがに俺もこいつのテンションに疲れてきたので言うてみるが意味がない。

なんかいいことあったのだろうか。

「優介。今日の京也なんかおかしいよね？」

「ああ、ここ最近最高レベルのおかしさだ」

前を歩く京也は一人で考えている用で今は静かだが時々奇声を上げる。

俺たちは一緒にため息を吐いた。

俺たちはのんびりとご飯を食べる。俺はそばを食べている。

ふう、うまいなあ。

俺はのんびりとした時間を満喫していると食堂の二つあるうちの一つの入り口が騒がしくなる。

「優介、もしかして……」

みどりが俺の耳もとで喋りかけてくる。入り口には男子が多く集まっけていて所々に女子がいる。

たぶんあいつだろう。……まずい。

「みどり！ 俺のやつ片付けといてくれ！」

「う、うん。気をつけてね」

みどりに食器をまかせ俺は逆の入り口へと向かう。同タイミングに騒がしいほうの入り口から声が聞こえる。

「優介！ 一緒にお昼ご飯を食べる約束をしたじゃないですか！！」

してねーよ。俺は一度、状況を確認するために振り返る。

そこにはプラチナ色の髪を振り回しながら俺の方へと走ってくる。

「何で逃げるんですか！ って優介！」

「お前が追ってくるからだ！」

俺は近くの窓から外に飛び出して逃げた。

「待ってくださいよ！」

誰が待つか。

俺は上履きのまま外を走る。避難訓練でもこんなに一生懸命やんねえよ。

後ろを見ると離れた所に俺を追いかけてくる女の子
遠城寺色えんじょうじし葉るは。

両親のどっちかが日本人じゃないらしいけど詳しい事は知らない。

家も金持ちだが親が何の仕事をしているのかも知らない。
合ったこともないなそう言えば。

結構謎の女の子で中学のときに俺のいた学校に転校してきて、慣れていなかった色葉の面倒を見ていたら懐かれてしまった。

それが俺と色葉が始めてあつた時なんだよな。
別に懐かれて嫌なわけじゃない。だけど、自分のスタイルの良さも気づかずに抱きついてくる等スキンシップが激しい。

俺じゃなければ襲われているだろう。
そのたびに男共の貫通しそうなほどの威力の視線が嫌なので、見るたびに逃げるようになったというわけだ。

あいつはそんなに俺を虐めて楽しいのか？ 昔は妹みたいなもんだと思つてたんだけどなあ。
それにしても今日はついていない。

朝は謎の女の子。昼ちょっと前も謎の女の子。昼飯時は知ってるけど謎めいた女の子。

そのとき、どこかで聞いたことのある元気な声が聞こえた。

「おい！ アンタどこに行ってたんだ！ ずっと探してたんだぞ！」

ズカズカと俺の方へと走り寄ってくる。くそつ。戦う？ 逃げる？
どちらも無理か。なら魔法はどうだ！ ……ねーよ。

自分に突っ込みを入れながら仕方なく俺は両手をあげて降参と意思表明。

手をあげる撃つぞ！ みたいな。

「早く来いよな！」

「いや、俺学校あるし」

「そんなのどうでもいいっ！ あたしだって行ってない！！」

「ええー」

理不尽な事を言ってくる。なぜ自信満々に学校行ってない事を言うんだ。

そして一つの結論がでる。バカなんだこの子。

女の子 確かエナとか言ってた気がする子は俺の腕を取って引っ張る。どこに連れていかれるか分かったもんじゃないので足に力を入れて踏みとどまる。

俺の態度がエナは気に食わないんだろう。睨んできたので、睨み返す。

一瞬の沈黙。先に動いたのはエナの方だ。

「何で踏ん張ってるんだ！」

「なんで引つ張るんだよ！」

「ふん！ 分かんないなんてバカだな」

「俺がバカならお前は大バカだな」

「なんだとお！ ちょっと表に出ろっ！」

「もう出てるわ！」

俺たちは肩で息をしながら、なおも相手をバカにする。

一生続くかと思えたこの不毛な争いはしかし、一つのきれいな女の子の声により止まる。

そつえば俺は追われてたんだっけ。

「優介！ やつとみつけました！ そこから動かないでください！

そして地面に座ってください！」

「動かないで座る方法を教えてくれ」

その声は色葉の声で、こっちに向かってきている。

エナの方を見たと思ったら俺の方にゆっくりと首を回して、

「この人は誰ですか？」

ニコリ。

これだけ聞けば笑ったようだが、その笑顔には般若の顔を想像

いや般若だ。

俺は知っている範囲で説明を試みた。が、そのまえにエナが一步前に出て、

「これからあたしとユウスケは用があるからおまえはその辺で寝てる！」

なんとなく嫌な予感がしたので色葉の方を見るともう怒りまくった顔でエナを睨みつけていた。

特に怒る要素はなかったと思うのだがそんな事を行った瞬間俺はこの世界に立っていることは不可能になりそうなので言わない。

誰でもいい。この状況を脱出できる方法を教えてくれ！

そんな願いが通じたのか、二人は俺を無視して口げんか。

どうやら今俺のマークはないようだ。今ならゴール前に行きシュートすら余裕なくらい俺の存在は希薄している。ソロリソロリとその場からコソ泥のように歩き、脱出してみる。

だが、落ちている木の枝を踏みパキツと言ういい音とともに俺を二人の女が見る。

なんてベタなんだ。

二人は仲良く俺を見て、

「逃げんなあー！」「逃げないでください！」

こわっ！ 顔を怒りで赤くして二人は飛び掛ってくる。

横にひとつ飛びして二人を避けてからあちこちを駆け回る。

結局俺の昼休みは捕まったら終わりの鬼ごっこで終わってしまった。

疲労困憊だが何とか逃げ切れたようだ。クタクタのまま教室に戻ると、みどりが、

「五時間目の体育はマラソンだって。何で持久走大会の前でもないのにやるのかな？ しかも五キロだって」

……神様。もしもあんたがいるのなら、殺してやるからな！ その後何とかマラソンを走りきり、今日の授業はもう終わったも同然だ。

3話 放課後。家に帰れ……ない

放課後といえは帰宅部である俺は帰るしかない。逆に残っていても色葉に捕まるといふ最悪な事しかない。

だが、今日は俺のクラスが先に終わったので逃げ出す事に成功したのだ。

見つかつてはいないと思うけどいないと分かったら絶対追ってくる。

校門まで走っていくと、そこには目立つ赤髪の子を発見した。というかエナとかいう子だ。

エナは校門を出て行く生徒を血走った目で見ている。確かあの時「着いて来い」とか何とか俺に対して言ってた気が……。

もしかして俺探されてる？ だったら見つからないようにしなければ。裏門からするのは面倒だからパス。あとは顔を隠していくしかないな。

俺は顔を俯かせて超猫背にしたまま校門を抜けていく。すげえ見られてる気がするんだけど。

……………。

すかさず全力疾走。また走るのがあ、とのん気に考えていると後ろからタタタツと走る音。

「まてー！ー！」

後ろから聞き覚えのある元気な声。見なくても分かる。

「いいいやあだああ！」

前を向きながら返事をする。

足音が全然離れないんだ。むしろ近くなっているような。

「うおおりやああ！」

威勢のいい声だ。

それと同時にコンクリを蹴って飛ぶような音が聞こえるのは気のせいであってほしい。

俺が振り向いて確認するよりも前に背中に衝撃がはしる。

「あだあつ!？」

嫌な予感は見事に当たり、俺は逆くの字になって飛ばされる。エナのとび蹴りはものすっごく痛くてその場でごろごろ転がる。

あいつ、何しやがるんだ。

背中の骨がバキッて。折れてないとは思っけどなんつーけりだ。

「おまつ、逆くの字って死ぬわ！」

「うるさい！ それより、何で逃げたんだよ！」

むっと腕を組みながら俺を睨んでくる。分かんないの？

そりゃ、もちろん、

「怪しいやつに追いかけられてるからだ」

それ以外に何かあるのか。俺は背中を抑えながら踏ん張りを利かせて立つ。

「誰が怪しいんだ！」

「おまえ」

俺がエナを指差すとエナは避ける。

避けるな！

俺がまた指差そうとするとまた避ける。

「認める。おまえは十分怪しい。その右手に持ってるおもちゃとか」

俺は近づきながら言ってやる。こいつの右手には変な大剣が握られてる。

近くで見るとこの剣のおもちゃは結構凝っている。おもちゃにしてはやけに凝ってる作りだな。

俺の行動でどうやらイラついてしまったらしいエナは、

「おもちゃじゃない！ アンター一回痛い目みせてやる！」

そう言って右手の大剣を俺に突き刺してこようとする。

おもちゃだと分かっても当たると痛そうだから避ける。

大剣は空を斬り、後ろの家の塀が発泡スチロールのようにぶっ壊れた。

……はあ？

俺の体にビリビリッと電撃が走る。痛いというより痺れる。だ
ど、動けないほどではない。

痛むからだを動かして、エナに走って近づいていく。

エナは目を瞑って俺に両手を向けている。両手にはさっき俺の体
に直撃した物と同じものが見えるんですけど。

目をこすりもう一度見てみるがうん、錯覚じゃないね。

というか、あれはくらったらずいって。

慌てて、横にダイブ。

だけど遅かった。

そのときにはエナの右手から雷が放出されていた。

もちろん直撃だ。さっきよりも多いし。体がしびれて動けない。
静電気なんか比にもなんねーよ。それにもう身体は動かない。

仰向けで倒れていた俺にエナがいやくな笑顔を見せながら近づい
てきやがる。

悪魔だ、あれ。

エナは大剣を左手に持ちながら、

「ふっふっふう。どうだ！　これがアタシの力だ！」

剣を突き上げながら俺に向かって言うてくる。

おーい。剣がだんだんこっちに傾いてきてるぞ。

タイムリミット、1、2、3！　ドスンッと大きな音をたてて、

俺の横に剣が倒れる。

やっぱり悪魔だ。

瀕死の力エルみたいな格好してるやつに今のはひどい。

「とと。手が滑った。それで。どうだ！　これがアタシの力だ！」

またやるんかい！　さっきと同じポーズで同じような事を言っていた。

逆らったら何されるか分かったもんじゃないから、

あつ、また倒れそうだ、

「はい！　分かりました！　では帰りたと思います！」

やっと、動くようになった体を起こして　動かなくて無理やり逃げてたけど。家に帰ろうとしたらエナも着いてきた。

エナの家もこっちにあるのかな。

一応女の子だし家に送ってやったほうがいいのかも。

「家に送ろうか？」

「うるさい！　よっし行くぞ！」

ぱっさりと斬られる。身体じゃなくて言葉が。

何が楽しいのか知らないけど以上にハイテンションなエナは俺の手を握ってきてブンブン振り回す。

ちょっと痛い！　肩が外れるわ！

ただでさえお前のせいでボロボロな俺のボディを痛めつけるとは

どこまで残虐なんだ。

だけど、俺の手を握ってスキップしてるエナは見る人を元気にさせてくれるような笑顔を顔に浮かべていて、不覚にも見とれてしまった。

黙ってニコニコしてればかわいいなこいつ。

4話 いつでもバトル

家の前まで行き、玄関のドアを開けようとするがやめる。
なぜならエナが俺の後ろで待機しているからだ。

「おまえ、まじでか？」

「当たり前だ！ 早くしろ！ 開けないならドアをブツ壊して入るぞ！」

こいつがよし、行くぞって場所はまさかの俺の家。

どうやら居候になる気だ。それはいい。家には今誰もいないから別にいい。

今にも剣を振り回しそうなので、しかたなく、しかたなくだが俺は鍵を開ける。

もしも剣が直撃したらドアが粉碎されて泥棒さんに入ってくださいと言っているような物だからな。

家の玄関を開け、中に入る。そのまま、リビングに向かうと、

「おかえり」

泥棒さん？ 小さい声だがよく通る澄んだ声。

声のしたほうを見ると、白い髪の女の子。

立ち止まっている俺に蹴りを食らわせてくるエナ。いてーっつってんだろ！

こいつ、何かと俺を蹴るんだがそんなに蹴り心地がいいのかな、俺は。蹴り心地って何？

「……ただいま？」

疑問を混ぜて返事をする。って何でこいつがいるんだよ!？

確か朝、車に轢かれそうになってたヤツだよな。

「おい！」

エナが叫ぶ。よし、そうだ。今は何でこんな所にいるのかを聞くんだ。

俺はエナにアイコンタクトをして、エナも頷く。

ちゃんと伝わっているのかどうかは不安だが今はエナを信じる事にしよう。

「その手に持つてる物はなんだ！」

いやそこじゃねーよ！俺も気になるけどもっと聞きたい所いっぱいあるでしょ。

「肉まん……食べる？」

手に持っている袋から一つ取り出してエナに見せる。

おおきな目を輝かせながら涎を垂らし肉まんを見るエナ。

女の子はお手のようなポーズをとって手を出している。エナは犬のようにそこに手を置いている。

あいつ、意外とおもろいな。

女の子はご褒美とばかりに肉まんを手に乗せてやっている。エナは感動のあまりか手が震えている。

よしよしとエナの頭をなでなでしてやっているかぁーいい女の子。

おまえ人の食べ物を買いきすぎだ。俺のはあげた覚えはないけど。

「うみぁやーいー！」

誕生日プレゼントをもらった子供のように嬉しそうな顔で肉まんを少しずつ食べるエナ。そんなに肉まんってうまかったか？ あとでこいつを怒らせたなら肉まんをあげることにしよう。

俺はあんまんのほうが好きだけど。もうどうでもよくなった俺はカバンをそこら辺に投げ置いた。

「おまえらって知り合いなのか？」

あんまりにも仲がいいもんだからな。

どうせ、知り合いじゃないんだろっけ。

「知らない」「」

やっぱり。こいつらの相手をしていると頭が痛くなってくる。

頭が気のせいかわ痛むのでぐりぐりとマッサージをしたら当たり前の疑問がでてきた。どこからこの子は入ったんだ？

ちなみにエナは小さな右手で全体的にちっこい顔の頬を押さえながら肉まんを食べている。

今にも溶けそうなほどに頬が緩んでいる。お願いだからそこで溶

けないでよ。

「肉まん食べたい？」

銀色の大きな瞳をこちらに向けて小首を傾げながら俺の顔を覗き込むように見てくる。

女の子の顔が目と鼻の先にあり、恥ずかしかった俺は横に顔をそむけて、

「いや、いいよ。どうやってこの家に入ったんだろうなと思ってただけだ」

納得とばかりにわずかに首を縦に動かし、キッチンの方を指差す。何が言いたいんだろう。俺は女の子が指を向けたほうに顔を向けて、啞然。

「かんたん。窓、壊して入った」

……………。指差してくれた場所を見ると、わーお、窓が壊れてるよ。

ふざけんなあああ！

俺が見た場所はガラスの破片が大量にあった。すべて窓ガラスの残骸だ。

「窓ガラスうつつうつつうつつ！」

「うるさい！」

ぶべっ!?!?

「またもや蹴りが炸裂。俺は別に蹴られても嬉しくないからな。いや、少し嬉しいかも。」

「俺が蹴り飛ばされてる間に女の子はゆっくりとした足とりで窓のほうへと向かっていく。」

「俺は倒れながらその姿を見ていた。立ち上がることすらめんどくなってきたぞ。」

「特にやる気も起きないので睨んでみた。もちろんエナをだ。」

「ギロツ！」

「自分でいうな！」

「ギロツって言えば威圧感ますかとも思ったがエナを逆撫でしただけだった。」

「エナがその小さい体を活かして、飛んで来る。」

「冷静に横に転がって避けて、飛んで来たエナの腕を掴んで背中に回し抑える。」

「こいつが大剣を玄関に置いていたのを確認しておいたから恐くもなんともないぜ。」

「いてっ！　こんなかわいい女の子を捕まえて何するきだ変態スチユワーデス！」

「確かに俺がスチユワーデスだったら変態だろうな」

「変態っ！　って俺のしたでバタバタしてるエナをとりあえずほっとき、割れた窓ガラスのほうを見る。　女の子が窓ガラスに手を向

けて何やら眩き始める。

離れていてよく聞こえない。

いい終わると、女の子の手に光ができている。暖かそうな、太陽のような日差しを想像させる光を窓ガラスに飛ばすと今度はそこが光り輝く。

光が消えると、無残な姿をさらしていたガラス破片たちは直っていた。びっくりした俺は立ち上がってエナから手を放してしまった。

エナはその瞬間を見逃さなかったようだ。慌ててエナの方に目を向けると目がキラーンと光っていた。即座に回し蹴りをかましてきて、もちろん避けられなかった俺は派手にさっきまで壊れていた窓ガラスのそばに飛ばされた。

近くで見てもヒビ一つなく、直っていた。しかもかなりキレイに直っている。

まるで新品だ。さっきまで壊れてたと誰に言っても信じてもらえないだろうね。

そして近くにあったテーブルに頭をぶつけた。
いててて。

というかさつき、おかしな物を見た気がするんですけど。

女の子に聞きたいことがあったんだけど、

「よそ見すんなっ!」

エナの速いパンチが俺に向かってきた。何とかガードして、カウンターに殴ってやった。

「避けんなっ！」

「殴んな！」

バトルが本格化する前に女の子が肉まんをエナに見えるように横切らせて投げた。

食べ物を投げるのは良くないが今はいい仕事をしたな。

エナは面白いくらいにそれに引っかけり犬のように餌を追っていた。女の子は俺のところに来て服のすそを掴みながら、

「けんかはだめ」

僅かに寂しそうな表情をしているのは俺の気のせいじゃないだろう。

それが少し気になったが、女の子は何事もなかったかのように肉まんを食べ始めた。

無表情だけど少し嬉しそうに肉まんを頬張っている女の子を見るとどうでもよくなった。

それに俺は面倒事が嫌いなんだよ。

二人の美少女は肉まんを食べている。食つてるときはエナ猛獣でも静かになるもんだな。

さっきまで普通ではない女の子だと思っていたけど、肉まんを食べている二人を見ると普通の女の子に見えるな。

どっからどうみても。とりあえず、細かい事はいいや。今日は非常に疲れたので今は休みたい。

夕飯を作るとするか。

キッチンに立ち、ごはんを作り始めると女の子が来た。いい加減女の子は言いにくいな。

「えっと、俺は秋月優介。ユウスケでいいからな。お前は？」

キレイなかわいい目を少しだけ細めて数秒見つめてくる。なんか、はかられてるみたいなきぶんだな。女の子は一度顔を下げているから、

「ユウナ・ファルセルト」

「そっか。ユウナでいいか？」

コクリとちよつとだけ頷く。かわいいな。抱きしめてその柔らかさうな白髪とぶにぶにと赤ちゃんの肌のように柔らかいと思われるほつぺに自分の頬をすりすりしたいが今は料理だ。

「あたしも食べるから！　ちなみにあたしはエナ・スピリットだ
！」

「私も。分かった」

「おまえらまだ食べるのかよ！」

あれだけ肉まんを食っていたくせにまだ食べるのかよ。
「っーか、俺んちで食っていくのかよ。別にいいけどさ。」

5話 めし(前書き)

ちよつと早く更新できました。

5話 めし

「お前ら食いすぎだ！」

この二人は女じゃないみたいだ。だって食う量が半端ないもん。ご飯はかなりの量があったはずだ。それこそ明日の分まではある。なのにこんちくしょー！

「俺にも食わせてくれよ！」

食事の準備をして俺がトイレに行つて戻ってきたらすでにごはんは大ダメージ。

ごはんの釜の中は底を見せている。

それから二人はごはんをよそつて終わりましたとき。俺一杯も食つてないぞ。

「食つた、食つた。今度からもつと炊け」

エナは頭の後ろで手を組みながら、俺に非常の一言を加える。言われなくてもそうするわ！

「ユウスケ。おいしかった」

ユウナの言葉で救われたよ。

ありがと。お前は見た目も心もまるで天使みたいだ。

「あたしはシャワー浴びてくるから。覗いたら殺すぞ！」

すごい眼力で俺を睨んでくる。その迫力はライオンを目の前にしたようだ。

「ちょっとまってよ！ 何普通に俺の家でくつろいでんの！」

いまさらの俺の叫びはさらりと無視された。こうなったらと腕を伸ばして掴もうとするがすでにいない。

ユウナも食事のあとテレビの前でキレイに正座をしている。

まあ、いいか。しょうがない。ユウナに聞いてみるか。

「さっきお前、窓壊れてたのどうやって直したんだ？」

ユウナはテレビに顔を向けながら、

「さっきのは魔法」

それだけ言うと喋るのを止めた。基本無口なのね。それにしても、魔法かよ。この世界でも魔法と似たような物を使うヤツはたくさんいる。

俺の周りでは京也とみどり。そういえば京也は忍術だ！ って言うってたな。

でも、確かにそれですべてに説明がつかない。エナが使っていた炎とかも全部魔法だったんだろうな。

やっぱり魔法っていいよなあ。

おっと。もう一つ、聞きたいことがあったのを忘れてた。

「お前は何でここにいるんだよ」

ユウナは初めてテレビに向けていた目を俺のほうに向けてきた。食事の時間でさえ無表情を貫き通して、うまいのかまずいのか分からないで俺を困らせていた顔がわずかに悲しそうな表情になったのを見て俺は驚いた。

なんかまずいこと聞いてしまったのか？

「お、おいどうしたんだよ？」

一瞬だけだった。

俺が話しかけたときにはいつもの無表情に戻っていたので、なんだったんだろうなと思った。

「……わたしがここにいる　来たのはあなたが信用できると思っただから」

「意味分かんないんだけど」

「今は分からなくても問題ない」

問題大有りだ。ユウナはそれで話は終わったのかテレビに顔を戻している。

俺の中では不完全燃焼な気分だが話したくもないみたいだしこれ以上の詮索は止めよう。

とたん話すことがなくなり、無言がつづく。
き、気まずすぎる！　だれかたすけてー！

そのとき俺の願いが通じたのか、ピンポンと玄関のチャイム音が聞こえる。

こんな時間に誰だ？　とも思ったけどこの空間から脱出できるな
なんだっていいさ。

「今行くから」

聞こえないとは思っていてもつい言ってしまった。

慌てて玄関まで走って行く。ドアを開けると、そこにはちっこい
女の子。

エナと同じくらいの身長に肩ほどに伸びた栗色の髪。大きな眼と
くつきりまつ毛が特徴の可愛い女の子だ。

「あなたが秋田優介くんですか？」

近所の子でこんな子いたっけ。何で名前を知ってるんだ？　俺は
いつそんな有名になったんだ？

いろいろ疑問は合ったが女の子が何かを取り出したので聞くのは
止めておいた。

「エナちゃんにこれを渡してください」

そう言うところに入ってたんだよというツッコミをしてはいけな
いくらいにでかいダンボールを渡してきた。

お、重い。両手でもって少し腰が下がってしまう。一瞬でも気を
抜けば俺の足はパンをつぶすようにあっさりぺっちゃんこになるだ
ろっ。

これをこんなちっかい子が持ってたのか。というか懐から出し
たよね？　そこは四次元ですか？

「エナちゃんを守ってあげてくださいね」

大きな瞳を細め、ニコツと笑う。おお、可愛い。幼い子のほうがどちらかという好み俺にとっては最高だ。

これで甘えた声でもだされたら俺はきつと何でも言う事を聞いてしまう。

じゃなくて、

「ちょっとまって！ お前なんでエナの事知って……いねーよ、もう」

これって何。確かエナに言って言ったような気がする。
仕方ない、渡してやるか。

ダンボールを洗面所にまで運んで一息つく。
いい仕事したな。……なんで俺は洗面所に運んだの？ もちろんそこにエナがいるからさっ！

洗面所でエナは何してるの？ ……風呂だ。
体中の汗腺から汗がふきでてくる。そのスピードはナイアガラの滝ともいい勝負をと思う。

「ああ、シャワー気持ちよかったなあ」

お風呂からでてきた女の子。
俺よ、ナイアガラと張り合っている暇があったらさっさとここから逃げろよ。

いまさら遅い。こうなったらなめるように見てやる！

満面の笑みで風呂から出たエナ。

すこし頬を染めているのは風呂あがりだからか。いや、シャワーあがり？

そんなことはいい。

問題はエナの服装だ。

見てやるといつてもさすがに裸を見るのは恥ずかしい。

普通、風呂には服を着ないで入る。逆に服を着て入るのなら俺はその人を変な目で見るだろう。

つまり、今エナは生まれたままの姿という事になるな。

小ぶりという言葉さえ土下座してしまうほどに貧相な胸。たぶん両方、あわせても片手が余るほどだ。

キュッキュッキュツと言うぞうきん掛けの音が一番合う。だけど俺にとっては結構好みだ。

出るべき所は出てないけどしまる所はしまっている。

観察をしていると俺によやく気づいたのか、俺と自分の顔を何回か見る。

何回かそれを繰り返してから、顔を自分の髪と同じように真紅に染める。

そのまま流れるように胸を近くのタオルを引っつかみ、それで隠しながら回し蹴りを繰り返してきた。

「ちよっ、おまっ。死ぬぞ！俺が！」

お前の裸見て出血多量で。

「へんたい！ エ口野郎！ エ口本！ 18禁めえええ！」

意味わかんねえぞと言いたいが俺は防御に必死でそれどころじゃない。

痛いって。急所はなんとか防御しているがダメージはでかい。

蹴りとこぶしの連続。

やがて手数が足りないと感じたのか、自分の体を隠していた片手も攻撃に参加してきた。つまりタオルは重力に負けてパサツと床に落ちる。

それを両目をめーいっばい、目が切れそうなほどに見開いて脳内メモリー記憶しているとあごに重い一撃が入り、気絶した。

なるほど、これが色仕掛けってヤツか。

6話

洗面所で気絶から目覚めて、リビングに行くとエナとユウナが仲良くアニメを見ていた。

エナはくまのあっぷりけが入ったパジャマに着替えていた。

年相応でかわいいね。

「エナ。どこに着替え持ってたんだよ」

聞いてみたが返事はない。そのとき机においてある牛乳パックを掴んで飲み始めた。勝手に飲まないでくれよ。

とりあえず、こいつをバカにするとしよう。

「牛乳飲んで胸でも大きくしたいのか？ お前はまだ子供なんだから大丈夫だって」

「あたしは16歳だ！ 死ぬ！」

衝撃の事実が発覚した。いったいどうすればまったく成長しないで胸が大きくなるんだよ。

まあ、俺は胸が小さいほうがいいからそのままでもいいけど。

馬鹿にしていたら、空になったららしい牛乳パックを投げつけてきやがった。

しかし、実際はまだ少し残っていたのか、牛乳が飛び散り目に被弾した。

いてー目薬だよ！

「ぐわあ！ 目！ 目に入った！ マジ、シャレにならねえよ！」

目をゴシゴシしてみるが痛いもんは痛いのだ。エナは鼻を鳴らすとテレビを見始めた。

顔を洗いに行きながらそういえばまだユウナが風呂に入っていないかっただことを思い出したので、

「先風呂はいるか？」

「うん」

ユウナは一言そういつて風呂場へと向かっていく。リビングを出るまで、テレビが気になるのか顔をそちらに向けていた。

どうでもいいんだが全員俺の家の間取りを知っているのは何でだ。

あっ、ユウナの着替えはあるのかな？

「さーてエナ。おまえは何で俺の家でくつろいでいるんだ？」

「別にいいだろー。あたしの任務でもあるんだから」

「その任務の内容を言え」

「いやだ」

「言え」

「しつこい！ 今は話すなって言われてるんだ！ いったらあたしが殺される！」

テレビを見てて笑ってたくせにいきなり真剣な表情で俺を見てきた。
見つめ合うこと数秒。

この空気に耐えられなくなった俺は適当に話題を探す、が全然思いつかない。がんばれ俺の脳細胞たち。

「あー。あれだ。胸はないけどかわいいぞ。うん」

最高の褒め言葉だ。胸が無くてかわいいなんて最高じゃないか。俺の言葉どうやらこの空気を壊すのには最適だった見たいだが、戦場を作り出してしまったようだ。

「褒めるならちゃんとほめるー！」

さっきの事も思い出させてしまったようでエナは顔を真っ赤にして、瞬間移動をして殴る。

実際は超速く動いただけだが速すぎだ。

まったく反応できなかった俺の腹部に強烈な一撃がヒットした。

「うべえっ!？」

息はできないし、痛みを苦しんでいると間髪いれず蹴り飛ばされる。

俺の飛ばされた先には窓があり、あそこに当たったらひとたまりもない。俺の体と財布が。

なんとかソファを掴み直撃を免れる。

やっと息ができてきた。さて、エナはどこに行ったかな。探しているとりびングの入り口から出てきた。おいおい、ふざけんじゃなえよ。

右手には玄関に置いてあったはずの大剣がある。

「今から訓練つけてやる！」

「まてつて！ 死ぬ！ 俺、丸腰！」

「だったら武器出せ！ 行くぞ！」

来るな！ 武器なんてねえよ！
勢いよく大剣を振り下ろしてくるエナ。

俺は近くにあったソファを投げ飛ばして、エナの進軍を止めようと試みた。

とんだソファは見事に半分に斬られ、財布へのダメージが。

ソファアアアア！ 仇討ちだボケがあああ！

俺の右ストレートは大剣にガードされる。
かてえよ、いてえよ。手がジンジンする。

「死ぬ！」

横になぎ払った一撃が俺の首に。言葉通り殺す気満々だ。
何とか避けると俺の身代わりにテレビが半分に斬れてしまった。

家が半壊どころか全壊するぞこの調子だと。……非常にまずい状況だ。

エナが呟くと剣が雷を帯びはじめ。

「さてよ、おい。人間が雷食らうと死ぬんじゃないの？
ああ、殺すんだっけ。」

「雷ブレイドオオオ！」

「ネーミングセンス微妙だな。って、そんなこと言ってる場合じゃない。」

雷を纏っているせいで紙一重で避けると電撃をくらってしまっ。

「何度か攻撃を避ける。避けると周りの床や物が焦げてしまっ。
常に距離を取らないとホントに死ぬ。」

「なんで日本で死の危険を感じないといけないんだよ！」

「おらあ！ 死ぬ死ぬ、死ぬ！」

「さつきから死ぬ死ぬうるせえ！」

「大剣に合わせて俺は腕を振る。こうなりやけだ。こんちくしよ
う！」

「えっ！？ なっ！」

「おら！」

「右手にあつた青い剣で吹き飛ばす。それなりの太さと長さがある
剣だ。」

「なんなのか俺は知らない、でも何か分かる気がする。」

なんだろう。考えていると消えて、右手にあるのは青いボールペ
ンだ。
拾ったやつだなこれ。

「お、おまえ！ い、今剣出したよな！」

「ちょっと首絞まってる！ 絞るな！ ぞうきんじゃねえ！」

「質問に答える！」

「知らねえよ」

さらに手に入力を入れてこようとしたので暴れてみる。エナの手か
ら逃れ、パツと右手を前につき出す。
来るなどという意味をこめてだもちろん。

「落ち着け。それ以上来たら何か起こるぞ」

「いいから！ 早く質問に答える！」

こんな状況だが部屋の修復を頼もうと思った。だけど今にも飛び
掛つてきそうなのでやめた。

しょうがない。後でどうにかしよう。

「出したよ。よく分かんないけど」

「だ、したよな。ほ、ほんとに使い手だったのか」

なぜか鼻息荒く近寄ってくるエナ。俺は首を傾げてただ見ている

7話 少しずつ(前書き)

時々早めに更新できると嬉しいですが、更新が遅いのはすいません。

7話 少しずつ

うう。何で。何でだよ。

俺は目の前の光景を見て半分涙目。

ソファや、テレビは壊れた。家の壁なんかもだいぶ壊れ、オオカミが思いっきり息を吹きかけてきたら壊れそうなほどにダメージを負っている。

半壊と全壊の間を保っている家。
直せって、どうやればいいんだよ。

とりあえずエナの持っていた大剣を持っているいろいろやってみるがまったく効果はない。

もしかしたらこれでどうにかできるのかもしれない。

そんな期待でずっと振り続けた俺の腕は結構ポロポロだ。
ヒューと隙間風が入る事によりさらに俺のむなしさが増していく。

「ユウスケ」

俺が一人たそがれていると、呼ばれたら振り返らずにはいられない、かわいい声に呼ばれた。

振り返るって見ると風呂上りにより、頬を少し赤らめてかわいさが増した、ユウナがいた。

それにしても肌が白いな。顔を迷惑にならないくらいに近づける。すごい柔らかさそうだな。まるでタオルを干した後のように……あつタオルか。

全身を白いタオルで包み込んでいる。もしかして、着替えがないとか？

「どうした？」

「……替えの服がない」

やっぱりそうか。

恥ずかしそうに顔を逸らして、目を落とす。ユウナはすこし天然なのかもしれない。

「風呂入る前に気づこうぜ」

からかってやると逸らしていた顔がさっきよりも顔を赤くする。恥ずかしいんだろう。

もう少し苛めてやりたい気持ちもあったが、今は家を直してもらうのが先だ。

なにせあちこちから風が家の中を駆け回る今の状態は春とは言えど少々寒い。

ユウナは魔法で窓を修復してたからこれも直せるはずだ。

ユウナは寒いのか、風から身を守るためにか俺の後ろに立っている。

そこにいても後ろから風が来るぞ。

そのとき軽く風が吹き、ユウナの髪が宙にまっつ。ああ、いい匂いがするな。ってそうじゃない。

「この部屋直せる？ 直せるんなら直してほしいんだけど」

「分かった」

ユウナが目を瞑って手を前に出す。すると部屋の中には光が溢れる。光は数秒の後に消えて家は新築同然ってまでは行かないけどきれいに元通りになった。

あっちゅー間に直ってしまった。俺がむなしく片づけしてたのが無駄に終わった。

落ち込んでてもしょうがないか。

「ありがとな。ユウナの寝巻きだよな。ついて来てくれ」

ユウナがついて来ているのを確認してから考える。
家に女物の服があることにはある。別に俺の趣味じゃない。

俺の母親と妹の部屋の二つ。

母親のはたぶんサイズが合わないだろう。だとしたら……妹の部屋かあ。

家族は俺が中学二年になったときに親父が転勤になって全員ついて行っている。

俺は一人で生活できるからってついていかなかった。

妹の小学生のときの服なら残ってるかもな。

だけど……入りたくない。

妹は確か引越しのときに『勝手に部屋に入ったら殺す』って言うてたもん。

「どつしたの？」

階段を上りきって妹の部屋の前で止まっているとユウナが顔を覗き込んでくる。

そつだよな。早くしないとユウナが風邪をひいちまうよな。

そつ思い意を決して閉ざされているドアをあける。

あけて最初に目に入ったのは巣を作り出したエナ。

俺のさっきまでの決意はなんだったんだらう。

妹の部屋はすでにエナが荒らしに荒らしまくっていた。

ただ寝るだけなのにどうしてここまでできたんであるんだらう。

どう考えてもわざとしか思えない。これで妹が帰ってきたら俺が殺されるのは確実だ。

早くも走馬灯。それを首を振って忘れる。ひとまずそのことは置いて、タンスを確認する。

木でできた、タンスの一番下には妹の服が所狭しと生息していた。

いっぱいあるじゃねーか。宝を見つけた海賊気分で漁っていく。

適当にユウナが着れそうな服を取り出してぽいっと投げ渡すと、ユウナは下に行った。

それにしても荒れ果てている。まるでこの部屋にだけ台風が訪れたかのよう。

もうこの部屋を元通りにするのは無理だ。

巢の中に眠っているエナを睨みつける。
睨んでいた顔がほころんでしまうほどに幸せそうな笑顔で寝ているエナ。

怒りたくても怒れないじゃねえか。

しばらくすると、ユウナが服を着て戻ってきた。

適当に渡したんだけど意外と似合っていた。
サイズもバツチリみたいだ。

「ユウスケ。ねむい」

ユウナは目を擦りながらあくびをする。
俺もそれが写りあくびをする。

ポケットから携帯を取り出して時間を見ると11時だ。
子供はもう寝る時間だ。

「どこで寝る？ 布団敷くけど」

「あの畳がある部屋がいい」

一階には親父がよく使っている畳の部屋がある。

あそこを気に入ってたのか。

そうと分かっただらすぐに下に行く。布団は明日洗濯しておかないとな。

今はこれしかないから我慢してもらおう。

シュバツと布団を敷く。早くキレイに完璧だ。

「おやすみ」

「ああ、おやすみ」

俺はユウナと別れて、二階に上がりゲームをする。

寝る前の日課。これを忘れると次の日体調不良とまではいかないがテンションが下がる。

1時間程やると俺も眠くなってきたのでベットに横になる。

ちゃっかり俺のところだけベットだ。ふかふかだ。

これは夢か？

『ボクの新しいマスターですか？』

夢の中で青い髪でゴスロリ衣装を身に纏った女の子が俺に話しかけてくる。

あんた誰？ っと言おうとしたが声が出ない。

夢では声がつまく出せないことはよくあることだと思い質問するのは止めた。

そもそも夢なんだ。相手にしなくてもいいだろう。

『今はまだ魔力が足りてないのでこれだけです。力が整ったときにまた会いましょう』

女の子はそれだけ言うと、消えた。

それと同時に夢が切り替わり俺の馬鹿げた夢になった。

あの子胸大きかったな。身長はエナくらいだったけど。

……………。

「ぶはっ！」

目が覚めてしまった。今何時だ。手探りで携帯を探す。

携帯のディスプレイを見ると目が明かりになれてないのでよく見えない。

一度慣れるまで待って、見ると……………うわー、まだ1時だよ。

1時間しか寝てないなんて、微妙で眠い。

携帯を戻そうと思ったら手に何かがぶつかった。

それは筆箱の中に入っていたはずの青いボールペンだった。

エナがやたらとこれについて行ってたやつだ。

「さっきのはお前か？ 返事はないか」

これはエナが持ってきた物だ。だからなんかあるかもと思ってボールペンと話す。

道具と話をするなんて俺は友達がいらないのか？

そんな馬鹿な事を考えていると眠気が襲ってきた。

俺はそいつを味方につけて、布団にもぐり直した。

「誰か知りませんがおやすみなさい」

完全に寝付く前に、

『おやすみ』

と聞こえた気がした。

「はらへっ、たああああ！」

携帯を見ると5時。

俺の腹を殴っているのは、エナだ。

「お……ま、え。何すん、だ」

「うるさい！ 早く起きろ！」

「……頼むから。あとちょっと寝させてくれ」

まだ寝たいのだが、だんだん意識が覚醒してきた。

エナに殴られた 現在進行形で殴られているせいだ。

「飯作れ！」

「ああ！ もう分かったよ！」

上に乗っているエナを布団と一緒に跳ね飛ばして、起きる。

エナは突然俺が動いたのが効いたのか、思い切りけつをうって

た。

ぞまあ。

エナを無視して、一階まで降りてリビングに行くところユウナがジイ
イとテレビを見ていた。

ユウナはテレビに顔を向けたままだった。

「どうした？」

俺もつられてテレビを見るとアニメではなくニュースを見ていた。
珍しいなと思い、ユウナの顔を見た。

一瞬、どうしたのかと思った。ユウナの顔を見ると顔面蒼白だっ
た。

肌は白いがここまでやばい色はしてなかった。

「風邪でも引いたのか!？」

俺の言葉に首を横に振る。

「ユウスケ。これ見て」

ユウナは震える指をテレビに向けた。俺はもう一度ニュースを見
ると何かの文字を写していた。

『ユウナ。早く出てこい』

赤く、大きく書かれていた。テレビで何かを言っているが耳に入
らない。

嫌な感じだ。悪い予感。

「どづいうことなんだ？」

俺はよく分からないがこのユウナというのはたぶんこいつの事なんだろう。

いつの間にか下りてきて、俺を殴ろうと片腕をあげていたエナも空気をよんで話を聞いてくれていた。

「私は……ある理由で追われてるの。理由は……話せない、けど」

伏し目がちにそれだけ言って黙り込んでしまった。

つまり、ユウナはある理由で追われていてこの文字は追ってきたやつのもつて事か。

随分と派手なやり方だな。相手は焦ってユウナを探しているのか？こいつはそれ以上は話したくないみたいだ。無理に聞くのは止めよう。

気になるけど。すげえ、気になるけど。

「これ以上ここにいたら迷惑になる」

ユウナが悲しそうにいった。ユウナ、何行ってんだよ。悪いけど、

「今さらだぞ、ユウナ。それに迷惑のレベルではエナのほうが遙かに上だ」

「どづいう意味だ」

俺の言葉に怒りメーターが一瞬でMAXになったエナはまた蹴つてきやがった。

おまつ！ 脛っ！ 脛だから！

弁慶の泣き所だから！

「だから、ユウナ。いまさらそんな事考えんな。迷惑なんて思っていないから……っていい加減やめろ、エナ！」

せつかくいい感じの事言ってるうと意気込んでいるのに「りやねえよ。」

さっきまで空気よんでくれてたくせに。

でも、ユウナは俺たちのやり取りを見て多少ラクになったのか、天使のように微笑んでくれた。

「分かった。でも、迷惑だと感じたらすぐにここをでていく」

「もう、それでいいよ。だけど絶対に迷惑とは思わないからな」

俺に続いてエナも、

「あたしは一緒にアニメ見れなくなるのはいやだ！」

子供のよくな事をいってくれた。こいつホントに16歳か？
絶対年齢偽ってるだろ。

「そろそろ、飯でも食おうぜ」

「早く作れ」

エナの怒鳴りをはいはいと受け流す。

ユウナはもういつも通りの無表情でビデオにとってあるアニメを見ていた。

切り替えが早いといつかなんといつか。

エナもユウナの近くに座って、仲良く見ている。

「これじゃないのが見たい！」

「私はこれが見たい」

「リモコン渡せ！」

「嫌」

……仲良く。うん、見なかつた事にしよう。

この二人の不毛な戦いは俺が飯を作り終わるまで続いていた。

8話 平和。すぐに崩壊（前書き）

最近、書くのに慣れたのか早く書けるようになりました。
もしかしたら一週間に一度から三日に一度くらいになるかもしれません。

ちょっと調子に乗りました。すみません。たぶん五日に一度はできると思います。

8話 平和。すぐに崩壊

「学校に行くからな。変な人が来てもあけるなよ。あと、おとなしくしてろよ」

玄関で靴を履きながらユウナに言うと、ユウナは首を縦にふる。

エナは今、朝ごはんまでた、食器を洗ってくれている。

意外とそういうのが好きならしい。俺の中ではあいつはそういうのができそうには見えないんだけどな。
人は見かけによらないってことか。

「いつてらっしやい」

「……行ってきます」

家族がいなくなってからだいぶ経っているので少し驚いてしまった。

久しぶりだな。こうゆうやり取りも。

これからはこいつらが家にいるのかと思うと嬉しく感じる俺もいるんだよな。

騒がしくもあるんだけどね。

遠くからはやくいけって声が聞こえるんだけど気のせいだよな。

「はやくいけーええ！」

玄関のドアを開けながら思ったこと。俺の感動かえしやがれ。

昨日は散々な一日になってしまったので警戒して学校まで向かうと、そのおかげか学校まで事件は何もなくなるとどり着けた。

「優介。おはよう」

平和をかみ締めながら廊下を歩いていると、みどりに遭遇する。もちろん警戒態勢に入る

俺の友達はどういつも危険を壊しかねないのだ。頼むから平和を壊さないでくれよ。

もうすぐ朝のホームルームが始まる今の時間帯、生徒があちこちにいる。

「みどりどうした？ そんなキョドって」

こんなところでキョドられると結構目立つので、みどりを教室まで押していく。

「うへっ！？ い、いやあく何でもないよ」

冷や汗だらだらで言われても説得力がまったくない。

みどりがこんなことになる時って俺にはあんまりいいことが起きない時だよな。

俺がいぶかしんで見ていると、

「ゆ、優介って好きな人とかっているの？」

ああ、何だまた告白されたのか。

「俺にはいない。それよりもしかしてまた、告白でもされたのか？」

学校の中でみどりはまあ、人気がある。ちなみに俺はまったく人気がない。

別にそこまで意識した事はないけど。

でも、京也が意外と人気があるのはいらつく。あの性格を知らない奴にだけど。

「そ、そんなところかな。ど、どうすればいいかなあなんて」

「俺から言えることは一つ。お前は二次元の女の子に萌えてろ」

「ちょっと、まって！ ひどいよ。確かに三次元よりも二次元のほうが好きだけどって変な事言わせないでよ！」

勝手に言ったんだろが。

俺たちは教室に入りながら、話を再開。

「俺みたいなもてないヤツに聞くより自分の経験に頼ったほうがいいぞ」

「……自分で気づいてないだけなのに」

みどりはよっぽど地獄耳じゃない限りの声で呟いた。

俺は地獄耳じゃないので聞き取る事はできない。

もう一度言うわけじゃないから大事な事じゃないんだらうと勝手に決めつけ、席に座って外の景色を見つづける。

何も無い、昨日合った普通じゃない事が嘘のように外の景色はいつも通り太陽が輝いていた。

授業中、外の景色をボケラと眺めていた。いい天気だ。そんなことをやっていたバチが当たったのか、窓を見るとおかしな見慣れた赤髪の女の子が学校の前を通るのを見た。

その見慣れた赤髪の女の子 エナが右手に大剣を持って走っている。

ビビッてイスから落ちてしまいそうになった。というか半分落ちてみんなの目がこちらに向いた。

「おい。人の授業を聞かないで眺めてたバカヤロウ。どうした？」

口の悪いので有名な俺のクラスの担任、数学の教師でもある田中先生は俺のほうをつまらなそうに見ていた。

授業を妨害されたとかは特に気にしていないみたいだ。ただ純粹にめんどくさいみたいだ。

駄目教師め。

「先生。俺、腹痛いんでトイレ行ってきます」

「ああ、つまらせんなよ」

どんだけ出すと思われてるんだ、俺は。

やる気も皆無な教師だったため案外簡単に教室から抜け出すことに成功。

すぐにエナが行ったと思われる方向へと駆けていく。

もちろん正門から逃げるなんて堂々な真似はせずこそそと裏門が抜け出した。

勝手に出るなって行ったのにエナの奴。お前の姿はいろいろ目立つんだよ。

途中、制服姿の俺を怪訝な顔つきで見てる人がいたが、気にしては入られない。

しばらく走るとそれなりの都会の街中に着く。この町は都会と田舎の間ぐらいの町だ。

大きなデパートがあると思えば、駄菓子屋なんてものまである。

今は関係ないか。

周囲に目をやるとサラリーマンのような人が何人が歩いている。

あいつは髪や目の色は目立つが、身長が低いせいで捜し出すのは大変だ。

かなり見つけるのは苦労すると思ってたとおり、そこらへんを駆け回って随分時間が経ってからやっと見つけた。

「エナ、こんな所で何してるんだ？」

「ユウスケか！？ ラヴァだ！ ラヴァが出た！」

近寄って声をかけると、くわっと目を見開いてからエナがラヴァ、ラヴァ喚く。

俺がラヴァについて知っていれば理解できるのかもしれないけど、無理。

俺がハテナマークを顔に浮かばせながら首を傾げてみるが伝わっていないようだ。

「ちょっと待ってくれ！ 首絞めてないで説明！ ラヴァについて説明しろ！」

「ああ、もう！ 簡単に説明するぞ。ゲームで言うモンスターだ！ 分かったか！」

「おお、ありがとう。分かりやすかった。だから首から手を離せ！」

説明を終えてもまだ首を絞め続ける。そんなに絞ってもなんも出ないぞ。

我慢、なんてできるかーあああああ！

その場で回転してエナを吹っ飛ばす。回転してる時一瞬だが、掴む力が上がってまじでやばかった。

俺に飛ばされ、確かに少し怒っていたがラヴァがそれだけやばいものなのかエナはいつものように殴りかかってはこないで、また探索を開始。

周りを見てもおかしなものなんてないぞ。
俺は呆れ半分で周りを見ると、不思議な、馬鹿みたいな光景を目にしてしまった。

ビシツと決まったスーツ姿。身長はそれなりに高い。うん、似合っている。

別におかしな所はそこじゃない。

問題はそいつの顔だ。ブサイクとかそういう次元の話をしているのではもちろんない。

スマートに伸びた鼻。大きな瞳に、大きな耳。髪はなく、肌の色は灰色に近い。

「あれ、ラヴァじゃないか？ もしあれが人だったらこの世界は死んでいる」

エナにおいでと手をクイツとやるとすぐに俺の横に来て目を細める。

俺が指差した方を見るとエナは背中を豪快に叩いてきた。

「よく見つけた。これやる！ よし、倒すぞ」

俺の手を掴んでポケットから何かをだし、乗つけてきた。

いらん。肉まんの下に敷いてある水気取りでいいのか？ それを俺の片手に乗つけて、あいているほうの腕を勢いよく回している。

やるぞおと意気込んでいる様子のエナは気づいていないみたいだ。そのスマートに伸びた鼻が突き刺さんばかりにエナに向かっていく。

あの鼻どつやら伸縮自在のようだ。最初に見たときはそれほど長くなかったのだが今は二十メートル近くあった距離をうめている。

エナの首根っこを掴んでこちらに引き寄せせる。エナは俺の胸にうずまっている。

見事に鼻は空を切り、そこで最初の攻撃は終了のようだ。

シューーと掃除機のプラグをボタン一つで戻るあれのように鼻が戻っていった。

ただの様子見か。

「にやにすんだっ!」

何今の! 噛んだの? 噛んじやったの?

下に顔を向けるとよくいう熟れたリンゴのような顔をした少女がいた。

とても俺を蹴ったり殴ったりするような暴力女には見えないね。

「今のかわいいな。ワンモア」

「離れる、バカッ!」

一気に頭をあげる。頭突きは見事に俺のあごに直撃して後ろに倒れてしまった。

「やばっ! ユウスケも手伝え!」

エナの声どおりさつきまでであった距離はかなり縮められ、すでに鼻を伸ばすのか後ろに少し顔を下げているゾウの姿。

エナはゾウの右側に行ったので、俺は反対の左側に向かうために立つと同時に顔を前に突き出して鼻を伸ばしてきた。

「あぶなっ」

ギリギリで反応した俺は体を後ろに反らして避けた。俺の上を鼻が通り過ぎていく。

横に転がり態勢を立て直して、まだ伸びている鼻を掴む。

「いまだ、エナ！」

まかせると返事をする代わりに剣でぶったぎった。それと同時に俺は手を離す。

攻撃をしながら顔を顰めたエナ。

どうしたんだ、どっか怪我でもしたのかも。

「ユウスケ！ あいつやばい。何か普通と違う」

エナの目には少し怯えた風に見えたが、俺は普通を知らない。

京也と一緒に倒したやつがラヴァなら知ってるは知ってる。京也はモンスターって言ってたけど。

エナが多少なりとも怯えているということだけで警戒するには十分だ。

周りにいた人は何事かと俺達を円巻きに見ている。

邪魔にならないなら別にいい。後でそいつらの事は考えよう。ただそれとも時間の問題だろう。すぐに白い車が来て俺たちは捕まってしまう。時間との戦いだ。

ここはこいつに任せるか。

「お前、強いんだろ。俺はサポートメインだから頼んだぞ」

「……分かった」

おかしい。

家で元気よく俺に襲い掛かってきたりしていた元気はいずこやら。今のエナは全然元気があるようには見えない。

むしろ死にそうなほどに顔色が悪い。

だけど気にしてなんかいられない。

俺の言葉を気にしてか、相手の出方も窺うかがわず、斬りかかるエナ。大剣を軽く振り回すその筋力はすごいけどゾウはその場で最小限の動きでエナの剣をすべて避ける。

ゾウは長い鼻をムチのように使い、攻撃しすぎで多少疲れが見え始めているエナへと反撃した。

エナは大剣を使ってうまく立ち回っているがやられるのは結構すぐだ。

あれじゃあ、エナが攻撃に移れないな。だけど俺だっで見ているだけじゃないぞ。

エナが弱っていく姿にしか眼が行ってないのか、俺の接近にはまったく気づけていないようだ。

真横から体全体で突撃して体勢を崩させ、あごと思われるところを殴りあげる。

後ろに少しとんだ所を、とび蹴り。

スカツとするね。こっ、いい感じにコンボが決まると。さらにそこにエナが追い討ちをかけるように、斬った。

ゾウは反応するどころじゃなかったので、その攻撃をまともに受け、体を半分に斬られていた。

今でもやられないってことはモンスターと同じだな。

こいつらの倒し方は人間で言う心臓部分が普通の人間とは違う部分にありそれを探して壊す事。

壊さない限りは体は何度でも再生するという、半不死身なのだ。

エナは俺のところに戻ってきて、

「倒し方教えてやる。あいつの右肩部分に心臓あったぞ！ それを壊せばいいんだ。ふふーん」

さっきと打って変わっていつもどおりの子供っぽい笑顔を浮かべているエナがいた。

自信満々に俺が心で思っていたことと同じような事を言った。

なんだったんだよさっきのは。すこし心配してた俺は安心した。ゾウは元通りになった体で少しずつ歩いてきて、

「ユウ……ナ……を……わた、せ」

なんて言った？

短い言葉だし、途切れ途切れだったのでよく聞き取れなかったが、今こいつは確実に『ユウナ』と言った。

エナは聞き取れなかったのか、頭を九十度回して傾げていた。

ユウナ、お前は一体何者なんだよ。テレビ出演、いきすぎなファン（目の前のゾウ）、有名だな、おい。

ユウナから事情を聞きたいが俺には無理だ。女の子が悲しむような事はしない。俺のモットーだ！

だからこいつから聞き出せないか考えたが無理っぽそうだ。

さっきのがどうやら遺言らしくもう喋る気はないようだ。戦闘力はあっても、言語機能はダメらしい。

ゾウは見てるこっちが不安になるようなヨチヨチ歩きで向かってくる。

ゾウは俺を先に倒そうとしているのか、ゆっくり近づいてくるゾイツをエナが隙を突いて倒せばいい。
はずだった。

「ユウスケ！ あたしがアイツ倒すから邪魔すんなよ！」

「まてつて！」

エナは俺と戦っていたときと違って、すごく興奮していた。鼻息は荒いし、やけに笑っている。

嫌な予感。もしかしたら今のこいつが笑っているのはただの強がりなんじゃないか？

だからなのか、こっちが圧倒的に有利なものにもかかわらず、ゾウに倒してくださいとばかりに正面から走り出した。

俺は止めようとして腕を伸ばすがすんでのところだとどかず、エナはゾウの攻撃が届く間合いに入っていた。

エナはそのままゾウの鼻を斬った。相手の唯一の武器を破壊したこと事から、エナは完全に油断していた。

斬れた筈の鼻が動いている事に気づいていない。トカゲの尻尾かよ。

あの、バカ。俺と喧嘩するときにはもっと徹底的にやってるくせに。やっぱりそうだ。なぜか知らないけどあいつは冷静じゃない。

何でそんな焦ってたんだよ。

無理だ。もっと早くに走り出していけば間に合ったかもしれない。悟った俺は助けるかわりに声を張り上げた。

「エナ！」

俺の叫び声に反応して、エナがめんどくさそうに振り返る。その顔は、一瞬にして恐怖に染まる。

慌てて大剣を持ち上げてガードするが、エナの小さな身体はあっさり弾き飛ばされてしまった。

弾き飛ばされたほうにはゾウの体がある。

ゾウは、あざ笑うかのように無い鼻を鳴らして、エナの体を掴み地面にたたきつけた。

エナは隕石が落ちたかのようなクレーターを作って、道に横になっている。

くつついた鼻を使って連打をあびせる。

「エナから離れる！」

俺は走った勢いをそのままフル活用して蹴りをおみまいする。

ゾウはエナにしか目が行ってないのか、それとも二人相手にするほど知能がないのかわからないが俺の接近にまた気づいていないかいうであっさりヒット。

きりもみ回転しながら派手に飛んでいくゾウはとりあえず無視してエナを抱き起こす。

脈は大丈夫だし目立った傷もなかったので、俺は体の中に溜まった嫌な感じを吐き出すようにため息をつく。

「あたし、お嫁にいけない」

「顔は大丈夫だ。そもそも誰が好き好んでこんな凶暴女をもらってくるんだよ」

「なんだとっ！」

ばひゅっ。エナはやはりダメージが残っているのかいつものよう

に殴ることはできないようだ。

ゾウは途中で体勢を整えたのか両の足でしっかりと立って、またよちよち歩きを再開していた。

何か俺にも武器があれば……。足もとにはエナの大剣。

これだけだと物足りないんだよなあ。

そんなことを考えた瞬間、心の中に聞き覚えのある声が聞こえた。

『マスター。ボクにまかせてください。あとで頭痛に悩まされると
思いますが、えいっ！』

なんか聞きたくないことを聞いた気がしたんだけど。気のせいであつてほしい。

エナは燃え尽きたボクサーのようにぐったりとしていたので、俺は自分の胸を叩いて、

「エナ、今から仇とつてやるからよくみてなさい」

と、いった。

俺は手元に現われた細く長い剣を右手に持ち、左手でエナの大剣を持って、構える。

エナはじいと見て、

「大きさが合つてなくてかつこ悪い」

「気にしてたこと言うな！」

エナはボロボロだが少しは元気になっているようだ。
よかった、よかった。

9話 撃破

大剣と細身の剣を担いでゾウに向かって走る。

それに反応してゾウが鼻を伸ばしてくる。邪魔なんだよ。

伸びてきた鼻を特に意識せず切り伏せて、ゾウの間合いに入る。目の前にはゾウの胸の辺りがあったので大剣で抉るように刺してやった。

意外と赤い血が出る所が人間みたいだが、うん血が少しとんでくるのは嫌だなあ。

「ぶろうっ!？」

ブロウ? ああ、痛みでも伝わったのかね?

前に気を取られている間にゾウの後ろにジャンプ。

着地と同時に腕を勢いよく振り、大剣を細身の剣を使い十字に斬った。

あれま。肩にあるとかなんとか言ってた気がするんだけど。

エナが言っていた心臓部分はないよ。なんでなの?

確認するためにその周囲を切るうとしたが、敵もちょっとはやるみたいだ。

俺はゾウに尻尾は無かったと思ってたんだけど、尻尾があった。

ゾウには尻尾があったのだ。

尻尾をムチのように使って攻撃してきたのをギリギリで大剣の腹

で受け、横に逸らす。

急な攻撃だったけど何とか耐え切れた。

パワーで押し切るより相手の動きの遅さを攻めたほうがいいな。まずは左の手にある大剣をおもつきし投げた。

空気を切る音を出し、回転しながら飛んで行く剣を、ゾウは鼻で受ける。

数秒、その一撃を止めてたけど限界がきたのか、鼻が吹きとんだ。

大剣は花火のように上に打ち上げられたが、まだ俺の右手には青い剣がある。

そして、相手が大剣と一生懸命バトツてる間に俺はゾウの横に移動してんだよ。

自分でも速さについてはほぼ無意識で斬ったのをすぐに戻してまた斬るを繰り返す。

「ぶおおおおおおッ!？」

結局肩の部分から少しずれた場所に紫色の核を見つけた。

その核はとても毒々しい。俺の目には毒リングゴに見えるね。

「さーて、エナの借りを返させてもらっぞ」

俺、なかなか怒ってるんだよ。いくらエナがうるさくてやかましい奴だからってあんなに傷を負わせやがったんだから。

俺の怒りが伝わって怯えたのか、一生懸命ボロボロの鼻で攻撃を仕掛けてくる。

そんなものが効くかよ。

軽く払うように腕を振ってばら肉にする。

ほとほと肉の破片がコンクリートの地面を汚していく。

やけくそのように、ゾウは右腕で子供のようなよわよわとしたパンチを撃ってくる。

へたくそなパンチだが腕が人の倍ぐらいあるので当たればひとたまりも無いだろうけど……当たればだ。

俺はそれも切り伏せ、むき出しの核を剣を振り下ろして半分に割った。

核が半分に分れて地面に落ちると同時に、ゾウは体を震わせ、光を放ちながら倒れた。

全身を覆う光がまぶしくて目を伏せる。明るいなあ。

のん気になっているとすぐにその光も収まっていき、完全に消えたとゾウの姿もまったくなかった。

周りに飛んでいたゾウの血すらもなくなっているのには驚いたけど、そんなことより今はエナだ。

「エナ。終わったぞ」

「うそ。アイツ魔戦士でも苦戦するようなヤツなのに」

「なんだよ。目の前で見たのにイチャモンつけるんですか、お客さん。それに魔戦士ってなに？」

「うるさい……あたしの剣返せ」

俺が戦っている間に少しはマシになったのか立って剣を奪いにきた。

俺がもっていた細身の剣はもう消えており、左手にある大剣だけだ。

誰だか知らないけどサンキューな。心で一応お礼を言うておく。感謝の精神は大事なんだよ。

「ほらよ。というか、さっさとここ離れるぞ」

周りの人は携帯で写真とかも撮っちゃってる。逃げても無駄なのは分かっているがそれでも逃げるんだ。

ここにいたら現行犯だもん。

「はあ？　なんでそんなことすんの？」

そんな俺の態度とは裏腹にこいつは目を細めて睨んでくる。こいつは本当に分からないのかよ。

「だ、か、ら！　俺たちこのままだといろいろまずいの。警察とか、警察とか」

「バカか？　ぶぶっ！　そんなのあるわけ無いじゃん。いまからあたしがここら一带の記憶を消すんだから」

「ぶぶっ」って言った時、額に青筋浮かんだぞゴラッ！

って今何か言ったよな。記憶を消す？　そんなことできるのかよ。

だったら俺があれこれ考えていたのは杞憂きゆうだったのかね。

エナは目を閉じて、剣を突き上げるのと同時に街全体が光に覆われる。

集中している時のこいつの顔は本当に可愛かった。

この世に現れた天使とか、そんな感じ。

あまりの光の強さに俺は目を瞑こってしまっ。

「よし、今すぐここを離れろ！」

エナの元気な声を聞いて、目を開けると、走り出そうとして剣を手から離して倒れてしまったエナの姿が目に入った。

こいつがスカートだったらパンツ見えただろうなあ。
惜しかった！

「おい、大丈夫か!？」

「う、うう。もう、あたし、お嫁にいけない」

「だからもともといけないだろ。って早く離れないといけないんだよな」

「ああ、くそう。足がいかれちまつてるぜえ」

「お前体より頭おかしくないか？」

「なんだと!」

立つ事はできるけど歩く事はできないみたいだ。無理に歩こうとしてまた倒れてしまっている。

仕方ないな。俺はエナを家まで運ぶためにお姫様抱っこしてやる。

どうだ、エナ、何で顔真っ赤にしてるの？

もしかして恥ずかしいのか。いきなりの女の子っぱい表情に俺もちっとどきっとしちまった。

「うわあ！ 何すんだ！ エロタイフーン！」

「何でお前がタイフーンになってるんだよ。ちよっ、ちよっと暴れるなって！ 落ちるぞ」

俺の腕の中でクルクル廻っているエナ。さっきからエナを落とさないように頑張るが時間の問題だ。

なんつー摩擦力だよ。あついつて！ 熱エネルギーが！

とても怪我してるヤツには思えないほどにすごい回転力だ。一家に一台ほしいね。

「降ろすから落ち着いてくれ！」

俺の一声によって少しずつ回転力が落ちていく。やがて完全に止まったので降ろしてやった。

ほんと、コマみたいだ。

「じゃあ、どうすんだよ。このまま体が治るまで寝てるのか？」

「ユウスケに運ばれるくらいならあたしはここで死んでやる」

大の字でコンクリートのベッドに寝ている。寝ながらも超睨んで
いるのが憎たらしい。

何か強情になってるぞ。ははーん。

自分が勝てなかったヤツに俺が勝ったからジェラシー感じてるん
だな。

ジェラシーであってるっけ？

自分自身で早くここを離れなければいけないって言ってたくせに
なんなんだよ。

床で大の字になっているエナを無理やりおぶる。

「だーかーらー！ 離せっ！」

おんぶならと思ったが無理だった。すぐに暴れて背中から後ろに
逃れた。

「おまえが早くここを離れろって言ったんだろ」

「……………ふんふふーん」

「鼻歌で誤魔化すな！ ああ、もう！」

俺は再びエナを抱きかかえて、何か言われる前に一気に走る。

周りの光は収まり始めている、このときにここにいと何か面倒
な事が起こりそうだ。

この光が消えたときには俺たちの記憶はホントに消えてるんだろ
うな？

エナの手にある剣が足に当たるのを感じながらそんな事を思って

いた。

走りにくい。

俺が走っていると、高速でパンチを当てまくってくるエナ。やっぱり本調子ではないらしく、今までよりも弱い。マッサージのみたい。

家族が傷つくのは嫌だな。こいつといて思ったことだ。

エナは顔を赤くしながら、なおも弱いパンチを繰り返す。

ああ、かわいいなコンチクショ！。

俺の心を読んだのか知らないがかわいと思った瞬間、今までで一番強いパンチを食らった。

ぐっ、ぼえ！

モロみぞに入り若干むせた。そんなやり取りをしながら周りを見ると、戦っていた街からだいぶ離れていた。

無意識に走っていたから全然気づかなかった。

今は俺の通っている学校付近。

後少し歩けば俺の家に着くが、走るのが疲れたので、歩く事にする。

「いい加減離せっ！ 殴るぞ」

殴ってるだろってツッコミはする必要ないな。
どうせそれでまた殴られるんだろ。

「だったら今すぐ怪我治せ」

「ああいえばこついうなっ！」

それはおまえだろーが。

俺は腕の中にいるエナとの会話を楽しみながら歩いていく。

今日ばかりは家までの道のりが長く感じるぜ。

だけど早く家に行き、学校に戻らねば、俺がものすごい時間トイレに行ってる事になるんだよ。

そしたら絶対あのクソ教師に文句言われるんだよ。なるべく急ぎ足で歩いていく。

エナは殴るのに飽きたのか、手に持っている剣の腹を俺の脛に叩きつけてきた。

バ、バカヤロウ！ しゅ、しゅねが。

俺はエナを落とさないようにしながら片手を脛に当ててケンケンするように歩いている。

その時にエナの顔が視界に少しばかり入る。何で目が赤いんだ。何でそんな表情をするんだよ。

「あたし、やっぱりダメかも」

エナはすぐに泣き出しそうな声で独り言のように言いだした。
泣き出しそう？ こいつが？

「あいてがラヴァになると、冷静でいられなくなる。いつも、いつもこうだ。……だからいつまでも落ちこぼれなんだ」

俺は何も言わないで足の痛みに耐えながらまた歩き出した。

エナの話はまだ終わりそうに無い。口を挟むつもりもないけど。

「もう嫌だ！ あたしは変わるためにここに来たのに！」

変わるために？ こいつはここに任務で来たんじゃないのか？

疑問、分からない事が増えてきた。

「ユウスケ。あたし、このままずっと変わらないのかな？」

変わる、変わらない、そんなこと分からないよ。同じ状況なら俺は変わらないだろうな。

だけど、こいつは変わろうと一生懸命だ。

だからってどうと言う事でもないけど。

俺にそんなこと聞いてどうしたんだよ。ホントに頭いかれちまつたか？

こいつの悩み事なのか？

そんなこと話してくるとは思ってもいなかった俺は驚いていたが、茶化したりする気はない。

「そんなこと言ってる間は変われるわけ無い……」と思つ

「……………」

「だけど、おまえは変わる気があんだろ？俺が言えることは、焦らなくてもいいんじゃないの？いい加減、剣が邪魔だから、自分で歩いてくれ」

俺はエナを地面に下ろす。エナの目元にはわずかに涙が浮き上がっている。

この涙が俺に抱っこされてるのが嫌だったとかだったらどうしよう。

俺に見られるのが嫌なのかエナは急いで目を拭いてキツと睨んでくる。

「ユウスケに何言ってるんだあたし！うわああああ！こっちみんな！」

エナはさっきまでのやり取りを思い出して急に恥ずかしくなったのか、俺に蹴りをおみまいしてきた。

もう、大丈夫なのね。

ぐおつ。その蹴りはさっきまでの弱弱しいものではなく、いつもの威力だった。

いや、いつも以上だった。

エナをさすがに一人で帰らせるのはまずいと思って一緒に帰ってるんだが、エナは俺の方を見ようともしないで肩に剣を担いで歩いている。

さっきのやり取りがあっけからずっとこんな調子だ。会話も無く、

もくもくと歩を進めている。

我が家の大きすぎず、小さすぎず、少し大きい家についた。
どこからどう見ても普通だ。普通オブザベスト。

エナは家に先に入って、顔だけを出し、ジト目で見てくる。

「怪しいやつは入れるなって言われてます」

「それ言ったの俺だから！」

エナは本気で俺を家にあげる気がないのか、玄関を力強く閉め続ける。

俺も取っ手にしがみつき、玄関に食らいつく。

俺とエナの間で火花が散る。一進一退の攻防。ゾウ戦を思い出すかのようだ。

「エナ、おかえり」

家の中からユウナのかわいらしく澄んだ声が耳に入る。

「ユウナ？ ……ただいま」

エナは手を離し、ユウナに返事をしたようだ。

エナがドアを引っ張る力と俺の引く力はつり合っていたから止まっていたのだ。

エナが手を離れた瞬間にドアはものすごい勢いで俺に迫ってきて俺をゴキブリをつぶすようにぺちっつと潰しやがった。

昔から俺は体が頑丈で、何かあると自分よりも相手や、物を心配するくせがある。

ドアと家の壁に挟まれて大ダメージを受けながら俺は自分の体より家の心配をしたんだ。

「ユウスケ大丈夫？」

「あ、ああ大丈夫だ」

ドアを押し返して、家の中に入る。

すでにエナの姿は無く、リビングに行ってもいないので探すのは止めた。

たぶん自分の部屋……妹の部屋にでも行ってるんだろ。

「ユウスケ、ラヴァと戦ったの？」

ユウナは可愛らしい無表情顔を惜しげもなく見せながら聞いてきた。

ラヴァか。何でこいつが知ってるのかは考えても無駄だよな。

俺は冷蔵庫に行き麦茶を出してコップに注ぎ、一口飲んでから、頷いた。

「そう」

ユウナはもう俺の話の話を聞くつもりは無いのか、テレビを見始めた。

「なあ、ユウナ。おまえ、ラヴァと何か関係があるのか？」

ラヴァと戦っている間、ずっと引つかかっていた物。ラヴァがこいつの名前を言った事だ。

こいつが関係があるのなら聞きたい。

明確な答えがないのは嫌だ。だから国語はキライなんだ。理由がなくて戦うのも嫌だし。

「……関係は、ある」

ユウナはわずかに目を下に向けてそれだけだが、言ってくれた。ユウナはすまなさそうな顔を作る。

ああ、俺は甘いのかもかもしれない。甘すぎるかもしれない。だけど、別にいいだろう？

「ユウナ、おとなしくしてろよ。あと、変な人が来ても開けるなよ。あつ俺は入れてね」

ユウナの頭をかきむしりながら、言ってやった。

「……分かった。エナにもそう言うておく」

ユウナは少しだけ口元を上げてそう言うてくれた。

家を出て、学校まで走っていく。

途中、街に行ってみようかとも思ったけど、止めた。

もしも、記憶が消えていたとしても、俺が戻った事によって記憶がもどるとかもあるかもしれないし。

エナの記憶消去がどれだけ効果があるのか知らないし。

とりあえず、街のほうは後でいいや。

そのおかげか、何とか次の授業が始まる前に戻れた。

「優介なんでそんな疲れてるの？」

肩で息をしながら、教室に入るとクラスの全員がこちらを見てきた。

あんな驚いた目で見てくるなんて。

ちなみに質問してきたのはみどりだ。

絶対に、『トイレ長かったね』とかそういうこと聞かれると思っていたから、走っている間にすでに理由は考えてある。

「でが悪かったんだ。何がとは聞くな」

完璧だ。トイレに行った理由としては完璧だな。俺の頭の良さに我ながら驚いてしまう。

みどりは表現できないくらい、微妙な顔をしてそれから何も聞いてないような顔をした。

なかったことにしやがった。

「次の授業、街で何かあったらしくて自習だって」

ふーん。ってさっきの俺らのことだろ。

エナが記憶がどうたら言ってたけどやっぱり証拠残っているのか？
そうなる俺はひじょ～～～にまずい。なんたって写真も取られちゃってたし。

だけど、エナを責めるわけにもいかないよな。

こういうのは京也に頼むのが一番だけど、余計面倒になりそうだからやめとこ。

ほんとにやばくなった時に頼む事にしよ。

「それで、優介これ先生から。数学の授業サボったから、宿題のプリントだって」

1、2……5枚もかよ。

あの野郎。

くそ！ 職員室に文句言いに行つてやる！

教室のドアを開けると、それと同時に何かタツクルしてきた。俺のみぞにクリティカルヒットして俺は飛ばされる。

俺は教卓に頭を勢いよくぶつけた。俺の目に映つたのは白金の髪。それだけで俺は犯人が誰だか分かった。この学校にそんな髪をした奴は一人しかいないのだ。

「色葉！ ふざけんな！ もしも、これが俺じゃなきゃ死ぬぞ！」

「優介だったからいいじゃないですか。四時間目は自習だから遊びに来ました」

嬉しそうに笑う。こいつ、四時間目ずっと俺のクラスにいる気かよ。

自習って知ってる？ 自分のクラスでおとなしく勉強しててくれ。俺はいろいろやらなきゃいけないことがあるんだよ。

「俺もいるぞおおお！」

やめろおおおおお！ お前の顔を見ると疲れる。そのときチャイムが鳴った。ほら帰った、帰った。

シツシツシツと手を振ってみるが俺が手を仰いで暑さを紛らわしているのと勘違いしているのか完全無視だ。

俺のクラスは意外と勤勉なのかあまり教室に人がいない。みんな図書室で勉強かあ。

偉いなあ。と俺はクラスの名前も知らないやつらを尊敬していた。俺も行くかな。そんなことを考えていると、校庭の方から騒がしい声が聞こえた。

「みんなで野球やるぞ！」

『おっ！』

そこには見た事はあるが名前は知らない。俺のクラスのやつらがいた。

前言撤回。バカしかいないようだ。

俺のクラスにいるのはほとんど女子だ。しかも全員窓際で試合を

見ている。

二チームに分かれて試合をしているので昼飯かけてたりまあ、楽しんでいた。

男子は俺らを合わせて5人くらいしかいない。そのほかはみんな校庭で野球中だ。

「秋田くんは野球しないの？」

突然試合を見ている女子の一人が俺に聞いてきた。
振り返って、訊ねてくる。

「んー。めんどい。それに宿題があるし」

さっき貰ったプリントを振ってみせる。「えー。残念」とかいる女子が言ってきた。

みどりも何か言われてたけど丁重に断っていた。

ああ、よかった。みどりがいないと俺は死ぬな。色葉と京也の相手なんてできるのはいない。

「みどりに野球してもらいたいから俺を誘ったのか？」

俺とみどりはよく一緒にいるからな。

そんな理由だろうと予想してたんだが、

「ちやう」

ぱつさり斬られた。みどりの喋り方が変わっていた。なぜか京也にも白い目で見られた。

こゝこいつにそんな目で見られると死にたくなってくる。
色葉も何かぶつぶつ言っているけど小さすぎて聞こえない。

なんだかなあと思いつつ俺は机に座って課題を始めた。

10話 授業をサボった者には罰を（前書き）

テストが近づいているのを忘れてたああああ！

というわけで、次回の更新は遅くなります。

今回も遅くなってホントすいません。

とりあえず、10話まで行ったので自分で気づいた点を1話が直していきます。

それから11話を更新するつもりなのでたぶん12月まで新しく更新はできないと思います。

10話 授業をサボった者には罰を

プ、プリントが終われねえ。

一生懸命、課題に取り組んでいるんだが京也と色葉が俺にちよくちよく話しかけてくるのでうるさい、集中できない。

「みどり。助けてくれ」

必死の懇願に対してみどりはすべてを悟ったように首を横に振って、

「無理だよ。この二人がそろつと……ボンツだよ」

「爆発もんだよな」

うんうんと頷きあつ。

これを提出するのは休み明けでいらしいが、宿題って貰った瞬間その場でやりたくなるんだよ。

家では休んでたいし。そこで家に化け物飼ってるのを思い出した。……家でも休めねえかもな。

「優介えええ！ 明日の作戦会議だ！」

「優介！ 明日は一緒に遊ぶんじゃないですか？」

二人が同時に机を叩いてくる。京也は目が血走っていて、鼻息が荒い。

そして互いに睨みあう。この二人あんま仲良くないんだよな。みどりに助けを求めてみるが、みどりは一歩下がって見ているだけだ。助ける気はないか。

俺も逆の立場ならここから全力で脱出しているさ。

「色葉。俺はお前と約束してないんだけど」

「一週間前に言いましたよ！ ……心の中で」

「伝わらねえよ！」

「……明日どこ行きますか？」

「無視か！」

「優介ええええ！」

俺が色葉と話していると、京也が混ざってくる。マジでめんどくさい。

宿題がまったく進まない。京也が混ざってくる事で色葉が不機嫌になる。なんて負の連鎖なんだ。色葉は京也を睨みつけ言い放つ。

「向こうに行ってください！」

「おまええええがなっ！」

互いに火花を散らして睨みあう。二人は俺を無視して言い合いを

始めた。

ラッキー！ やつと宿題できる。

喧嘩を止める気？ もちろんない。

んな気力が合ったら宿題にすべてを費やしている。

「消えてください！」

「おまえええがなっ！」

「頭もげてください！」

「おまえええがなっ！」

止める気は……こんな中でできるか！ 二人は馬鹿にし合って、いや京也はただ返事してるだけか。

目の前で繰り広げられている口げんかを止めようと画策する。うるさくて集中できないからな。

だけど、この二人を止める方法なんて思いつかない。

地震でもおきねーかな。だけど、都合よく天変地異は起きない。起きたら起きたで嫌だけど。

そんな事を考えながら、席を立ち教室を出ようとする。俺は図書室に逃げる事にしたのだ。

「まっってください！」

「ぐおっ！」

背中からタツクルされてドアとごっつんこした。かわいくいつてみたけど痛みはひどい。

色葉は俺に突進するのが好きみたいだね。俺は痛む額を押さえていると、俺の襟を掴んで怒鳴ってくる。

「逃がしませんよ！ 優介を逃がすどこに行くかわかりません！」

「俺に放浪癖はねえ！ 図書室行っただけだ。おまえらがうるさいからな」

嫌味を込めて言っただけ。そんなのはお構いなしにやっとこさ立って、図書室に向かおうとすると背中にタツクルが。

タツクルと言うより抱きつくと言った方がいいのでむ、胸が当たっている。こいつは高一の癖になかなかの物をお……これ以上は何も言わん。

それに俺は貧乳のほつが好きなんだ。いや、男だからでかい胸にはドキドキするけど。

「優介。とりあえず、席に座りましょ。勉強教えますから」

背中を強調するように押しつけてくるので仕方なく戻る事にした。席を離れたのは少しかったが、今みどりと京也が追いかけてこをしていた。

何があったが知らないけど京也がいなのは嬉しいね。みどりは必死に逃げているけど助ける気はもちろん、ない。

さつき見捨てられてるし。これでおあいこだ。

「こじは、こじやって。ってはやっ！」

「お前に教えてもらわなくても数学はできるの。うるさくて集中できなかつただけ」

「……私の出番が……」

ものすごい勢いで落ち込んでいる。そんなのはいつもの事なのでお構いなしにどンドンやる。

幸いにも20分ほどで終わり今は飲み物を飲んでいる最中だ。俺が宿題をやっている間色葉は前の席に座って落ち込んでいた。

あの先生途中から変な質問ばっかだったけどなんだよ。アンケートトか？

「ゆ、優介。何とか勝った」

みどりが肩で息をしながら、拳を固めて上に突き上げて戻ってきた。こいつ途中から教室から違うところに行つてたから何も知らない。

「みどり、京也どこ？」

「学習室でのびてると思っ」

笑いながらピースをしてくるみどり。何をしたんだが知らないし

知りたくもないけど俺も、京也はうざかったから許す。

それにしてもみどりって喧嘩苦手だったくせによく京也に勝てたな。

「ゆうすけえ。しゅくだいおわりますたあ？」

「色葉！？ 顔、死んでるけど大丈夫か？」

「だいじょぶです。それより、明日遊べます？」

色葉が軽く首をかしげる。ここで断るとこいつ死にそうな勢いだ。まあ、家で遊ばないのならないか。明日の京也の用はいつも夜からだし大丈夫だろうな。

「分かった。だから突進してくるな！」

色葉は俺が言い終わる前に体当たりをしてきた。感情表現が激しいんだよ。

もちろん顔に男にない強調した部分が当たっている。

ああ、気持ちいい。いい匂いするし、って俺は変態か！

何とか突き放して、色葉を落ち着かせる。俺のは顔は熱をもってからのたぶん赤くなってるだろうな。

顔が赤いのがばれないように顔を色葉から外して、話を聞くことにした。

「じゃ、じゃあ、明日は午後から遊びますよ！ 二時くらいに優介の家に向かいますから」

家か。家にはエナやユウナがいるからあんまり来てもらいたくないな。ここはさりげなく変更するしかない。

「俺んちじゃちよつと遠いから町でいいだろ？ はい、決定」

返事は聞きませんと無理やりこの話を終わらせた。

午後は特にこれといった事件はなく、せいぜい京也が早退したくらいだ。放課後、うちのクラスのホームルームが長引いたせいで、色葉に捕まった。

ホームルームをした担任は俺にプリントを渡しやがったにつくきヤツだ。数学の教師だからその事はいいけどホームルーム遅れた事は許さないからな！

今は俺とみどりと色葉の三人で帰っている。ここの交差点を俺たちは左に曲がり、色葉は右に曲がる。つまりは俺たちはここでお別れだ。色葉はいつもここに来ると寂しそうにこちらを向いて手を振る。

明日も合えるのにな。ほんと、よく分かんないよな。

「それじゃあ、私はこっちですから。優介。みどり。また明日」

「明日は学校休みだから会わないぞ……いてえよ！ 耳引つ張るな！」

俺が明日は土曜だと伝えてあげたら怒った色葉。みどりは先に歩いていき、すでにいない。

あいつまた見捨てやがった。俺がみどりに心で文句を言っていると色葉が顔を覗き込むようにして睨んでくる。

人差し指を立てながら、言い聞かせるように、

「学校で言いましたよね。明日は遊びましょって」

「……さーて帰るか」

俺が帰ろうとすると襟を引っ張ってくる。服の襟ではなく髪の毛をだ。

「いたっ！ 髪が抜ける！」

「もし時間に来なかったら家まで押し掛けますから」

「わ、わかった。だから襟を放してください！ お願いします！」

若干涙目で俺が懇願すると、色葉はしぶしぶ離してくれた。痛いよお。剥げちゃうよう。

「また明日ですよ？ 忘れたら襟、焼きますから」

「忘れないから物騒な事言わないでくれ」

色葉が手を振ってきたので、仕方なく俺も振り返してやる。そうすると満足そうに色葉は笑って、帰ってくれた。

俺は気の進まないまま家へと歩を進めた。だって、家にはバケモノがいるんだもん。
エナのことだけだ。

11話 (前書き)

だいぶ時間が経ちましたが更新を再開です。
待っていた方がいたらほんとすみません。

11話

「ただいま」

家のドアを開けると、ユウナが現われた。

現れた同時にユウナはビシッ！ とリビングを指差しそこに向かった。

リビングに入ると、とにかくひどい有様だった。

昨日、みんなで食っていたテーブルにはうどんが皿に盛られて、所狭しと存在していた。とても一人分とは思えないほどの量だ。

リビングにエナはいない。俺の直感が叫んでいる犯人はあいつだと。

犯人の正体を見破った探偵気分のまま確認をとる。

その前に、

「一応聞いてくけどエナは元気か？」

この状況を見れば大乗だと思っけど。

予想通りユウナははっきりと首を縦に振る。一度ではなく二度も。

「そしてこの有様を作り出したのはエナでいいんだな？」

俺の顔を神妙な表情で見ながらまた、頷く。

ユウナが頷いたのを確認した瞬間に行動を開始する。

エナは絶対に妹の部屋に籠ってる。

階段を一段飛ばしで上がり、今までは固く閉ざされていたドアを開ける。

案の定、布団に包まってというのがエナが作り出した巣から顔だけ出しているエナがいた。

隠れたつもりでいるのかそれで。

俺が入った瞬間に一度俺と目が合ってから顔を巣の中に入れ、全身を隠す。

亀が甲羅の中に頭を隠すような感じた。

「エエエエエナアアアア！」

「ア、アタシじゃないぞ！ つい、うどんを茹でてたら楽しくなって茹でまくったわけじゃにゃいぞ！」

「確信犯め！ あの、うどんどうすんだよ！ というか、最後噛んだところが可愛いじゃねーか！」

適当に布団の中に手を入れると、エナの手らしきものが掴めたので、引っ張る。エナは一生懸命、布団を掴んで抵抗していたがすぐに引っ張り出せた。

掴みあげてエナを持ち上げる。

身長が小さいので足は床から離れて、ばたつかせていた。

「は、離せ！」

「うるせえ！ とりあえず来い」

思いつきり、引き寄せるように下まで連れて行くこととする。それにしても全然動かない。かなり元気なご様子だ。

これならおもいつきり怒ってもいいや。

俺がエナを怒鳴りつけようとしたら、エナはもじもじとします。なんだ？ と思っていいたらエナは顔をそっぽに向け、横から少しだけ見える口を尖らせながら、

「そ、そその、ひひひ、昼はありがとな」

横から見ても分かるほどに顔を赤くしていた。

抱きしめた。あまりにも愛くるしいその姿のせいであつた。

今にも壊れそうなほどに細い身体は思いつきり抱きついたとき、折れたかもと思ったけど案外丈夫だった。

もちろん、ボコられた。

「なにすんだっ！」

「待って、たんま！ ほらタイム！」

左手のひらに右手の指先を垂直に当てT字の形を作る。だけどエナの猛攻は収まらない。

こ、こつなつたらそれっぽいや理由をつけて誤魔化してやる。

「元気出たか？」

やさしく、子供を諭すようにする。
頭を撫でてやるうと思ひ手を伸ばすと、

「うっせ、誤魔化すな！」

その手ごと蹴り飛ばされた。

一瞬でばれてしまいさらなる一撃が入った。

「こんにやる！　こんにやる！」

ゲシツゲシツと俺をこれでもかと蹴ってくる。

今は反撃はしない。だって俺が悪いし。

それに実際こいつが元気そうになってくれるしな。

数分エナの激しい攻撃が続いたが、疲れたからなのか収まってくれた。

珍しく耐え切ったぞ。

攻撃がやんで思ったことはそれぐらいだ。

肩で息をしているエナを見て、一つ言っておくことがあったな。

「今度から何か困ったら俺にも話してくれよな。俺とお前は家族みたいな物だからな」

あの時　ラヴァに向かって無謀な攻撃をした時、俺に頼ってくれば良かったんだ。

そうすればあんな事にはならなかったんだからな。

「エナも思うことが合ったのか、俺から背けていた顔を俯かせてか
ら、」

「……分かった」

完全にそっぽを向きながらエナはそれだけを小さく呟いた。

「下行こうぜ。誰かさんが作ったうどんを食べなきゃな」

嫌味をこめてからかい半分で言ってやった。

エナは俺のほうにいらだちを込めた視線を向け、睨みつけてきた
が俺はそれを無視して階段を下りた。

「まて！」

「やーだよー！」

追いかけてきたエナのほうに振り返ってベーンとしてやった。

さっきまでの空気はなくなり、いつもどおりの鬼ごっこ。

俺にとっては今がいつもどおりになりはじめてるよ。

悪くはないけどな。

はつきり言ってなめていた。テーブルの上だけのうどんなら今日、
明日で食べえると思っていたんだ。

だが、現実には甘くはなかったようだ。
冷蔵庫の中にも大量だった。

きっと家中のうどんを茹でたんだ。じゃなきゃ冷蔵庫がうどんであまるはずがないもん。

「エナ！ やっぱぶざけんなああ！」

「うわあああ！」

俺は激怒してエナを追いかける。エナはリビング内を駆け回りやがるのでなかなか捕まらない。

壁側に追い込むと天井を走りまわる。

こいつには常識的な追い込みがまったく通用しないね。

だんだん馬鹿らしくなってきた。

追いかけていて息が切れてきた俺はソファに座り休む事にした。

エナは俺の前に立って腕を組み馬鹿にしたような……あきらかに馬鹿にした笑みを顔に貼り付け、見やってくる。

手を伸ばして捕まえようとすると後ろにジャンプして避けられる。それを見て俺を指さして腹を抱えて笑いやがる。

マジで、うざい。

さっき、許さないで怒ってやればよかった。俺の前を行っては来てはを繰り返しているのを見ていると後悔しかない。

俺はもう相手にしないと心に決めてユウナを見る。と、すさまじいスピードでせんべいを食っている。

テーブルの上には三袋のせんべいの亡骸があった。おいおい、この二人は人の家の食料を何だと思ってるの？

「ユウナ。そろそろ、夕飯だからお菓子はやめてくれ」

俺の顔を見て、せんべいをみる。

分かってくれたんだよね？　じゃあ、それを今すぐお菓子置き場に戻そうね。

そうそう。袋を持って、お菓子が置いてある場所に持って行こうね。

お菓子置き場まで行き、俺の方をチラッと一瞥。
どうしたんだろう。

今バリバリバリって。すごい勢いで何か堅い物を食べたような音が聞こえたんだけど……。

「おい、誰が一気に食えって言ったの！」

近くに行くとユウナは口をもごもごさせていた。

そして四袋めのせんべいの入っていた袋の中身は空になっていた、

よく、口の中切らなかつたな。ってそうじゃない。

「まだ『そろそろ』じゃない。その前に食べばおっけい」

ブイとピースを作って無表情のままこちらを見つめる。
……誰か、こいつらに常識を教えてやってくれ。

何も言う気になれなくなった俺はゆっくりと立ち上がり、夕飯の準備を始める。

もう、あれだ。あきらめよう。

あきらめるために夕飯の事を考える事にした。うどんがたくさんあるから、考える事なんてないに等しいけどな。

俺がキッチンに向かっているときにエナがひざかっくんしてきた時は暴れまくってやるうかと思った。

「あたし、うどんやだ」

シレッとした態度でエナが俺の頭にくるような事をのたまった。

「誰のせいでこんなことになったと思ってんだ！」

きっと昼もうどんだったと思われるのにユウナは何も文句を言わず、席に座っていた。

エナよ、ユウナを見習いなさいな。

ユウナはまったく悪くないのにこの現状を受け入れているのに対して、エナは自分が悪いのに文句ばかりだ。

子供だよなあ。俺と歳変わんないとは思えないよ。

ふと頭をよぎったんだけどユウナって何歳なんだ？

後で聞いてみよっと。

「ユウナ悪いな。このバカのせいで」

「別にいい。みんなで仲良くご飯を食べればいい」

何やら考え出したら止まらないような、しいて言うなら猛烈に気になる事を漏らした。

俺は細かい事は気にしないで、その考えにうんうんと頷いた。

食事の時ぐらいいは戦いやら、そんなことは忘れて楽しみたいからな。

まだ、ほざいているエナを無理やり席に座らせる。

みんなで手を当てて、

「いただきます」

「いただきます」「……いただきます」

俺が言った後に、ユウナ、エナと続いた。ユウナは無表情顔で、エナはあきらかにご立腹の様子でだ。

食事の挨拶をしてからは誰も喋らず黙々と食べる。

食事中は喋らない。それはマナーかもしれないけどさあ、俺達ってそういうのを気にしないじゃん。

そもそも、二人は常識ないし。なのにだんまりをされると空気が悪くなったように感じて嫌なんだよ。

どちらかへのコンタクトをはかるために状況確認。

自分の胸を大きくしたいのか、エナは相変わらず牛乳を飲んでいく。別に大きくなるとしてしようとしないでそのままでもいいのに。

きつと需要あるぞ。

それはいいんだけど、俺の顔に当たってるこの白く細い物は何だろう。

ポロツと顔から落ちたそれはうどんだ。

はてさて、俺の顔にうどんがついていた理由は……考えるまでも無かった。

犯人と思われるほうに顔を向けると、今まさに準備中だった。

エナが俺の顔にうどんを箸で掴んでダーツの矢を投げるようにこちらに投擲なげしてくる姿をばっちりと目に映した。

食べ物投げんな。

落ちたうどんを自分のつゆにつけて食べることにする。

もしかしてこれって間接キスかもな。

エナの箸はもちろんすでに一度使っているからその箸で掴んだうどんだもん。

二ンマリと自分でもはつきり言って気味の悪いと思える笑みを浮かべながらエナを見ると、エナは顔を引き攣らせてからこつちを見ないようにした。

うん、後悔。

次に黙々とうどんを食べる姿が様になっているユウナの方へ顔を向ける。

いくら話すことがないからって昼間のラヴァについては話す気はない。

甘いんじゃないくて、食事中は楽しくしたいからな。自分の頭の中では考えるけど。

あいつが言っていた言葉で聞き取れた『ユウナ』という言葉。それはあいつらの仲間だからなのか？ それとも単純に追われているからか？

そんなことを考えていると、俺は無意識のうちにユウナを見つめていたらしい。

「なに？」

ユウナは俺の視線に気づいたのか、小首をかしげ、訊ねてくる。おっと、これじゃあユウナに変な気を遣わせるかもしれないな。

だけどこんなプチピンチを星の数ほど切り抜けてきた俺にとってはどうという事はないぞ。

「なんでもないよ。ほら天ぶら食っていいぞ」

「なんでもなくない。ユウスケ、目が泳いでいる。どうしたの？」

おかしいなあ。うどんのつゆが入っている皿を置き、顔を僅かにだが近づかせてくる。

話すのか？ そんなこと、考えるまでもなくノーだ。

前になんでここにいいのか理由を聞いたとき悲しそうな顔をしてたのを覚えてる。

昼の事はユウナに関係あるのは本人から聞いた。ならきつとユウナは悲しそうな顔をまたするんだろうな。

そんなのは見たくないぞ。自分が気になるからって理由だけで、誰かが　ユウナが悲しむような事はしたくない。

「ああ、ちょっと宿題が多いから悩んでたんだ。それと、明日は用があるから家でおとなしくしてくれてくれよ」

嘘の中に本当のことを混ぜておく。

「……分かった。天ぶら貰う」

ユウナはじつと怪しむように見つめてきたが、ここで話をやめてくれた。

どう考えても怪しまれてるみたいだけど、これで一件落着だ。

エナ。あんま、うどん飛ばしてくんな。

エナは俺の顔を見て笑っている。花が咲くように笑っている姿は

可愛い。

そんなんで許されると思ってんのか？

エナの顔を見ているとさっきの事がどうでもよくなってきたな。暗い考えは吹き飛ばして、エナにうどんを投げ返そう。

そう決意して、いざ飛んで来たうどんを箸で掴んで投げるために腕を上げた瞬間、

「食べ物で遊んじゃダメ」

投げようとした腕を箸で器用に掴んできたユウナ。もっともだね。

だけど、ユウナよ。俺だけじゃなくてエナのヤツにも注意してくれよ。

俺の心の願いが聞こえたのか、ユウナはエナを見て、

「投げるなら口の中に投げて」

にこ。普段笑わないユウナがうつすらと笑う。可愛いなこんちくしょー！

「違う！俺はそんなことを望んでないぞ！」

そんな芸当エナにも俺にも無理だ！

「冗談、エナ。食べ物、投げちゃダメ」

そう、それだ。エナは「分かった」と言っただけで醤油差しを投げようと……冗談じゃすまないぞそれは！

それにその中には醤油が入ってるんだから食べ物のカテゴリーに入るぞ。

「まてまてまて！ ユウナ助けてくれ」

俺は何とかエナの腕を掴んで、押さえる。力は拮抗。ぐぎぎぎと俺達は歯を見せながら牽制するように睨みあう。

仕方ない。このまま争っていても飯を食う時間が消えるだけだ。俺は何が起こるか分からないユウナを召喚することにした。

「エナ。それはあんまりダメーじゃない」

敵は一人じゃないだ！？ まさかの寝返りに俺は口から心臓がでるかと思うくらいに驚いたよ。

「間違ってるそこじゃない！」

「分かった！ これでも喰らえ！」

エナはイスを持ち上げて、投げようとしやがった。エナがイスを持ち上げた時に机の物がいくつかひっくり返ったがそれどころではない。

俺も一生懸命、踏ん張ってみるがもたない。さすが、何が起きるかわからないユウナ。

最悪な状況になってしまったようだ。

どうする？ もう一度ユウナ召喚か？

コマンドは逃げる、逃げる、ユウナ召喚の三つ。

戦う事はできない。ましてやユウナを召喚した時には更なる地獄が待っているだろう。

何もする事はできない俺は自分の力を信じて、めいいっぱい戦い続けた。

戦いが終わった時にはもう飯を食う気もしないので夕飯は終了した。

テーブルはエナがイスを上げたときにいろいろ汚れてたが、今日はキレイにする気も失せている。

エナも疲れていたのか食事が終わると同時に床に就いた。牛になるぞと言ったら喜ぶかな？

ユウナもエナが寝たところに一緒に寝た。みんな疲れてるみたいだな。

ユウナもエナも生活環境が変わって疲れてるだろうな。エナに至っては昼間ポロポロにもされてたし。

とか言ってる俺もかなり疲れ気味。濃密な一日を過ごしてな。風呂に入ってからポカポカのまま俺も布団に包まったのだ。

12話

次の日の朝。とっていたんだが、枕元にある携帯を見るとあれ
ま約十一時三十分。

面倒だけど起きるか。

布団から出て、首をパキパキ鳴らす。

うううん。寝起きに体を伸ばすと気持ちいいな。

近くにある着替えを掴んで……あれ？

掴んでいた服をバサッと落としてしまった。

頭が痛い。思いつきり握りつぶされてる感じだ。

「ってマジで痛ああああっ！」

あまりの痛みに部屋の中に蹲まぐする。

「大丈夫ですか？」

いつの間にか隣には黒いゴスロリ衣装を身に纏った青い髪の女の子が、心配そうにしている。

誰だ？ と思ったけど、その子は前に一度夢に出てきた女の子と同じ姿をしていた。

エナとは対照的な青い髪に、青い瞳。

一番違うのは身長はエナと同じくせに胸が大きい事だ。

色葉ほどではないがその大きな胸を見てみると、頭の痛みも和らぐ……わけねーだろ！

今気づいたがこの声は戦いのおきにボールペンから聞こえたものと同じみたい。

つまり、この子はボールペンの人型とかか？

よくあるだろ？ そういうの。

だからこいつもそう思うのだと思う。

うん、正体は後で聞こ。

「だ、大丈夫じゃない！」

それだけ言って、また布団に横になる。

寝る態勢をいろいろ変えてみたが痛みが減る事はない。

寝る向きを変えれば痛みが和らぐかと思ったが全然変わらない。

「魔力枯渇により体への影響が出ています。ボクにはどうする事もできませんが」

魔力枯渇？ 何なんだろう。

そういえば、剣使ったときに頭が痛くなるとか言ってたな。

うん、死にそうだ。

ヘルプミー！ ヘルプミー！

世界がぐるんぐるん廻っている。目の前のゴスロリ少女が何人にも見える。

なんだこれ、こんなひどい頭痛初めてだ。

頭を抑えて横になっていると、ドアが開く音がする。気になった俺はそちらに顔を向けると。

エナが開いたドアから顔だけ覗かせて、俺の方にいぶかしんだ視線をぶつけているではないですか。

「ユウスケ！ ……誰だ？」

俺は優介だぞ。ってそうじゃないのね。この青髪美少女について知りたいのか。

どこから説明すればいいのやら。

頭が痛くなりこめかみを押さえる。だって俺だって何も知らないし。

どうしようか、考えていたらエナはまんまるな愛らしい瞳をめいっぱい吊り上げてその女の子を睨みつけ始めた。

「アルネ！ アンタもう体ができたのか！」

アルネ？ こいつの名前か何かか。

まあ、こいつがこのボールペンの化身さんを連れてきたような物だし知っててもおかしくないか。

エナが突っかかっているのは特に気にせず、頭が痛いけど、二人の会話に耳を傾ける事にしたんだ。

「チヨコもいたんだ。」

チヨコ？ ああ、お菓子ね。頭にいいって聞いたことあるな。なるほど、それを食えってことか。

でもそれで治るのか？

「あたしはエナだ！ それは昔の事だから忘れろ！」

見当はずれだった。つか、こいつの名前かよ！？ 随分と似合わない名前なこと。

昔の事って事は二人は幼馴染か何かってことでいいのか？
細かく考えてもいいんだが頭が超痛いよ。

考えるのなんてとても厳しい状況だ。

「随分と人間と仲良くなってるんだね。ボクには理解できないけど。ボクのマスターが死ぬのは困るからそろそろそっちの心配したらどう？？」

そうそう、俺の事も気にかけてくれ。

今は考え事をして誤魔化してるんだけど、本当にささやかな抵抗だ。

エナは一度俺の方を見て、またアルネという女の子の方に顔を戻す。

無視かよ！ がっかりだよ。

と思ったらまたこっちを向いて思い出したかのように駆け寄って

くる。

なんだやっぱり心配してんのか。

エナは嬉しそうな表情。例えるなら、クリスマスにサンタから好きなものを貰った子供のようなものだ。

どうも、俺の心配をしているようではないね。

「これ、『プレイム』だ！ やっていい？」

キラキラ光線を俺の顔にめちゃくちや、うつてくる。

エナがもっているのはゲームソフトで、人気の会社が発売したばかりのゲームである。

俺もまだクリアしてないんだよね。

そうじゃねえよ、

「俺の心配はないのかよ！」

「ハッ！ 忘れてた！ そうだ、これ飲め」

俺の頭痛を見てエナは思い出したかのように右手のビンを見せてきた。

中には体に悪そうな色の飴玉見たいのが入っていた。

毒だな。完全に毒だ。

エナは中に入っている飴玉を取り出し投げてきたのでそれを手で掴んだ。

恐かったが受け取らないとさらにまずくなりそうな気がしたので

それをキャッチ。

一応手が溶けたりすることはない。

「今、魔力枯渇で激しい頭、痛いんだろ!? それは魔力を回復させるキャンディーだ。いいから飲め!」

俺に飛び掛かってきて、右手から薬を奪って口に押し付けてきた。無理やり口に押し込んでくるんなら何で投げたの?

思いつきり力を出すがいつもの半分以下しか出ない。

昨日は拮抗していた力関係も今は圧倒的にエナが有利だった。

どごっ。数秒すると俺の口には毒玉が入った。

吐き出そうとしたら、一瞬で口の中で溶け、液体になる。

「うええ! なにこれ! まじいいいいい」

「やっとのんだか。まったく、めんどろなヤツだ」

完全に喉を通ってしまった。

「毒殺か! 俺が何をしたんだ!」

「毒じゃない! 勘違いするなっ。やっていい?」

またキラキラ光線を発してくる。

もう、だめだ。毒なんか飲まされて、お嫁にいけない。

「うん、もう、いいよ」

俺は投げやりにそう言って、横になる。
すると、あれま不思議。

さっきまでゴリラに頭を潰されてたかのように酷かった頭痛が、
今ではほとんど痛くない。

さらに数秒でさっきまでの痛みは完全に治っていた。
信じられない。エナのほうを見る。

「どうだ！　これがあたしが考えた魔力かいふくんだ！」

俺の部屋のテレビを点け、ゲームを起動しながら無し胸を張って
いた。

前から言いたかったことが一つあるんだが、いや実際はもっとあ
るけど。

こいつのネーミングセンスはおかしい。

俺は周りをふと見ると、気づいた。アルネとか言う剣の化身がい
ないぞ。

そして、何やら授業のときに使うペンの感触が右手の中に。

こいつのおかげもあるの……か？

感謝するのは大切だよな。ありがとな。一応、礼だ。

心でそう言うてから、生意気なエナにも礼をするかしばし逡巡。
うん、一個前の言葉を考えたらしないわけにはいかないよな。

「ありがとな。つーか何でエナ知ってたの、俺の頭痛」

「ふふん。あたしはこの症状が起こるのを知ってたんだ。……考え
てたより全然早かったけど」

エナは言い終わると俺に向けていた愛らしい顔をテレビの方へ向
けた。

かっこいいオープニングを見て「いえいつ！」とか叫んでるエナ
を見て、俺も笑ってしまう。

別にいつか。何で知ったのかは後で、いろいろ聞けば。

エナは主人公の名前を『エナ』と登録して、冒険を開始する。
プロローグを見ながら俺はさつき落とした服を拾いに行く。

エナがゲームやめるまでは時間かかるだろうな。
しゃーない。うどんしかない昼飯の準備でもするか。

拾った服に着替えながらエナのゲームプレイを確認。

うまい。このゲーム、序盤が異常に難しい。

主人公達のレベルよりもだいたいぶ上の敵が出てくるので、頭を使う。

頭を使ってバトルするなんて面倒な俺は全然先に進まず半ば諦め
ていたんだよ。

そんな事は知らないとはかりにどんどん話を進めていき、つい俺
もそれを隣で見ている。

エナは鼻歌交じりにどんどん進めて行き、最初のセーブポイント
でメニューを開きセーブ画面へと移動。

そして、一つ作っておいた俺のセーブ場所にセーブを……

「ちよつとまてや！ 他にもセーブできる場所あるのにわざわざ俺の場所の上書きするな！ 嫌がらせか！？ 俺がこつこつ一生懸命やっつてんのに！」

「嫌がらせだ！」

何とか ボタンを押す前に腕を伸ばしてエナの手を掴む。

あとコンマ数秒遅れていたら押されていて俺のいままでの冒険がパーだ。

パーって言う程の冒険はしてないけどなっ！

おらおらとコントローラーの奪い合い。

「分かったから。一つ上にセーブするから、は、な、せっ！」

しばらくの押し門等をした後エナのほうが折れてくれた。

いつもより幾分優しいのはきつと俺の体調が悪かったからだろう。

たぶん、俺の体調が万全なら問答無用でポチだろう。

毎日体調悪くなりてーよ。

馬鹿なことをしていると時間はあっという間に過ぎていく。

なんともつたいたいなことに時間を使っただよ俺は。

時間の経つ早さに嘆いているとエナが頭を蹴り飛ばしてきた。

体調が悪くなっても俺は結局こつこつ扱いなんだなあ。

「昼はアーメンがいい！」

一階で一緒に飯の準備をしていると、カップラーメンを見つけてくる。

「祈ってどうすんだバカ」

「早く作れ！ このカップアーメン作れ！」

馬鹿発言はいい加減止めてくれ。

「よく見るラーメンだ。それにうどんが大量発生してるだろうが。誰かさんのせいだな」

それにうどん作れるんだからこれも作れるだろ。言ったらうどんの減りが悪くなるから言わないけど。

「そんな腹減ってるんなら作るから手伝ってくれ」

「……むっ」

頬をぷくつと膨らませ、睨んでくる。

そんな顔しても教えてやらねえからな。

あれ、なーんか忘れてる気がするんだけどなんだっけ。

忘れてたら俺が被害をこうむるような事があつたような、なかつたような。

「ユウスケ。ん」

「ありがとな。ユウナ」

ユウナは上目遣いで皿を渡してくる。昨日の残りをすべてテーブルに置きっぱなしだったので、今はその片づけをユウナが引き受けてくれた。

「ほら、あたしも持ってきてやったぞ」

エナは水道に針の穴を通すコントロールで投げ込んだ。

「もっと丁寧に扱って、エナ」

水道を見て皿が割れてないのを確認、無事だ。

「ええ。別にいいだろう。テーブル拭いてくる」

仕事熱心なのかエナは布巾を引っつかんで、リビングへとリターン。

ユウナはぼーっとしてる。

どうやら何をしているのかわかんないみたいで俺の顔を覗き込むように上目遣い。

「ユウナ。もうやることはだいたい終わったからリビングで休んでいいぞ」

「ん。分かった」

ユウナは何度かこちらを振り返って、リビングに行き、テレビの

電源を点けた。

俺は最近流行の歌を口ずさみながら食器洗いをしていると、目の前が真っ暗になった。

別に全滅したわけではない。

なんだ、と思い顔に手をやるとなにやらぬれた物が手に付着した。これは……布巾だな。

「なにすんだよエナ」

「あつ。悪い。汚いからよこれだと思った」

「俺の顔が汚いと！ どうせ俺はみどりや京也のようなイケメンじゃねえよおおっだ！」

そのまま、その布巾で流れる涙をふき取る。

何か臭う。牛乳のような……。

「うえっ！ お前、臭いぞこの布巾!？」

「あたしは今日は飲んでない。それよりさっきの叫び、聞いてて涙でそうになった」

うっせ。

それより今はこの臭い牛乳についてだ。

今日は飲んでないけど昨日は飲んでたよな。あつ、昨日机の物ひっくり返してたな。

そんでエナのコップもひっくり返ったと。

あの後飯の時間はすぐに終了したし、その後拭いてない。

朝は飯も食ってないから誰も拭いているわけがない。ああ、この顔どうしょ。

俺は一生懸命顔を石鹸で洗う。

何分か冷水で洗っていると臭いは取れたようだ。

これで俺のイケメン面は無事だ！

イケメン。イケ、メン。

「うわああああ！ 今日あったら京也！ 主に京也ぶっ飛ばしてやる！ 今日だけに！」

「……………」

ぐすん。

いつもならエナがうるさいと言って蹴り飛ばしてくれるのに何も反応がない。

別にMだからとかじゃないけど、テンション下がっていたから元気を分けてもらいたかったのにさらにテンション下がった。

「どんまい」

ユウナはキッチンに再び来て、俺の肩に手を置く。

そしてまたすぐにリビングに戻り、ソファに座ってテレビを見始める。

……今のは痛かった。

俺は心に重いダメージを受けた後に料理の準備を再開する。
準備って程の事はないけど。

飯の時間は特に事件も発生せず、ああ、平和だあ。

13話 約束は守らないと……

家でテレビを見たりゲームしたりと普通の休日を通りかかっていると、携帯が鳴り出した。

ポケットに入っている携帯を開くと、遠城寺色葉という文字が映っていた。

襟が焼ける。髪の毛。

全部思い出した。昨日の帰りに強引に約束をさせられたんだった。

約束の時間は確か、二時だっけ。

携帯の時計はまだその三十分まえだ。

もう少しで襟が焼かれる所だった。

胸を撫で下ろしながら、色葉の電話に出る。

慌てて通話ボタンを押して携帯を耳に当てる。

「もしもし、どうした？ 約束なんて忘れてないぞ」

先に言っておけば大丈夫だろ。

『忘れてましたね。まあ、いいです。今、優介の家に向かっていますから。あと三分ほどで着くと思います』

「すぐじゃん！ 車だよな。くそっ！ 駅前集合じゃなかったのかよー」

『どうせ忘れていると思っていきますから。部屋を片付けておいてくださいね』

「三分じゃ無理だああー！」

『とにかく、行きますから』

とうかちよつと待ってくれ。

今俺の家には小学生のように小さいエナとユウナがいる。

見つかったら警察を呼ばれる。マジで。アイツが俺の話の聞くと
はまったく思えない。

部屋を片付けるよりも先に、エナたちを片付けなければ。

電話のマイク部分に手を当てて声が色葉に聞こえないようにして、

「エナ！ ユウナ！ お前等今すぐ家を離れてくれ！ 四時間くら
い」

「めんどくさい」

エナのこの反応は予測済みだ。

だけど、今すぐにここを離れてもらわねばミサイルが直撃してしま
う。

こうなったらユウナを再召喚してやる。

「頼むって！ 後で何でもするから！ ユウナ、エナを玄関に連れて
てってくれ」

「何でも？ 分かった」

ユウナは俺の言った通りにエナを玄関まで連れて行くとうとしてくれた。

エナも「分かったよ」と言っておとなしく玄関まで行ってくれた。

一安心だと思つると同時に家の外に車が止まる音が。

エナとユウナは既に玄関に向かっている。

「エナ、ユウナ二人に告ぐ！ さっきの作戦は失敗であります！
今すぐ二階に行って身を隠してください！」

即座に作戦変更を伝える。少し考えれば分かる事だった。

三分だもん。こんなやりとりをしてればすぐに三分なんて経ってしまう。

俺の焦っている理由を知らない二人が急いで家を離れてくれるわけがない。

コロコロ変わる俺の言葉にさすがのユウナもジト目で見てくる。

悪い、ユウナ。事情を説明する気はあっても時間はないんだ。

俺が叫んで少し経ってからピンポーンと家のドアチャイムがなる。

「まずい！ 今すぐに二人とも逃げてくれ！ 待て、そっちはダメだ。行った瞬間死ぬ、俺が。二階に行ってくれ、そんで外にいる人が帰るまで隠れていてくれ」

「さっきからうるさいな。ユウスケいい加減殴るぞ」

「殴ってから言うな！　ありきたりなギャグやってる場合でもないんだ！」

「あとで、あたしのほしい物買って」

「私も」

二人はそれぞれ足元を見やがる。

エナは睨んで、ユウナも少しばかり睨んでくるので仕方ない。

「だあああつ！　分かった。俺の帰る範囲で何でも買ってやる。だから、隠れてください！」

「あたし、テニスコートほしい」

「帰る範囲って言っただろうが！　ユウナ連れてってくれ」

エナと話しても埒が明かないことは分かったのでユウナに助けを求める。

「……エナ、うえいこつ。かくれんぼしてあげる」

「ユウナ、今アタシを子ども扱いしたな！」

ユウナは階段を上って行く。エナもそれを追って走って行った。

ユウナはすごいな。子供の相手の仕方が分かってらっしゃる。

俺は二人が隠れたと判断してから借金取りのように玄関をバンバン叩いている色葉のところに行った。

ドアを挟んですら怒気が伝わってくる。開けたくない。開けたら鬼が出る。

俺の考えを読んだのか外で色葉が、

「いるのは分かってますよ！早く出て来い！」

後半喋り方が変わって、本当に恐ろしかった。背筋が凍ったもん。チキンな俺は靴を適当に履き、玄関の鍵を開けた。

もちろんその前にエナとユウナの靴は隠しておいた。

そんなへまはしないのが俺だ。

玄関を開いたと思ったら俺の胸板に色葉の頭がヒットする。

ちゃんと靴を履いていなかった俺はうまく動く事ができず、後ろにぶっ倒れた。

「すぐに開けてください！まったく、ってどうして大の字で倒れてるんですか？」

「過去に戻ってみてみる。理由はよく分かるから」

俺は痛む体を何とか動かして服についたほこりを落としながら立ち上がった。

「色葉、お前がした約束覚えているか？」

「こいつは二時集合だって言ったんだぞ。」

「襟を焼くでしたっけ？もちろん覚えていますよ。マッチ貸して

ください」

右手を出してさも当然のように言っただけだ。

「誰が好き好んで自分に危険を招くような事をしなきゃならないんだよ」

「まあ、いいです。それよりどうですか？」

くるつとスピンをした。

その謎の行動に俺は首をかしげた。

「なんだ？ スケートの練習か？ それともコマにでも憧れているのか？」

俺の一言が言い終わるよりも先に頭にチョップがめり込んだ。

何か間違ったこと言ったか？

「この服ですよ！ どうですか？ 似合ってます？」

怒り顔で俺の顔を覗き込んでくる。

そんなもん、言葉にださなきゃ分からない事なんだからちゃんと言ってくれよ。

それとも何か。

あのスピンは服を見てくれって意味か？ 分かるわけないだろ。

「見たくてもお前の怒り顔がドアップなんだけど」

「ああ、もう！ これでどうですか？」

色葉は俺から一、二歩後ろに下がってから、なぜかスピソ。

服の名前は知らないが、上は水色のTシャツの上になんか白いのを羽織っている。

水色のスカートを着いている。

服はよく知らないぞ。

男物だつてよく知らないのに女物なんてまっつたく分からない。逆に知ってたらそれはそれで危険なヤツだな。

「まあ、似合つてんじゃないの？ よく知らないけど」

「最後の一言いりません！」

ブンブン頭から煙を出しながらリビングへと上がっていく。流れ作業のように行ったのに靴はしっかり並べてある。

エナにも見習ってもらいたいもんだ。

俺は靴を脱ぎ捨て　ではなくキレイに戻して、後を追っていく。

リビングではあちこち犬のようににおいを嗅いでいる人がいた。変態かと思つたら色葉だった。

「何してんだ？　とうとうおかしくなったのか、頭が」

「この部屋、女の人の匂いがします」

俺は回れ右してうずくまった。まずい！　さっそくばれた。

とうかこいつは人間じゃない。

絶対に犬だ、前世がとかじゃなくて今世が。

いやいや、ばれたって言ってもまだ姿を見られたわけじゃない。

まだ、俺が誤魔化せば大丈夫なレベルだ。

どうにかいい言葉が思いつかないか考えていると、先制してくる色葉。

「優介！ ひなひな女を家に上げてたんですか！」

「いや、ひなひなって何？」

「そんなことはいいんです！ 私との約束を忘れてひなひな女とイチャついてたんですか！」

「だから、ひなひなって何？」

「……この家の中に女の気を感じます」

「お前何者なんだよ！ ホントに！」

怖いよ。絶対人間じゃないよ。

誤魔化せるレベルをだいたいぶ超え始めて俺は冷や汗だらだら。

今ここで、二人の搜索をされたりしたらやばい。

なんとかこの危機から脱出するために脳細胞をフル回転。

「とりあえず色葉、茶でも飲んで落ち着いて、そしてゲームをしよ

「う」

色葉はゲームが結構好きなのだ。
だからこの話題をもってくれば、きつと食いつくはず。

「あからさまな話題転換しないでください。でも、まあ、いいですよ。さっきの事については後でじっくり話を聞きますから」

「……」。今日はもう帰ったほうがいいよ

「来たばっかです！」

色葉は怒ったまま、ソファに座る。

そこにお茶を持っていき、俺も飲む。

ああ、うまい。目の前に憤怒した美少女もお茶を飲んでいる。

「何のゲームやります？ 私『ぽよぽよ』ならやってもいいですよ」

うぐつ。こいつ『ぽよぽよ』強いんだよな。

誰だって負けるのが分かかっていて勝負したくないだろう？

俺も同じだ。だけど今は事情が違う。

少しでも興味のあるものでこいつをここに食い止めておかなきゃいけないんだ。

「おう、いいぞ。』ぽよぽよ』つと」

ゲームディスクを交換して電源オン。

キャラを選択して、勝負開始。

だけどすぐに負けてしまっ。

「相変わらず強いなあ」

こんだけ強いと尊敬もできる。それ以外では絶対尊敬しねえけど。

「ふふん。私の家にもあるんですよ。そんなんじゃ私に勝つのは10年早いですよーだ」

前言撤回。

ああ、いいぞ。本気でやってやる。

俺は人間の中でもハイスペックなんだ。

だから普通の人にはできないことも簡単にできるんだ。

このぐらい、俺にとっちや朝飯前だ。

色葉に馬鹿にされるとマジでむかつくからな。

その後も挑んでは負け、挑んでは負けての繰り返しだった。

俺がハイスペックなのは肉体的なものだけだった。

頭脳レベルは普通の人間よりも低かったみたい。

14話 搜索開始

ゲームをする事一時間ちよつと。

色葉はゲームに夢中で来た時に言っていた言葉をすっかり忘れて
いるようだ。

安心安心。額の汗を拭う。

ふと、色葉の一挙一動に警戒を払っていた俺は気づく。
なんで友達と遊ぶのにこんなに警戒しなければいけないんだ？

そんな細かい事はいいや。

現状は芳しい。俺のイライラはどんどん溜まってるけど。

だってゲームで勝てるのは精精十回に一回程度だ。そんなんじゃ
ストレスが溜まっていくのも無理はないと思う。

「ゲーッ、ゲーッ」

終いにはこんなことを言い続けてくる色葉が完成していた。

……今すぐ追い出して ぶっ飛ばしてやりたい。

こいつが家に帰らなきゃいけない時間 門限は小学生みたいに
五時までなんだ。

あと二時間ほどもこの地獄に耐えればいいんだけど、俺の精神力
がもたない。

だからと言って他にやることがあるわけでもない。

うんうん唸っていると、二階のほうからドカッとか何か重たいもの

が落ちる音がした。

二人の女の子の言い合うような声も耳を澄ませば聞こえる。
あの澄んだ声と子供っぽい元気な声はユウナとエナのだ。

もちろんそんな音に気づかないほどまぬけではない、色葉はギョ
ロツと目だけを動かして、天井を見上げた。

こええよ。今の眼の動きやばかったって。

「今のはなんですか？」

頑張れ俺。なんか言い訳を考えるんだ！
じゃなきゃ殺される。

だらだら、冷や汗まみれで歯をかちかち言わせながら、

「ね、ねずみじゃないかな？」

無理だ！ もっと時間があれば少しはましな言い訳も思いついた
かもしれない。

それに声がいぶ震えてしまっている。

俺を半眼で射るような視線をぶつけてくる。

首の曲げっぷりはどこの不良だよって言うほどに曲がっている。

「日本語喋ってましたよ？」

「お、俺が教えたんだ」

ばさばさばさつと服が落ちていくのを俺には当たらない位置で見
ていた。

ば、バカヤロー！ これ以上、色葉様の怒りに触れるでないわい！

服の山から出ている顔は怒りを抑えているのか、思わず顔を背け
たくなるようなほどに恐ろしかった。

「優介。犯人は半殺しです」

「俺じゃないです！」

勝手に俺を犯人に仕立て上げ、首を絞め、さらに膝で腹に蹴りを入
れるという荒業を披露してくれた。

正面から覗く色葉の顔のパーツである瞳は血走っており、口元は
冷たい笑みが貼り付けられていた。

まさか、自分の友達が18禁な顔だったなんて。

「優介。謝れば全殺しですみますよ？」

「ひ、ど、く、なってるよ！」

全殺しって何さ！ 普通にそれは殺してるじゃないか！

俺は少ない酸素を消費して一生懸命にツッコんだ。

さらに少しずつだが首を解放しつつある。

「……優介じゃないなら誰なんですか？」

言える訳がない。言った瞬間に俺は違う罪により処刑される。

あれ？　もしかして、逃げ道なくね？

だったら俺が疑われたほうがいい気がしないでもない。

「悪かった！　昨日片づけをしてそのまんまにしたんだ。だ、から許してくれえ」

「抹殺です……」

「ぎいやああああああっ！　すいません、すいません！」

涙目で正面にいる化け物に懇願する。

色葉もまだ人としての意識が合ったのか、しばし俺の顔を凝視してから手を離してくれた。

そこまで行くのに数分かったけど。

空気を吸えるってことはとてもありがたいことだったんだ。

俺は生まれてきてこの意味を初めて知ることができたのは果たしていい事だったのだろうか。

全然よくねーよ！　どんな生活送ったら空気のありがたみを知るんだ！

ともあれ、俺はこうして生きていられたんだし、まっ、いつか。

基本嫌な事はすぐに忘れて切り返すのをモットーに生きてる俺はこんな小さなこと気にしない。

じゃなきゃやってらんないし。これ以上凶暴なヤツがでない事を祈るしかないよ。

「優介、次の部屋です」

最初こそ、やばかったが母親の部屋。俺の部屋は特に事件は起きず、いよいよ最後の関門、妹の部屋。

今はエナの部屋へと変わっているがな。

もし、妹が帰ってきたら、俺は確実に死ぬだろうなあとしみじみに考えていると色葉がドアを開け放つ。

部屋の床には服が無造作に放り投げられていて、とにかく散らかっているが人が住んでいるような、生活感はある。

色葉はその部屋を見て、遠い目をして、

「わー。泥棒が入った後みたいですね」

「つまり汚いと」

「はい。勝手に探しますよ」

いまさらだろ、と言おうとしたが蹴り飛ばされる光景ビシヨソしか浮かばないので止めた。

エナに蹴られるわ、色葉に蹴られるわ、なんで俺の周りの女の子はこんなに暴力的なんだ。

俺は半ば諦めた気持ちで空　天井を仰ぐと、小さくかわいらしい足が天井の一部に見えるじゃないですか。

天井の白色にも負けないぐらいキレイな足。その足を辿っていく

と赤髪がわずかに目視できる。

おいおい、あの馬鹿は天井に張り付いているのかよ。

どこにいるかは分かっていたからばれそうになっただらフォローしよう。

とりあえず、馬鹿は放っておこう。

色葉を見てみると、ぶつぶつ言いながら、クローゼットの中を探している。

俺はやけくそ気分で前かがみになった色葉の後ろに立ち、

「青」

パンツの色を言ってやった。

色葉は、目にも止まらぬ速さで俺を蹴り、もちろん派手に吹っ飛んだ俺の向かった先は妹の大事にしていた大きなぬいぐるみがある。

ぬいぐるみというかそれは着ぐるみなんだけどな。

とにかくぶつかって壊すのはまずい。

空中で体をひねる事によって、ぬいぐるみへの直撃は免れたが、壁に激突した。

非常口マークのような格好で壁に激突した俺は頭をさすり、近くにあるでかいぬいぐるみに手を置きながら立ち上がる。

俺はすべてをあきらめた顔で色葉のほうを見ると顔をトマトのように赤くしながらスカートのすそを引っ張って押さえている色葉が
出来上がっていた。

「セクハラです！ へんたいです！ 消えてください！」

「まて！ 悪かったって！」

「バカバカ！ スケベ！」

必死に謝る。いまさらになって後悔の念が……。最初からこんなバカなことはしなければ良かった。

蹴られ続けて数分。

体が一回り大きくなってしまった……。キノコを食べたわけではない、蹴られてたんこぶでだ。

やっと落ち着いてくれた色葉は俺に謝ることもなくをミッションを再開する。

こんな変態さんがいるんだから切り上げて家に帰ってしまえばいいものの。

自嘲気味にフツと笑っていると、ふと誰かに見られている気がした。

エナか？ と思って天井を仰ぎ見るがヤツはそれどころではない。

かと言って色葉でもないとする、残ったのはユウナしかないな。

どこだと思って自分の勘を頼りに色葉とは違った意味で搜索をする。

色葉とは違う場所を探してみるのが見つからない。

それほど妹の部屋は広くはない。

視線を感じたんだからさらに隠れる場所は減るだろう。

ユウナはかくれんぼがうまいな。

俺は感心しながらもすこし意地になって探す。

まあ、ここにきて分かったんだが、この着ぐるみが怪しいなあとか、着ぐるみだから中に入れる空間があるのは当たり前。

視線は前が見えなきゃ着ぐるみの中の人は危険だらけなんだから、普通に前は見えるしな。

「ユウナそこにいんのか？」

色葉のほうを警戒しながらできる限り小さい声でくまの着ぐるみのユウナの耳があると思しき場所で話した。

「いる」

やっぱりここかあ。

ぬいぐるみは座っているがそれでもユウナの身長ぐらいはある。それにしてもかわいいなあ。抱きついちゃおっかな。

うん。抱きつこうか。

えいつ！ モフ。

ああ、気持ちいいなあ、もちろんくまの毛皮がね。

のん気にそんな事を考えていると、ぬいぐるみに ユウナに殴

られた。

着ぐるみの手のくせに意外に痛い。

ユウナは俺を最小限の動きで殴った後、囁くように、

「変態」

美声で俺の心をコナゴナに粉碎した。

お、俺ってユウナにもそう思われてたんだ……。

一度色葉の様子を確認して大丈夫だと判断してから、俺が変態じゃないとさっきと同じように小さく言うと、

「胸触った」

と返ってきた。

うそーん。全然わかんなかったよ。

「そ、それは悪かったな」

「……いい。それより熱い」

そりゃそうだ。今日はポカポカ陽気。

空気のとおり悪さと言ったらナンバーワンを争う着ぐるみの中は冬にいれば暖かいかもしれないが今は熱地獄だろう。

どうもする事ができない俺は、ただ声援を送るだけ。だから、声援を送ろうとしたときにタイミング悪く、

「優介？ どうしたんですか？」

今は怒っていないご様子の色葉が俺の前まで歩いてきてそう訊いてくる。

色葉の顔には、わずかだが汗が浮かんでいる。窓は閉め切っているから体を動かしてれば熱いは熱いよな。

少しそれが色っぽいなと思ったのは俺だけの秘密だ。

とにかく冷静に、しっかり対処すれば大丈夫だと自分に言い聞かせて、口笛を吹かんばかりにシラをきることにする。

「なんでもないぞ」

「なにかあつたんですね！」

一瞬でばれたぞ？ 誰だこいつにチクツたのは。

「優介！ 何か怪しいです！」

「怪しくなんてねーぞ」

俺は色葉の顔が近づいてくるのが恥ずかしかったので顔を横に向ける。

だってしょうがないだろ？

いつもはうざったいけど実際美人だし、そんな人に顔を近づかせられたんだぞ？

そういう理由で顔を背けたんだがどうも色葉は違う意味に取っただらしい。

俺が向けたほうにはユウナのぬいぐるみ 着ぐるみがあった。

色葉はそれが怪しいと思ったのか着ぐるみに長い手を伸ばしたので、まずいっと思った俺は慌てて手を弾いた。

もちろんそんなことをしたら睨まれました。

「何するんですか？」

それに答える事はできません。

黙っていると、もう一度手を伸ばすので俺はアタッ！ っと叫んで手を弾き飛ばした。

さつきよりも目を吊り上げる色葉。

「そ、それに振れるでないぞ！」

「なんですかその変な喋り方は」

多少語尾がおかしくなったのはもちろん自覚している。

とりあえず、目を細めて怒りを隠そうともしない色葉の表情を見ないようにながら手を掴む。

「ちょっと待って下さい！ まだ搜索は終わってません！」

色葉がいくら力があっても男の、しかも普通より数十倍の身体能力がある俺のには歯向かう事はできず妹の部屋の入り口まで移動させる事に成功させた。

「色葉、いい加減止めよう。このままだと妹に殺されちゃうよ、俺」

「だから、私一人に探させてください！ どうしても見つけないといけないんです！」

「この部屋、というか、この家には誰もいないって！」

俺は嘘をつくのは苦手だ。

だからばれないように顔を上に背ける事にした。

今の今まで忘れていたけど、天井にはエナがいたんだった。

そのエナの状態は体を布かなんかで隠していたのが半分めくれて

いて、キレイな両足がすべて丸見え。

もしも色葉に天井を仰がれるとまずいので慌てて顔を戻して、俺は妹の部屋にある時計を見る。

時計の針がさす時間は四時二十分。

これを理由に帰ってもらうしかない。

「色葉。いい加減帰ったほうがいいんじゃないか？」

少し悩む素振りを見せてから、

「……そうですね。そろそろ、私は帰りますね」

意外とあっさり帰ってくれると言ってくれたので俺はホッとした。たぶん、色葉自身も途中からいないと思ってたんだろうな。

だけど、ここまで来たらあとには引けずずっと搜索してたって事だ。

俺と色葉はそのまま妹の部屋を離れて、下に歩いていく。

実は嘘でしたとかじゃなく、本当に帰る準備を始める色葉。

なんだっただんだよさっきのは。今はなにもなかったかのように鼻歌を歌っている。

一方的に約束をされた今日だったけど、やっぱり理由も話さず家に帰すのはちよつとばかりし心が痛い。

色葉は準備が終わったのか、玄関に向かう。

俺も後に続いて靴を履き、外に出る。

俺の家の前にはでけー車が停まっている。
黒塗りの俗に言うリムジンってやつだ。

「相変わらずすげーな。おまえ命でも狙われてるのかよ」

黒服を着て、サングラスをつけた人が数人家の近くで待機している。

「あはははは」

色葉はそれを乾いたような笑いで受け流す。

堂々とした歩き方で車の中に入っていく色葉の姿はなんかすげえ
迫力がある。

ドアが閉まる前に俺の方に笑って手を振ってきたので片手を挙げて、送り返す。

しばらくするとリムジンは発車して、どんどん俺の家から離れていった。

俺はそれが完全に消えるのを確認してから肺からすべての空気を吐き出すようにため息を漏らした。

本当に、しんどかった。

何で俺がこんなことしなきゃいけないんだよ。

この後さらに面倒な事があるってのに……はあ。

再度ため息を漏らしながら家に戻って、妹の部屋までダッシュ。

「二人とも、今までご苦労であった！ 後でなんか奢ってやるよ」

入った瞬間にエナが俺の頭に降ってきて首がひしゃげる。
いい度胸だ。

片手で、床にぺたんくと座り込んでいるエナの首元を掴み上げ、顔の前まで持ち上げる。

こいつ、ほんと軽いな。腕をぶんぶん振り回しているエナの姿は面白い。

「はなせーっ！」

「離すかっ！ つーか、なんだよあの隠れ方は」

ふふんと鼻で笑ったあと、

「この世界には忍者がいるんだろ？ だから真似てみた」

俺に掴まれたまま、自信満々な態度。

ああ、忍者はいるさ。俺の友達にな。

だけど、こんなマヌケな奴じゃあ、ないぞ。

「懂れるのはいいんだけどな。実験を実践で使うな」

「完璧だったろ？」

お前の自信はどこからきてんだ。

海底か？ 宇宙か？

笑顔で満ちている顔に向けて、告げる。

「完璧なまでにクソでした」

「なんだと!」

べしっ!

俺の顔面に両の脚がヒットした。

ちっちゃなあんよがゆっくりと俺の顔にめり込んで大ダメージ。あまりの痛みに俺はエナを掴んでいた手を離すしかなかった。

キレイに着地したエナはさらに連撃を食らわせる。

俺はそれをすんでのところで避けたが、避けた先にもエナの攻撃がすでにいつていて、見事に俺にヒットした。

「おまえ、ホント強いんだよ!」

「あたしをなめんな!」

なめてねえよ。

頭に向かってきた拳をガードする。

ってフェイント!?

まんまと引つかかった俺はエナの次の攻撃のガードに遅れる。

エナの蹴りが俺の股の間にクリーンヒット。

とても言葉じゃいい表せない、あまりの痛みに悶絶した。

最後に見たのはユウナが俺に合掌してる姿だった。

気絶から復活すると外は暗くなっている。

時刻は六時三十分。

やべえ！ えーと、いつも京也の家に行くのは七時だろ。

…… 飯食わなければ大丈夫だな。

持ってくるのは携帯だけでいいか。一応例のボールペンも持ってくるか。

一通りの準備を終えて、一階に向かう。

「ユウスケ。気をつけて」

玄関を開けて出ようとしたときかわいい声が俺を呼んだ。

返事をする代わりに片手を挙げて答えてやった。

家をでて二十分ほど歩くと京也の古く、大きな家が見えてきた。忍者。

京也 京也の家族は全員忍者らしい。

何でもこの世界のあちこちに忍者はいるらしくその中の一人が京也らしい。

俺はよく知らないが給料がもらえるから手伝ってるだけだ。

よし着いた。

古びた、大きな家の門を抜けて京也の家が上がっていく。

「失礼な事を考えてるなあああ！」

家の屋根の上に京也がかっこつけて立っていた。

「とっつ！」と声を上げたと思ったたらそこから飛び降りて俺の目の前に降ってきた。

砂埃が舞い、俺は目に入らないように腕で目を守る。
服が砂だらけじゃないか。どうしてくれんだ。

「よおおおし！ ついて来おおおい！」

京也は俺の背中を押して家の中まで運ぶと、どこかに消える。
ついて来いって言ってたくせに、どこ行きやがったんだ。

まあ、この家には何度も来てるからだいたい間取りは分かっている
ので居間に向かう。

歩きたびにミシミシと床がなるのを耳に入れながら、居間に入ると、P Pを目に入れるかのような勢いでやっているみどりがいた。

「かわいいなあ。星ちゃん」

画面を鼻息を荒くしながら食い入るように見ているみどりがいた。
……前はここまでひどかったか？

俺にも気づかず黙々といや、ぶつぶつ呟いてやっているから黙々
じゃあないな。

「お前らあああ！ そろそろ、作戦会議すぞるおおおっ！」

そんな事を考えているとさつき消えた京也がやってくる。

「俺はいいんだけど、みどりがいつもより酷いんだけど」

「みどりは放っておけ。いつものことだ」

京也は一度咳払いすると、いつも纏っている馬鹿丸出しの雰囲気
がなくなる。

今から仕事が始まる。それは京也のけじめだ。

いつもは馬鹿なことしかやらない京也が真剣な表情で、話を切り
出す。

「今日はいつも通り、庭で結界を張ったのモンスター狩りだ。俺は
遠距離、優介は近距離みどりは……聞いてないからいいか」

作戦会議と言っても本当に確認するだけだ。

いつもここで俺達はモンスター エナが言うにはラヴァだが
を狩っているのだ。

そんな危険なことに本来なら足を突っ込みたくないんだけど、ま
あ、友達だしな。

「ほら、給料先払いだ。みどりはこの新作のエロゲーだ」

別に金がほしくてやってるんじゃないぞっ！

封筒を渡されて中身は確認せずにポツケにしまっ。

ああ、だけど今までは娯楽に消えていたこの金もユウナやエナの

飯代に消えるんだろうなあ。

そう考えるやる気がまったく起きなくなってしまった。
あとで食費を徴収しよう。

「わあつ。さすが京也。こついつ時だけは頼りになるね」

ホクホク顔で、それを受け取る。京也が忍者なのはもう言ったが、忍者は世界各国にいるそうだ。

もちろん社会にも普通にでている。
とあるゲーム会社の社長も忍者らしく、この新作ソフトをコネを使ってもらえるらしい。

発売数日前に手に入るので、みどりも仕方なくこの仕事を請けているのだ。
とりあえず、パッケージを見てトリップしているみどりの頭を殴る。

ニヤニヤ顔ですつと殴られている姿は恐ろしい。
妄想してるときのこいつは無敵のようだ。

さすがに腫れ上がるほど殴るとこつちの世界に戻ってくる。

「いたいよ！ 顔が腫れ上がってるよ！」

「ああ、俺が殴ったからな。行くぞ」

「……あ、そうだ。これ、貸すからやってみてよ！」

みどりはカバンから一つのゲームを PS の恋愛ソフトを取り出して、見せてきた。

まだ返事もしていないのにみどりは「はい」と言っただけ俺の手に置いてくる。

別にどこでもできる携帯ゲームの P Pソフトだから暇ができたらやってもいいけどな。

16話 準備

俺は一人むなしく、京也の家の庭を歩く。

言われたとおり来てやったがみんな暇が無くて俺は暇だ。

みどりは近くにあった木におっかかりゲームに没頭。

京也の家の庭は戦う場所だけあって広い。その庭には京也と同じ、忍者の方が数人居るのが分かった。

その輪の中心で作戦会議をしている京也の姿も見つかったが、声をかけるわけにもいかない。

はあ、とため息を吐いてそっちに顔を向けていると、前方不注意によって誰かとぶつかってしまった。

「すみません」

ここには年上の人がいる事のほうが多いのだから敬語はあたりまえ。

相手の人は俺より身長は低い人らしく、頭一個分下を見るとぶつかった人のつむじが見える。

「こちらもう少し考え事をしていな。うん？ ああ、お前が優介か。面白い顔をしている」

「表に出やがれ！」

会ってそうそう馬鹿にされた。

「そう、殺気だつな。まあ、ほらオレンジジュースだ」

「子供じゃねー！ 馬鹿にすんな！」

「確かに人間とはまた違うな」

話の先が全然見えていないが、今の俺は怒りで細かい事を考えられるほど余裕はない。

「俺の顔はモンスターののように酷い顔ですね。生きてる価値はありませんってか!？」

「そ、そこまでは言ってないし、見る観点が違うんだが……」

目の前の女の子は頭を掻きながら困ったような表情になる。

俺も怒っていたが春の涼しい夜風が吹いたおかげで、少し冷静になる。

この人は忍者の服装とは違うことから、吸血鬼だろう。

昔から忍者と吸血鬼は仲がいいらしく、一緒にモンスター退治を行っていたぐらいだ。

今日はこの人も一緒に俺たちと戦ってくれる強い味方。

とりあえず、さっきのは忘れよう。

仲良く、スマイルでいかなければ。

俺がニコツと笑うと、なぜか一歩後ずさった。

「不気味だ……どうした？」

「どうもしてねえよ！ 笑っただけだっ」

「そうか、悪かったな。まるでその笑いは車に引かれてむごい状態の力エルのように気持ち悪かったぞ」

「ここまで、苛められたのは人生で初めて……いや、まてよ。よく考えたら数え切れなくらい苛められてるぞ俺」

「なんとというか、大変な人生送っているな」

よしよしと頭を撫でてきた。なんか慰められてしまった。

目の前の女の子は髪が黒く、瞳も黒い。身長はさつき感じたとおりの俺の頭一個分小さいから身長は160cmくらいか？

あとは目立ったところはないな。胸も普通ぐらいだし。ってなんで俺はこんなこと考えてるんだ！？ 変態か。

自分の隠れた変態性に嘆いていると、作戦会議中だった京也がこちらへと向かってくる。

引きずるようにしてみどりも連れて来られてきていて、やる気のなさそうに見えるが、最初とは違って、顔はやる気に満ち溢れている。

ゲーム貰ったから、テンション上がってるんだろうな。

「イチヤイチャしている所悪いがそろそろ時間だ。アリスさんも準備をしてくれ」

イチヤイチャ？ 一方的に苛められていたあれが？
アリスさんと呼ばれた、さっきまで俺をからかっていた人はくすくすと笑いながら、

「そうか。名残惜しいがこれで終わりだな」

「惜しいもんなんてねえよ！ イチヤイチャしてねえし！」

俺の絶叫を聞いて、アリスは笑っていて、みどりは何か、見極めるような視線で見てる。

「優介がとうとう、^{リアル}三次元に……」

「おいこら。俺を二次元好きみたいに言うな」

「え、違うの？」

「新鮮に驚くな！」

なんだこのかわるかわるのボケ攻撃は。

「みんな。いい加減まじめに話を聞いてくれ」

京也が無駄話を止めに入る。
いつもなら絶対にありえないぞ、この光景。

そのおかげで、俺たち三人は改まって京也の方へと顔を向ける。

「まずは自己紹介だ。吸血鬼のアリスさんだ」

京也の自己紹介を受けて、一步前が出る。凜としたその態度は確かに可愛い　きれいだ。

さっきみたいにわけの分からない発言ばかりかしてなければ、つまりは黙ってればモテモテだろうな。

「アリスだ。知っているやつもいると思うがまあ、よろしくな」

いや、誰もいねえよ、と試ってみどりのほうに顔を向けると、なぜかみどりは知っている人に向ける顔をアリスに向けているではありませんか。

いつの間に知り合ってたんだ？

アリスはそれで終了なのか、もとの立ち位置に戻り目を瞑り始める。

代わって、京也が、

「こちらの紹介はすべて終えているから、もういいな。流れを言ってもいつもどおり結界の中でモンスターを出現させて、倒すだけだ。優介は武器どうする？」

「ああ、あるからいいや」

「ん？　いつ手に入れたんだ？」

京也の疑問顔。説明がめんどろだから、おとなしく借りて置けば

よかったな。

「拾ったんだ。この前、変なやつと一緒に」

嘘は言っていないな。京也は「問題ないならいい」とだけ言って結界を張るグループの中に混ざっていった。

みどりも特に気にしないで、京也の後についていった。
アリスはと言うと。

「……」

なにやら思案顔のままときおりこちらを見ていた。
なんだろう。

その視線は少し変な感じがする。
ま、いつか。

今はこの後の流れを確認しておこう。

まず、結界の中に入る。そして、札に封印されているモンスターを呼び出して倒すのがいつもの流れだ。

モンスターを封印できるのはもって一週間だけらしい。封印は少しずつ壊れていき、また最後は壊れる。

壊れれば中に封印されていたモンスターはまた暴れまわるから、俺たちが倒すのだ。

封印するときに倒せれば世話ないんだけどな。

都合よく倒せるようなヤツがないからこんな回りくどいやり方なんだよな。

こうして、忍者と吸血鬼は人知れず世界の平和を守っている。

「用意できたぞ」

京也がこちらに向かって手をあげる。

面倒だけど、準備ができたのならしょうがないか。

「二人とも、準備できたって」

二人に声をかけると、それぞれ別の反応を見せる。

みどりはやる気なしで、アリスは顎にやっていた手を下ろし背筋ピンで歩く。

俺は自ら望んで危険に首を突っ込んでいる馬鹿かもな。

でも、目の前で何か起きてるのに、何もしないなんて、なんか人生もつたいたい気がするんだ。

17話

「全員準備はいいか？」

紫色の結界の中で京谷の声が響き、みどり以外が頷く。

みどりは仏頂面で今にもここから逃げだしそうだ。

「全員OKみたいだな」

「よく見て！ 僕は全然頷いてないよ！」

「さて、山田さん。よろしくお願いします」

みどりが乗り気じゃないのはいつもの事だから京也もまったく相手にしてない。

山田さんと呼ばれた人は札のような物に手を触れて、何かを呟くと結界の外に出ていく。

「さて、私も準備をするとするか」

吸血鬼は戦闘時、瞳が赤に変わる。

吸血鬼の瞳が黒から、赤に変わっていく。

「何やっているんだ！ 敵はもうでているぞっ！」

へ？ 見ると、人型の右腕が剣のモンスターがでてこちらを睨んでいた。

モンスターは素早い動きでこちらへと走ってくるっていつか一蹴りで飛んでくる。

アリスの方へと飛んだそいつとの間にすかさず俺は入って剣の一撃を剣で押さえた。

「アリス早くしてくれ」

俺は今の一撃で態勢を崩されてしまった。

右手にある剣は下に下がってしまい、相手の剣は上に上げられている。

つまり、俺は次の一撃を防ぐすが無い。

「優介、当たらないように気をつけてくれ」

京也の声が耳に入り、慌てて頭を抱えてしゃがんだ。

京也はいろいろな物から刃物類の武器を作り出す事ができる力を持っている。

作られた京也の剣は勢いよく俺の方へと向かってきたが、慌てて頭を下げる事によって背中にかすっただけですんだ。

気をつけるのは京也、お前だよ。

約十本ほどの飛んできた剣のうち数本がモンスターに刺さったが、わずかに態勢を崩しただけ。

「悪かった。準備が終わったところだ」

目を真紅に染めて両手に剣を持ったその姿は女の子にこんなことを言っているのか迷うが、かっこよかった。

「私の勇姿をしかと目に焼き付けておけ」

アリスの自信満々な態度は頼もしいね。

会話をしているとそんなことはしらねーよとばかりにモンスターが走りより、右腕を振ってくる。

一撃が重いことを知っている俺は受けるのではなく受け流すようにしてその攻撃を捌き続ける。

俺に攻撃ばかりしているモンスターはだいぶ隙を見せ始めている。俺の狙いはこれなんだ。

アリスが敵の後ろから二本の刀でクロスに斬った。

あらかじめ決めておいたわけではないがうまくコンビネーションが決まった。

「ぐぬおううう……」

ちょっとは効いたか？

モンスターは顔がのっぺらなのでよく分からないが痛そうにしているようだ。

ほんと頼もしいね。

モンスターは攻撃されたほうにすぐ反応するようでアリスの方へ反転して腕で殴り飛ばす。

が、既にアリスは地を蹴って空に跳び上がっている。

このモンスターはあまり知能は無いらしい。

目の前には完璧なまでにむき出しの背中。
アリスがつけたと思われる十字の傷はふさがり始めていた。

やっぱりこいつも核を見つけないとだめらしい。
隙見せてるし斬らせてもらいますか。

右へと斬り即座に左に戻しての二度斬り。

同じ箇所を斬ったから普通なら上半身と下半身が分かれる筈だ。

だけどこいつの体は異常なまでに堅く、浅くしか斬れなかった。
俺の攻撃に反応してこちらに振り返り、殴りつけてくる。

あれ？ まだ殴ってないぞ。

おかしい、今確実に殴ってきた光景が見えたんだが。

俺が剣を両手で握り、腰の位置で構えだすと敵はようやくこちら
に反応して、さっき見たのと同じ所に殴りつけてきた。

もしかして、今俺は未来をみたのか？

戦闘中だから考えるのはあとでいいや。

攻撃の位置が分かっていたので避けるのは簡単だ。

横に多少からだをずらしてそこで少ししゃがむ。
息を吸って集中してから居合い斬り。

今度はさつきよりも力を入れたから、モンスターの右腕を斬りお
とす事に成功。

「はあああああああー！ー！」

忘れてた。さっきジャンプしていたアリスが振ってくる。

体重をすべてかけた凄まじいスピードの剣を振り下ろしてモンスターが真つ二つになった。

バックステップで跳び京也の状況を確認する。

京也の周りには無数の剣が浮かび上がっている。

忍者や吸血鬼は自由に剣を作り出す事ができる。

それによつてたくさんの剣を作り出して一斉に敵にぶつ刺すのが京也の役目。

京也は額の汗を拭いながら俺に気づき頷く。

準備ができたようだ。

「アリス！ 京也の方にこいつをぶつ飛ばすぞ！」

京也との距離は10mほどあるので一発蹴れば充分だろ。

「分かったが、最初より動きが速くなっているぞ」

一人で戦い続けていたアリスは少し焦ったような声をあげる。

確かにさつきとは違い体を器用に使っているモンスター。

もしかして今まで封印されてて体が鈍っていたんじゃないか？

それで準備体操が終わり現在本気モードってことかよ。

でも一発でいいんだ。

だったら二人で協力すればいける……はず。

とそこで俺の体だけが止まる。
これってまさかみどりか？

体が地に着いてからみどりの方を見てみるとまた手を振ってくる。
みどりの能力は一つだけ動きをキャンセルする能力を持っている。

今は体全体を止めてくれたからそうとう疲れているはずだ。
よし、さっきのは許してやろうじゃねえか。

ズザザザザザザザザザザッ！
もう見る必要もない。

京也の剣がすべて突き刺さった音だ。
俺は剣をしまい地面に座り込んで、休憩。

ふああああ。大きなあくびをして静かになった庭から夜空を見
上げる。

きれいな満月や星が空には輝いていた。

さっきまで戦ってたなんて思えないね。

「優介、僕もう帰らないと！ じゃーね」

「ああ、分かった。んじゃ、俺も帰るとするかね」

「一緒に帰る？」

「いや、少し休んでからだだから、いいぞ先に帰って」

みどりは「分かったよ」と行って家の中へと消えていった。

荷物でも取りにいったんだろ。

寝よ。

18話 吸血

地面に座り込んでポケーっとしていると、アリスがこちらに向かってくる。

「血をくれ」

アリスが俺の両肩をがしっと力強く掴んでそう言って顔を首元へと近づけていく。

なんて力だ。全く動けない。

対面に座り込んでるので座高がでかい俺は彼女の顔を上から見る形になるのであまり見えなかったがわずかにみえた顔はとても物欲しそうな顔で、一瞬拒むのに躊躇ってしまった。

別に血を上げることが嫌なんじゃない。

血を吸うときに噛まれるのが嫌なんだ。

痛すぎるんだよ！

「まで！ 許可出してないぞま、どあつ！ あぎゃあああああああ
ああーっつっ！」

いきなり俺の首筋に噛み付いてきてジュースを吸うようにチューチューしてくる。

いたいいたいいたい！

あまりの痛みに体が変な方向に曲がりそうだ。

へたに動くと傷口が拡がりそうなので動く事もできず、時間にして一分ほどが経ってから。

「……ふう、中々うまかったな。ご馳走様」

両手を合わせて、お辞儀。あまりにもキレイなお辞儀だったのでつい、見とれてしまった。

実際はお辞儀もそうだけど、整った顔から作られた笑顔のほうに見とれてたと言ってもいだろう。

「どうした？」

アリスの言葉が聞こえ、ずっと見ていたことを反省。見とれていたのをばれるのが嫌だった俺は、頭を掻きむしって、

「眠いんだ。ふあああ」

口を大きく開けてあくびをしているようにして誤魔化す。

アリスは「そうか」とだけ言って深くは関わってこなかったのでひそかに胸を撫で下ろす。

後処理を終えている京也の邪魔するわけにもいかなかったので、

「アリス。俺先に帰るわ。じゃーな」

手を振ってそこから立ち去ろうとしたが、うまく歩けずにそこにぺたんと座り込んでしまった。

あれま。なんかめまいがするぞ。
額に手をやってマッサージしてみるがあまり好転しない。

そんなんじゃない治らないのも知っているし。

「もしかして、貧血か？」

アリスの声が頭上からかかる。
そうだったよ。さっきこいつに血吸われたからが理由なんだよ。

「たぶん、そうだと思う。まずいぞ、家に帰れる気がしねえ」

うまく前が見えず、歩けない、いや立つことすらできない。
生まれたての仔牛か俺は。

「そうか、もともとは私の責任だし」

もしかして、家に運んでくれるのか？
一人では家に帰れないだろう。

だけど、いいのか。こんな暗い中女の子を一人家に帰らせるのは、
まずくないか？

俺の思考を遮るようにアリスはこちらに意味深な笑みを浮かべ、
覗き込んでくる。

舌なめずりをして両手をわきわきと動かして、

「 血の一滴も残さず吸い尽くしてやる。感謝しろ」

「何にだっ、こんちくしょおおおー！」

さっきまでの思考時間を返せ！

「いいだろう？ 私はな、苦しんでいるやつを見ると、無性に苛めたくなるんだ！ 困ってる人の姿ほど好きなものはない。特にお前は気に入った」

高らかに、偉そうに、自信満々に、腕を握り締めて宣言しやがる。気に入られてしまったらしい。

「さらりとS宣言するな！ お前のやってることは『苛め』『じゃなくて』『止め』だっ」

くそう。めまいがするのにアグレッシブなツッコミをさせないでくれよ。

誰でもいい。この状況を打破できるヤツはいないのか。

そんな祈りが通じたのか、一人の気弱そうな男の子が俺のところに来て来た。

「ゆ、優介。大丈夫？」

帰ったはずのみどりがいた。この際なぜ、今ここにいるのか知らないが、助けてくれ！

「み、みどり。助けて。俺殺されちゃうよう」

みどりは俺の状況を察して、アリスの方を睨みつける。いや、睨みつけるじゃなくてチラ見だ。

「……ア、アリスさん？」

「気安く名前で呼ぶな」

あまりの睨みにみどりは萎縮し、

「……優介。ギブアップッ！」

しゅばつと身を翻して、建物の外への道を駆けて行ってしまった。去るときにゲームを地面に置いていったのは俺に貸すといったゲームだった。

戦いの邪魔になるので部屋に置きっぱなしだったのだ。わざわざもって来てくれたその優しさで、もうちょっと、踏ん張ってくれよ。

「さて、私達を邪魔する物は何もなくなったぞ。ふん」

アリスは言葉だけ聞けば嬉しくなるような事を言う。じわじわとこちらに近寄ってくる姿は安全を保障された狩りを楽しむ姿に似ている。

もちろん狩られるのは俺だ。

走って逃げる事ができない俺はただ、尻を土で汚しながら後退するしかない。

「はてさて、どこまで逃げるれるかな？」

「京也！ 今すぐに助けてくれ！」

声が聞こえるかどうかは分からない。
でも、これ以外方法はないんだ。

いつもは金を何万も貰わない限り助けなんか求めやしない。
もしかしたら初めてかもしれないその助けは、あっさりとは無視された。

「それでは、いただくぞ」

もうだめだと。思つて目を瞑つたが一向にさっきの痛みはこない。
やるならやれよつて気持ちの俺はゆっくりと目を開く事にする。

少しずつ、開いていくと、なにやら俺の眼前には整然とした顔があった。

ぱつちりとした大きな黒い瞳はわずかに吸血鬼が力を出すときのように紅くなっている。

長い黒髪が顔に張り付いている姿は本当にきれいで、この世の物とは思えない。

もしかしたら吸血鬼はこの世のものではないのかもしれないけど。

「あれ？ 俺生きてる？」

自分の手を開いて閉じてを繰り返す。

「本当に殺すわけないだろ。それとも、お前には私がそんな残虐なヤツに見えるのか？」

頬をぶくつと膨らませる。

その怒っている顔はエナのように子供っぽくてアリスには似合わないと思っただけど普通に似合っていた。

「なんだったんだ。さっきまでは」

無駄に疲れちまったじゃねーか。それでもめまいは変わらないけどな。

「だからいつただろう?」

困ってる人の姿を見るのが好きなんだと付け足して、いたずらが成功して喜んでいる子供のような笑顔のまま俺に肩を貸してくれる。

はあ、なんだかなあ。

肩を貸してくれたときに見せた無邪気な笑顔を見ただけで全部許せるようになってしまったなんて、女ってずるい。

19話

家の付近までアリスが運んでくれる。
でもこれより先はめんどうだ。

なにがって？ 家に居る二人がな。

「もういいぞ。ありがとな」

「ふん。もう家に着くのだろ？ 最後まで運んでやる」

俺をまだ掴んだまま、離す気はないようだ。

もしも家にあげることになったら、この人に家にいる二人を説明する事になるだろう。

それは果てしなく面倒くさい。

「ほんとにいつて。なっ」

「なにが『なっ』なんだ。ここか」

会話をしていると、とうとう家に着いてしまう。

ここまで手伝ってもらったんだから家にあげてお茶の二つを出したりするのが礼儀だ。

だけどそれをどうにかするのが俺。

はてさて、ここからどう切り替えしますかな。

表札と俺を見くらべて確認しているアリスを観察するように見ながら思考を張り巡らせる。

「俺の家じゃないんだそれ」

「目が凄まじい勢いで泳いでいるが、どうした」

ぐぐぐ。

俺の周りのヤツは嘘を見抜くのが巧すぎる。

どうすっか考えていると、家のドアが開いて、

「ユウナ。ユウスケ探しに行くぞっ」

「うん。エナ、鍵は？」

「あつ、忘れた。でも大丈夫だろ。魔法でちよいちよいと」

「使えるの？」

「……よし、鍵を探すぞ」

玄関を開けて外に出てきた二人。

なんつーバットタイミングなんだ。

恐る恐るアリスの顔色を伺うように見るとアリスはくすつと笑った後、凍えるような瞳を向けて、

「変態。気持ち悪い。近寄るな」

キレイな蹴りをお見せしやがった。
俺はいい感じで錐揉み回転して飛んでいく。

そのやり取りでやっと気づいたのか、

「あつ、ユウスケ。どこ行ってたんだ！」

「ユウスケ。お腹すいた」

二人が俺のところによつてくる。

「ほう、やはりここにいたのか」

アリスが意味深な言葉を呟いてから「じゃあな」と手を振った。

頭には疑問詞だらけだが、ここまで運んでくれた相手にはちゃんと手を振って見送ってやろう。

「あいつ、誰だ？」

首を傾げながら機械的に俺を蹴り続けて述べる。

……俺を蹴るのをやめてくれないかな。

蹴るつつつても強力なやつではない。

すごい弱いから特に咎めるつもりはないけど。

「知り合いだ。それよりどうしたんだ？」

「腹へったっ」

「同じく」

エナに続いてユウナがうんうんと首を振る。

「先食ってて良かったのに」

体を起こして、携帯を開くとすでに8時過ぎ。

いつも7時にご飯を食べている俺達にとっては腹がうずくほどにへってるはず。

「作れえ！」

「分かったから腕をひっぱんなよ。」

「作れー」

エナがかぶを抜くように右腕を引っ張る。

対照的にユウナは抱きつくように体全体を使って左腕を引っ張る。

最近ユウナはエナの真似をする事があるんだよな。

悪い事を真似しないように注意しとかないと。

今は左腕に感じる慎ましい胸の感触を感じてよう。

「どうしたの？」

ユウナがぎゅいんとすばやい動きで俺の顔を覗き込んでくる。

なにがどうしたんだろう？

ユウナはその愛らしい無表情顔を変えることなく、

「鼻の下が伸びてる」

ずびしっ。

エナが俺の首をやばいほつに曲げるほどに蹴る。

「ユウナ、近づくな！ 変態だ！」

焦ったような口調でひどいことをのたまった。

「まてエナ誤解だ！」

首を九十度捻ったまま、エナの方に腕を伸ばす。

違うんだ。胸が当たって喜んでたんじゃないんだ。

ああ、ちがう。違う、いや違くない？

「知ってる。ユウスケは変態」

ざしゅっ。俺の心臓に剣が刺さったかのようなダメージが。

「ユウスケの」

小さな胸を張って、すこし拗ねたように唇を尖らし、玄関に上がっている俺の方に振り返り、

「ばあか！」

あっかんべーをして、家の奥へと進んで行ってしまった。

「なんだ、あいつ？」

「……」

ユウナは俺をおいてどんどん歩いて行ってしまっつ。
なんなの？

20話

エナとユウナが来てからだいたい一週間ぐらいが経った。その間は特にこれといった問題は起きずに平和に暮らせていると思う。

「ユウスケ、ゲームやんぞ」

夕食を食べ終えてソファでごろごろ休憩を満喫しているときにそんな掛け声が入り、次に腹への衝撃。

エナが飛び乗る感じで踏み潰してくるけど、今は果てしなくどうでもいい。

だから相手にするのは別に嫌ではないけど……嫌だなあ。

「踏むぞっ」

「踏んでる。現在進行形で踏んでる」

グダグダなやり取りをしてから、ゲームの準備をするエナ。俺はやるともやらないとも言ってないけど、おかまいなしだ。

俺が横になってるソファの隅にユウナが座ってくる。どうしたんだろう。

「ゲームやる」

「今日はやる気も何も出ないんだよな。果てしなくどうでもいい」

「変態」

「ああ、変態でいいや」

「……重症」

ユウナは俺を一度見てから、キッチンに向かう。だるい。果てしなくだるい。

俺の視界の隅には楽しそうにゲームの準備を終えているエナがいた。

「ユウスケやんぞっ」

「うーあー」

俺はなんかもう返事する気も失せたんだけど、エナは俺の腕を引っ張ってソファから落としゃがる。

「なにするんだー」

「ユ、ユウナ！ ユウスケが果てしなくだるくなってる」

俺が棒読みで叫んだのが原因か、めずらしくエナが狼狽している。頭を床に打ち付けた態勢で、エナとユウナのやり取りを観察する事にする。

「ユウナどうしよう。ユウスケたぶん魂が飛んでる」

「大変」

「いまからあたしが魂を呼び戻す儀式をするから、ユウナも手伝って」

「面倒」

「……いまからあたしは魂を呼び戻す儀式をするから、ユウナも手伝って」

「面倒」

「……いまからあたしは」

「俺が悪かったああああっ！」

はっ！ あまりにも馬鹿みたいなやり取りをリピートするもんだからついシャウトしてしまった。

これがいづらの作戦だったのか……。
二人を見ると、ほらほくそ笑んでやが……。あれ？

何でエナとユウナはいつも通りだな。エナは何で動揺してるんだ？

「ユウスケ。魂戻ったのか？」

「元々飛んでねえよ！」

「よしだったら、ゲームすんぞ」

エナの顔は今日は一段といい笑顔で飾られている。

毎日リピートのように一緒にゲームをしてるのに何が楽しいんだか、俺にはさっぱりだね。

俺が両手でコントローラーを持って、ゲームスタート。

「ふむ、私も混ぜてくれないか？」

「だったら俺の代わりにやってくれ」

「おい、何勝手に決めてんだ！ つうか、誰だ！？」

エナの言葉に俺も気づく。

今の声どっかで聞いたことがあるような。

その疑問は声のしたほうを見たときに解った。

「久しぶりだ優介」

「アリス！？ お前生きてたのか？」

「ああ、って私はどこに行ってたんだ！？」

「いや、深い意味はない、ただ言ってみただけだ。つうか、どっから入ったの？」

家の玄関の鍵はちゃんと機能しているはずだ。
だったら、入る場所といたら。

ひゅうと夜風が家の中に舞い込んで来る。

ま、さ、か！

「その窓を蹴破って入ってきた」

すつと腕を伸ばして、細く綺麗な人差し指をリビングの窓へと向ける。

見たくない、が恐る恐る目を向けると、

「うおおおおっ!」

やっぱりぶつ壊れていた。

うわああーん! 家が壊れなければいけないんだ。

「私は用があつて、ここに来たんだ」

「用?」

「お、ま、え、だれだっ!」

エナがどなっている。そうだった、この二人はまったく知らないんだっけ。

どこから説明しようか迷っていると、ユウナがエナの方に行つて、

「彼女は吸血鬼。この世界を守護している人。名前は……アリス?」

代弁して分かりやすいようにユウナが説明をする。

ユウナが吸血鬼のこと知っている理由は分からないけど、俺はそれに補足しておく。

「まあ、合ってるな。名前もそれでおっけ。どうだ、満足かエナ?」

「不満足だっ」

「ええ」

これ以上なにを説明すればいいのさ。

逆に何が知りたいのか教えてくれないと、これ以上の説明は無理だ。

その旨を伝えると、エナは不満そうな顔を惜しげもなく見せつけながら、唇を尖らせ、胸の前で腕を組みながら、

「死ね」

「他に言う事ないのね。それでアリス用はなんだよ？」

用はなんだよう。これっただじゃれかなと心で思っていると、アリスは俺の予想だにしていなかったことを告げる。

「ユウナ様。あなたを連れて行かせてもらいます」

……え？

21話

ユウナを連れに来た？

その言葉を聞いた瞬間に俺はユウナの前に立ち、ユウナを守るようにして立った。

エナも「やんのか！」と拳を構えている。

正直、今エナが武器を持ってないのは心許ない。

「命令だからな。悪く思うな」

アリスは何の説明もなしにいきなり両腕に日本刀を作り出す。

俺はエナに剣を取ってこいって言おうと口を開いた瞬間、目の前にアリスが現れる。

何とか反応できた俺は、振り下ろされた剣を白羽取りで止めることに成功。

近くで睨みあっていると、

「あんたをぶちぬいてやる！」

どうにだ。エナは床を蹴りアリスの横へと移動して回し蹴り。

アリスは即座に剣を手から離してしゃがみ、エナの蹴りを避けて悲しく振られたエナの足を掴む。

「なめすぎだ」

アリスはそう吐き捨てエナを俺に投げつけてくる。

俺が白羽取っていた剣はすでに土になっていたのでとりあえずエ

ナをキャッチすることに専念する。

エナはうまく俺の顔を蹴って体制を立て直すと、剣を出して斬りかかった。

「速いつ！ くそ、あたしより速い」

アリスはすでに俺達から距離を取っていてエナの攻撃は空を斬っただけだった。

ダメージは俺の顔面だけだよ。

「その女は……人間じゃないな」

アリスは突然剣を呼び出したことで決め付けたようだ。つうかエナは剣を自由に出したりできたんだな。

「あたしは……そう、神様なみに強いんだ！」

ん？ 答えになっているようで答えになってないぞ。

アリスはさつきと同じように剣を作り出す。

さつきと違うのは両手に作った事と、黒の瞳を赤くしたことだな。

吸血鬼の本気モード。

どうすっかなあ。

相手が知り合いだからって手加減するつもりなんてない。

そんなことをして負ければ馬鹿だからな。

まずはユウナを逃がす事が先決だな。

「エナ、ユウナを逃がしてくれ」

俺一人で戦えるかどうかなんて分からない。
いやたぶん無理だろうな。

だけど男だからこつこつけさせてくれよ。

「あたしが、んなマヌケな事するか！ それより、ユウスケ能力使え」

「能力？」

あれか？ まえに京也の家で戦ったときに見たちよつと先の光景を見るあれか。

俺の中では未来視とかそんなかっこいい感じの技だと思っ
ています。

「あ……じゃなくて、ユウスケが持っている呪われた剣はちゃんと
した使用者が使う時にだけ能力を使えるんだ」

「ちよい待ち。今呪われたって言わなかったか？」

「おう」

なんでさらつと重要そうな事を言っかなあ。

まあ、いい。ゲームで言うチュートリアル的なやつを始めたエナ。

アリスはうん、まずい。

大量の剣を生み出している。

くる。

避けられるやつは避けて、危ないヤツは自分の剣で受ける。

「前やった変なヤツどうやってやるんだ！ あぎゃあああああ
あーっ！」

頬を剣が掠める。……血がわずかに頬を伝って顎まで行く。

本格的にやばい。この世界にいくら魔法があるからって生き返る魔法なんてないだろし。

「（あれはユウスケさんが自分で編み出した技です。だから、まあ、頑張ればできますよ。それにボクはめんどうなので、寝ます）」

寝るなあああーっ！

返事は既になく俺は頑張って部屋の中を駆け回っている。

逃げててもしょうがない。

剣がアリスの両手以外にないことを確認すると、輸血パック（？）を飲んでいた。

すぐさまに攻撃をすると、アリスは後ろにステップして避ける。

俺が次の攻撃に移ろうとしたらアリスはバカみたいなスピードで剣を操る。

アリスが作る剣の円舞を、俺は目に神経をすべて集中させ捌き続ける。

そして。

「見えた！」

アリスのスカートの中が。
青いキュートなパンティーが俺の記憶メモリーに保存されると同時に蹴り飛ばされた。

「見るな！ くっ、私としたことが！」

アリスは恥ずかしそうに顔を赤く染めスカートを押さえる。
俺はこのときを待っていた！

「おらあつ！」

アリスを押し倒して、床に押さえつける。
アリスがいくらすごくても、突然男に掴まればどうすることもできない、はずだ。

それも、普通の人間より力のパラメータを振りまくった俺にはな。

「くっ、離せ！」

「離すかバカ！」

俺はなんとか押さえ込んでいるんだが。

あれ？ さつきより力が上がってないか？

「ふん。私は輸血パックを途中飲んでいたんだ。それには力を数十倍あげる薬も入っていてな。つまり、だ。薬が効き始めた私にはな、簡単に吹き飛ばせるんだ！」

無理やり暴れて俺の腕から逃れ、凄まじいスピードの蹴りを側頭部に決められた。

やば。

今のはまじでまずい。

俺はなんとかクリティカルヒットは免れたが、次の攻撃を避ける事は不可能だった。

「まあ、使った後に力が入らなくなるんだがな」

その場にぺたんとして座り込んで、アリスは愉快そうに笑う。
それはラッキーだ。

俺は力任せで体を起き上がらせ、アリスの前に行くと、

「確かに力は入らなくなるがそんな早くはなくならない」

あぎゃっ!?! 俺は高速で繰り出された拳を腹にくらって吹っ飛ぶ。

俺のバカ!

俺が苦しんでいるとアリスは立ち上がって、「形勢逆転だな」とか俺に言葉を降らす。

「あたしにまかせろっ」

そこでようやくエナ様ご登場。

ぬわああああああーっ!

奇襲をかけるために庭のほうからアリスに斬りかかったのはいいんだが、壊れていない窓を粉碎して突入してきたんだ。

それを分かっていたのか、アリスはくるりと横に回転して、エナの振り下ろした剣から逃れる。

あぶねっ！ 避けられた剣は俺へと向かってきたので横に寝返りをうつようにしてよけた。

「お前の家は随分と物騒だな」

アリスは不敵に笑ったと思ったら、俺とエナ両方から距離を取った。

見えた！

アリスは距離を取ろうと俺が未来視で見た方へと飛んだのでこちらに剣を投げる。

「なっ！？」

アリスはそちらに向かったばかりで反応することができず、腕に刺さった。

エナは打ち合わせていたように剣をアリスの首元で止める。

「まだやるか？」

俺が腹を押さえながら不敵に笑う。

「あたしの言いたかった事言っな！」

炎の弾が飛んできて俺に当たる。

手加減してくれているのか熱くもなく痛くもない。

せいぜいデコピンされたぐらいの痛みだ。

「そんで。あんたまだやんの？ あたし不完全燃焼だから付き合っ
てやんぞ」

「いや、もういい。それよりあつ！ UFOだ！」

アリスが外の夜空を指差してわめいた。
まじかよ？

「「どこ？」」

「バカだな二人とも」

俺とエナが外を覗き込むように見ると。
家の違う壁が壊れる音がする。

慌ててみると部屋の一角に丸い穴ができていて、そこにアリスが
立っていた。

「さらばだ」

アリスは手を上げてそのままその穴から抜け出る。

「なあ、エナ」

「ん？」

「この壁とか全部直せるんだよな？」

「うん。でもあたし、めん」

「めんどくさいはナシな。言ったら今度からゲームの相手しないから」

「めん！ どう！ こて！」

なんて無理やりなんだ。

エナは大剣を剣道の竹刀に見立てて振っている中、リビンググへのそのそ歩いてくるユウナを発見した。

「無事か？」

ユウナに声をかけると首を縦に二回ほど振る。

「傷を治す」

ユウナは俺に腕を向けて光をぶつけてくる。

すると、体がすこし重かったのが完璧に治った。

腕をぶんぶん回すして体が治った事を確認しながら、

「おまえ、すげえな」

「私はある程度の怪我なら治せる。でもあんまり使いたくない」

「ありがとな」

俺が言葉をかけると、頭をこちらに向けてくる。

何がやりたいのか分からなかったので首を傾げると、

「撫でて」

ユウナがめずらしく自分のしてほしいことを言った。

はつきりとこう言うのはあんまりなかったので、言われたとおり
白髪はくはつの髪を撫でる。

柔らかい。髪は羽毛布団かなにかと間違えてしまつぐらいに柔らかい。

ユウナの顔を見ると何か懐かしげな表情で嬉しそうだった。

ずっと触っていたかったのだが、途中でその手を叩かれる。

「変態！ ユウナにさわんな！」

「いや、変態じゃねえよ！ それにユウナがしてって言うからやっ
たんだよ」

「だったら、あたしにもしろ！ ほら！」

エナは勢いよく俺の顔面に頭突きをかましやがったので、ちょっとかちんときた。

「おまえ、わがまますぎんぞ！？ ちょっと黙ってる！」

「うつさい！ バーか！ バーか！」

そのまま、エナは暴れて二階に行った。

訳がわからない。バカはおまえだろーが。

22話 事件の後

アリス襲来次の日。
学校も終わり京也と話すためにクラスに向かった。

昨日のアリスの件で京也が何か知らないかそれを聞くために来たんだ。

みどりはあまり関係ないので今日は先に帰ってもらっている。

京也のクラスに入ると放課後何人かが喋っていた。

クラスを見回し、京也の姿を探すと、今一番見たくないヤツがいた。

長い黒髪を片手で掻き揚げる姿があまりにも似合っている。

うちの学校の女子の制服を来ている吸血鬼。

あまりにも滑稽なその姿は笑えばいいのか？

一応見た目は人間なんだし学校に行ってもおかしくないけど。

そいつの目の前まで歩いていきあんま話したくないけど話しかけた。

「何やってんの？ ……………アリス」

「来たか」

アリスは髪を掻き揚げて、呟いた。

なにやらフルーツの香りがあたり一面に溢れ、俺はすこし顔を逸らす。

女の子の特有の匂いはこうなんか変な感じがする。

「答えになってねえよ。それに俺の用があるのは京也に、だ」

俺がアリスの動きに警戒をしていると、

「そう警戒するな」

そんなことを言った。

昨日襲ってきた奴が目の前に居るのに落ち着ける奴が居たら目の前に連れてきて欲しい。

親の仇を目の前に行っている人の気持ちは今なら理解できるかもしれないくらいだ。

「とりあえず、ここじゃ話しにくいな。おまえの家で話すとしよう」

「誰がおまえなんか家に連れてくか。つーかなんで話し合う予定があるんだ」

「昨日のことについて知りたいんだらう？」

アリスはにやあつと嫌な笑みを浮かべる。
知りたい。

本人から聞けるのならそれに越した事はないんだが……。

「分かった、嘘か本当かは知らないが聞いてやる、さっさと話せ」

「こんな場所で話せる内容じゃないだろ。もしも聞かれたら私達は電波ちゃんだぞ」

アリスは心底嫌らしい。

俺は別に電波だろうがそもそも、な。

「俺たちはだいたい馬鹿扱いされてるから別にいいんだけど」

「私は優等生で通っているのですそれは困る。だからおまえの家にしよう」

場所を移すのはいいんだが、そこまで人の家に拘るのはなぜなんだ。

ユウナがいるからか？

「俺はおまえを信用してない。家はダメだ。これ以上言うなら帰るぞ」

はつきりと拒絶の色を見せての会話。

約束を破ったのに文句をつけてやろうと携帯を開くとメールが届いていた。

『詳しい話はアリスから聞いてくれ。アリスは敵ではない』

京也からのメールをたらたら。冷や汗が。

さっきあんなこと言っちまったぞ俺。

震えながらアリスのほうを見るとピイツと顔を窓へと向けている。襲われたのに、アリスは敵じゃないのか？

でも、京也は絶対に嘘はつかない。
だったら信用してやるうじゃねーか。

本音を言わせてもらうと他に頼るやつが居ないだけなんだけどね。
とりあえずアリスの向かいの席に座りどうしようか考える。

まずは謝ったほうがいいよな。

「アリスさつきは悪かった」

体全身を使つて謝罪の意を示す。
しかし。

「今さらなんだ？」

アリスは明らかに怒っていた。頬を膨らませて窓ガラスの方向、
俺から顔を逸らしていた。

「ええと、京也からメールきてたんだよ。アリスは敵じゃないって」

「それだけで信用するのか？」

アリスはようやくくこちらに顔を向けたが目を細めたままだ。

「あいつは普段はあれだけ嘘は絶対に言わない」

「なるほどな。利口に生きたいならそう簡単には信用しないほうが
いいぞ。……それにしても私の事はまったく信用していないんだな

……」

「今言つと信用するなつていつてるみたいだな」

「黙れ」

アリスはまた頬をぶうと膨らませ顔を背けてしまった。
後半ぼそぼそ何かを言ったように聞こえたが気のせいか？

別にいいじゃねえか。

誰を信用するか、そんなのは俺が決める事だからな。

「忘れればいいんだ。ナイスアイディア……！」

「まったくナイスじゃないな」

「じゃあ、どうすればいいんだよ！」

「そうだな、私の事を信用すれば許してやる」

そう言つてアリスは俺の目を睨んでくる。

何言つてんだコイツは。

「別に、完全に信用していないわけじゃないぞ。ただ昨日の出来事
があつたからな。多少警戒しているだけだ。どうした？」

「そ、そうか。信用はしているんだな？」

「ああ」

俺の返事を聞いた瞬間アリスはいきなり元気になる。

「なら、何か奢れば許してやる。そうと決まれば近くの店にでも行くか」

そこでふと、思った。

「今気づいたけど俺普通の反応しただけだよな。なんですごい俺が悪く見えてる？」

「いいじゃないか。ほら、行くぞ」

腕を組んでくる。クラスに残っている人から好奇のいや嫌悪と妬みの視線がずかずか突き刺さる。

アリスはもしかして学校で結構モテルの？
今まで同じ学校にいたのに気づかなかったなんて……。

「ちょ、ちょっと離れろ！」

顔を上げたアリスの顔はなんともまあ、小悪魔な笑みを浮かべていた。

うわぁ、楽しそうだ。

「いいじゃないか。ほら、適当な店に行くぞ」

俺の腕を放す気はさらさらないのでそのまま廊下を歩く事に。時々すれ違う人が食いつくように見てくるのは失礼だと思う。

もしも、このまま外を歩く事になったら俺は恥ずかしさで死ぬ事になるかもしれない。

「どうした、顔が面白い事になっているぞ？」

アリスが腕を組んだまま顔を覗き込む。

近い。こいつは気づいてやっているのか？ だったらかなり性格が悪い。

整った顔は本当に綺麗で。俺はどうしていいかわからず。

「ぐるわあああーーーーっ！」

ただ奇声を上げるしかなかった。

23話 修羅場？（前書き）

今回説明がありますが、うまくできているか心配です。

23話 修羅場？

学校を離れ近くの店 ハンバーガーショップに入る。

二人ハンバーガーとポテト、飲み物を頼んで席に座っている。

一応家に帰るのが遅くなると連絡しておいたから大丈夫だよな。

エナがものすごく怒ってたけど。

電話先から「家に連れ帰ってやる」って怒って切ったんだよな。

本当に連れ帰らせられそうでひやひやだ。

さつきからエナに警戒して若干挙動不審な感じの俺を見て、アリスが不思議そうにしている。

「そういえば、おまえの家には赤い髪の女の子は何者なんだ？」

アリスはポテトを食べながら俺が知りたい内容とは違ったが、切り出した。

その言葉に俺は頭を掻いて悩んでしまう。

何者って俺もよく知らないんだよな。

魔戦士とか、うるさい女の子とか言えればいいのか？

そんなんじゃないや誰も理解できねーだろうな。

「なんつえばいいんだろ。魔戦士でうるさい子？」

理解できないと思ってたのに言っちゃった！

アリスは俺の方を一度見て、はんつと鼻で笑う。

「はっきり言おう。医者に行け」

明言されてしまった。

俺はずうんと肩を落として落ち込んでしまう。

「いや、今ので半分は正解だ。詳しくは本人にでも聞いてくれないと俺ですら把握できていない」

「一緒に住んでいるのか？」

「……」

よくよく考えると俺の今の状況って世間からみたらまずくないか？
アリスはハンバーガーを食べ終えて、深呼吸。

質問を受け付けますよって言う空気に変わった。

「そろそろ目的を聞かせてもらっぞ」

俺は残ったジュースを飲み干すようにストローで吸いながら訊ねた。

「長い説明をするからよく聞け」

前置きをして一息吸ったあと、

「吸血鬼の中で一つの事件が起きた。吸血鬼の中ではないな。下の世界でだ。下の世界の人物がこの世界に逃げてきたある人を探して

くれと頼んできた。人探しを頼んできた人物は我々にとって重要な人物でな。本来なら要求を受けるのだが、その逃げてきた人物も我々にとっては重要な人物だったんだ。要求を受けるか、受けないかで吸血鬼のリーダーとサブリーダーの意見が分かれた。リーダーは下の世界の意見を無視すること。サブリーダーは下の世界の人物に力を貸す方へと。そして、私はリーダーの命令で逃げた人を守るにふさわしいかおまえを試すように言われて昨日は戦った」

所々知らない単語がでてきて俺は少ししか理解できなかった。

理解できたのは敵側じゃないと言っているぐらいか。
とにかく分からないところを一つずつ聞いていくしかない。

「下の世界とか吸血鬼のリーダーとか、そこんところ説明してくれ」

「……おまえ京也から何も聞いていないのか？」

じとつとした目で睨むように見てきた。

京也は……何も言っていなかったよな？

「おまえから話してくれるって」

「なるほどな、そこからか」

アリスは頭が痛そうにこめかみを押さえている。

飲み物も終わり食べる物は何もない。

すでに俺達は迷惑な客とかがしているが今は気にしない。

「下の世界はこの地球から下にあるから下の世界。異世界でいいだ

ろう。吸血鬼をまとめているのはリーダーとサブリーダー。他には？」

「逃げたやつは誰なんだ？」

もちろん、もう答えは分かっている。

ただ確認のためにアリスに聞いておいた。

「人探しの相手はユウナ・ファルセルト」

アリスは俺の考えていた人物の名前を出した。

「ってことはユウナは下の世界の人間ってこと？」

「ああ、一応断っておくと吸血鬼はこの世界の異常だから気にするな」

えっ？ 何を気にするの？ 今は、いつか。

ここら辺でちょっとまとめてみるか。

まずユウナがなんでか逃げた。それを下の世界の誰か 俺には敵だな が探す。逃げたのはこの地球。

だったら吸血鬼に手伝ってもらえばいいじゃねーか。

吸血鬼に依頼する。吸血鬼迷う。リーダーとサブリーダー喧嘩。だいたいこんな感じだろ。

まとめてみていくつか疑問がでてきた。

なんで、ユウナが逃げたのか。なんでユウナは探されているのか。

そこんどこ、聞いてみるか。

「なあ、なんでユウナが逃げたのか知っているか？」

「詳しい事は知らないが、ある程度理由は分かる」

「だったらそれを教えてくれ」

実際前まで俺はそれほど深刻なものじゃないと思っていたから無理して聞かなかつた。

だけど、今の話を聞いた限りでは、下手したら吸血鬼の半分ぐらいを相手にしねーとならないみたいだ。

理由が解れば何か解決策が見つかるかもしれないと思って訊いてみた。

アリスは意味深に入り口の方へ目を向ける。

俺もつられて、そちらへと顔を向ける。

なんとそこには、ユウナとエナがいて、こちらへと向かってきているではないか。

どうやって俺の居場所を突き止めたのかは知らないが、エナは何か店で頼んでいる。

ユウナはまっすぐに俺達のいるテーブルに歩いてくる。

アリスはふんと鼻を鳴らすと、わざとユウナが来たのに合わせるように告げた。

「ファルセルト様には生まれつき不思議な力がある。それは」

ユウナがここにつく前に強引に言っ
てしまおうとしたのか知ら
ないがそのアリスの口を少し
急ぎ足で来たユウナが、手
で押さえていた。

白い髪に黒い服。無表情顔が
板についている、ユウナ。

だけど、今のユウナはいつも
の無表情顔とは違い刺すよ
うな視線が作られてた。

もちろん向けている方向は
アリスだ。

なんか修羅場っぽくなっ
てるな。怖い怖い。

24話

なんでユウナがここにいるんだよ、つうかエナも……なんで？
俺は腕を首の後ろで組んでいるエナを睨みつける。

「あたしはなにもしてないぞ！」

むがーっ！ と腕をぶんぶん振って怒っているエナは放っておく
事にしよう。

今は普段怒らないユウナがアリスに掴みかかっている現状をどう
にかするのが先決だ。

「ユウナ落ち着けよ」

冷静に俺はユウナに普段どおり話しかける、とユウナは少し睨ん
だままだがアリスから離れる。

「勝手な事は言わなくていい。あなた達にそんなことは頼んでない」

ユウナはアリスに顔を向けず吐き捨てるように言った。

ユウナがそんな態度をとるなんて俺は驚く事しかできない。

それを聞いたアリスは少し眉を寄せる。

「ファルセルト様。あなたは間違っている。関係のない一般人を巻
き込んで理由も話さないなんて、本人にあなたがなぜ追われている
のか、誰に追われているのか、なぜ追われているのか、理由ぐらい
話してもいいと思いますが」

わざとか？ 一回「なぜ追われているのか」と言ったよな。

「私が、いつか話す」

後で話す、様な事を前にも言っていた気がするので、今まで俺はしつこく訊くようなことはしなかった。

アリスは怒り交じりの声で綴る。

「敵はもう動いています。いつ攻めてくるかわかりません。だから本来ならあなたには私達の本拠地についてほしいのです。まあ、言っても分からないだろうな」

さっきまでは敬語だったが最後はいつもどおりの口調に戻った。

アリス……もしかして怒ってる、よなあ。

なんだか、アリスの後ろに鬼が見える気がするもん。

「だから、いつか」

ユウナがいつかと言った瞬間に、言葉を遮るようにアリスが机を叩いて叫んだ。

「だから！ 今すぐ話せって言っているだろ！ それか、私達の基地に来い。そうすれば吸血鬼がお前を守ってくれる」

アリスの熱弁によって、周りの人が何人もこっちを見てくる。人があまりいない今の時間帯でも客はゼロではない。

激しく目立つ。

赤髪のエナに、白髪　じゃなくて銀髪のユウナ。まえにキレイな白髪はくはつだなんて言ったら頭を何度もばかばかと殴られた。

どうやら本人は白髪って言われるのがいやらしい。じゃなくて、とにかく見た目だけは美人の三人がきれてる。

いや一人はちゃっかりハンバーガー頼んで食ってるバカがいるけど。

言っまでもなくエナだ。

まあ、エナにはまったく関係ないんだろうな。

そんな現実逃避している間にも二人の会話はどんどん進んでいく。

「おい、ユウナ。おまえは優介をどう思っているんだ!？」

アリスは怒りで冷静さを失っているのかユウナを呼び捨てにしている。

ユウナもいつもエナが犬歯むき出しで怒るときのように怒っている。

「あなたには、こんなバケモノみたいな力がないから、分からない!　私はこの力のせいで家族を友達を、すべてなくしたっ!　あなたの吸血鬼の力はあなたが望んで手にしたものだ。あなたに私の気持ち分かるの?」

「分からない。だがな、優介の気持ちは?　結局ユウナ　ファルセルト様は自分を悲劇のヒロインかなにかと勘違いしています」

あつ、敬語に戻した。

まとめるとユウナが逃げている理由を話すのかどうかで悩んでるらしい。

別に本人が嫌なら話さなければいい……のか？
あれ。前まで俺はなんて言ってた？

確か、話すのは後でいいとかそんなことを言っていた気がするんだけど。

なのに、今は聞きたがっているのか？

どっちなんだよ、俺の本心は。

わからないけど今ここで喧嘩するのは間違っている事は分かる。

「アリス帰って。あなたに用はない」

「私はありません。あなたが彼に話すまで帰りません」

相変わらず二人の空気はどこかピリピリとしていて一緒にいるには息苦しい。

うわああああ。なんだこの空気。

エナ助けて。

俺もちょっと頭がおかしくなっているようだ。

この場で一番助けを求めてはいけない相手に助けを求めてしまった。

俺はハンバーガーを食べ終えてジュースを飲んでいるエナに目を向ける。

エナは「なに？」と心からめんどくさそうに目を合わせてくる。

「（エナこの二人をどうにかしてくれ）」

「（今気づいたけどこの空気の悪さは何？）」

エナはむしゃむしゃとハンバーガーに食いつきながら億劫そうな目つきのまま返してくる。

状況にまったく気づいていなかった！

というかまさか、アイコンタクトができるなんていやはや、俺達も仲良くなったものだな。

「（どうでもいいからこの空気をぶっ壊せるようなことをしてくれ！）」

もっと冷静だったら絶対にエナに助けを求めなかっただろう。

エナは「分かった！」と言って食い終わったゴミを机に投げ捨て、

「あんたたち聞くんだ！」

エナが芝居がかった感じで大仰に手を横に振る。

そうした後、エナは小さな胸をできるかぎり張り、俺にべしっと指を突き刺して、

「こいつはロリコンだ！ 貧乳好きだ！」

訳もわかんないことをのたまってくれた。

「なにぶつちやけちやってるの！ いや嘘じゃないけど！ ってアリスそんな変態を見る目で見えるな。店員さりげなくどこに電話して

るんだ！ くそつ。エナ後で覚えて置けよ！」

アリスは頬を染めながら俺の顔を見てくる。

本当なのか？ と言葉を目線に込めてくるアリス。

完全に戸惑っている。

このチャンスを活かし、ユウナの腕を掴んでハンバーガーショップから抜け出す。

一応、助けにはなつたな。不本意だけど。

ユウナの手を掴んで、街灯が点き始めた街を駆ける。

意外と長い時間いたことに多少ビビッたが構わずに走り続けた。

二人は追っては来ていないみたいだ。

25話

ユウナを連れ戻って逃げた後携帯に何度も着信があったので、電源を切った。

「大丈夫か、ユウナ」

エナに追ってこられるのが嫌だったので、結構な距離を走ったと思う。

普段あまり運動をしなそうなユウナにはつらかったかもしれない。疲れてると思ってユウナのほうを見てみるとまったく息を切らさないで、無表情顔を貫き通していた。

「ユウスケ、私はあなたに黙っていた」

俺の言葉は耳に入る事はなかったようだ。

ユウナは俺から手を離すと、近くの公園まで歩いていく。

俺はよく分からなかったのですがその場でユウナの行動を見ると、ユウナは公園のベンチに座りベンチの隣を叩く。

たぶん、隣に座れて意味なんだろうな。

ユウナの歩いていった場所を辿るようにしてユウナが座っているベンチまで行く。

「何が黙ってたんだ？」

隣に腰掛けベンチに背中を預けながら問うと、ユウナは俺の方を

故意に見ないようにしているのか正面を向いたまま話し始めた。

「私はこの世界の人間じゃない。ここより下の世界で生まれた」

これから話す内容はさつきアリスが言おうとしていた内容なんだとすぐに分かった。

「なあ、おまえはなんでいきなり話す気になったんだ？ さつき言われたのを気にしてんのか？」

ユウナは違つと首を横に振る。

「私はやつと決心がついた。ユウスケには迷惑をかけているのを言われて始めて気づいた。だからこれで終わりにする。私が狙われているのは私の力が原因」

ユウナは俺の方へと真剣な色が見える顔を向け、話を再開する。

これ以上俺が止めることはできなさそうだし、そもそもユウナは自分で決めているようなので黙つて聞くことにする。

「私の力は死んだ人間、動物、とにかく生き物すべてをラヴァとして生き返らせることができる」

もう、おかしいことには慣れた俺は特に驚くこともなく、思ったことを聞く。

「じゃあ、エナが襲われた？ 襲った？ ラヴァはおまえが作ったのか？」

ユウナは首を横に振り、それが間違っている事を伝えてくれた。

「ただ、ユウナはなぜか悲しそうな顔だ。」

「私は昔家族を人質にとられて、ラヴァを作っていた。そのときにラヴァの作り方が調べられ、時間をかければ作る事ができるようになってしまった」

「ええと、じゃあ、お前にラヴァを作らせるためにあのニュースの文字を書いたやつは狙ってるって事か？」

「たぶん、そう」

ユウナが作ったほうが早いのかもしいない。
「じゃなきゃ狙わないだろうし。」

「家族は？ 人質に取られてるって言うてただろ。大丈夫なのか？」
今はそっちの方が気がかりだ。
「そいつが悪いやつなのかどうかは分からないけど、ユウナがここにいるって事は……あ、訊いたあとに気づいた。」

「私を逃がすために、みんな死んだ。そして今はここにいる。でも、今度はユウスケやエナたちに迷惑がかかる」

ユウナは涙混じりの声で呟く。
「俺の心は悪い気持ちでいっぱいになる。」

ユウナは俺から顔を逸らして、公園の入り口のほうを見る。

「おい、ユウスケ逃げるなんて卑怯だ！」

「ああ、そうだ。おいユウナ様。早く私と来てくれ」

ユウナが顔を向けたほうには腕をぶんぶん振って怒っているエナとよく見えないが怒り心頭のご様子のアリスがいた。

「ユウナ逃げよう。今すぐ逃げよう」

腕を掴んで走り出そうとした瞬間、

「おい、ユウスケ（優介）」

瞬間移動でもしたのか二人は一瞬で俺の隣に移動している。

「お二人さん。お、おおおおちつけよ」

「あたしは落ち着いてるぞ。ユウスケ、なんで逃げたんだ？」

「ええ、怖かったからです、はい」

「それは誰がだ？」

エナさん、アリスさんすみませんでした、勘弁してください。

しかしそんな二人に俺の心の声はまったく届かず、右腕をエナに、左腕をアリスに捕まれ、背負い投げみたいな感じで思い切り投げられて背中を打つ。

あまりの痛み息なんかまったくできない。

二撃めが怖かった俺は這いずって、少しでも距離をとろうと動く、背中に軽い重みが。

ぎぎぎと錆び付いたものを動かすように首を回すと、エナが恐ろしい笑みを貼り付けていやがった。

「ユウスケ。あたしに頼んでおいて一人逃げるなんていい度胸してんな。沈没しろっ!」

「だ、だれか助けて! ちょっと首が折れるって! 回そうとすんな!」

体を捻じ曲げるようにしてエナを吹き飛ばそうとしたら、

「助けてやろう。死ね」

アリスに押さえつけられた。
力が強い。歯が立たない。

仕方なく無理な交渉をすることに。

「それは止めを刺すって言うんだけど……」

「それでいい。エナ、手伝うぞ」

「あんたはいらない、帰れ!」

「……よし、首をもごう」

アリスはエナに冷たくされて地味にへこんでいる様子だ。
だけどな。八つ当たりで俺の首をもごうとしないでくれ。

不死身じゃないんだぞ、俺は。

エナが俺の背中を軽く殴り、アリスが頭にチョップを食らわす。

あれ？ 二人とも随分と軽いじゃないか。

てつきりマジでやばいところまで行くのかと思ったじゃないか。

「とりあえず、ユウナが楽しそうだからいいや。許してやる」

エナは俺の上からどいて、ユウナの方へと向かった。

アリスは俺を起き上がらせて、威圧的に睨む。

「おまえはユウナ様と何を話したんだ？」

俺は体についたほこりを払いながらアリスの言葉を聞く。

つまり、事情を聞いたのかどうかそれを言いたいんだろうな。

アリスの視線を受けながらわずかに表情を緩めながら、

「ユウナの事情はたぶん全部聞いたと思う。エナにも本人から話す
だろうな」

「そうか。ところでエナはなんなんだ？ おまえの知り合いか何か？」

向こうで事情を話している様子のユウナと、それを真剣に聞いているエナ。

まあ、エナはなんだかんだで優しいやつだから大丈夫だろうな。

近くに行くと、エナが腕を組んで、うんうん頷いていた。

「ふうん。あたしは別に気にしてないからなあ。もともと戦争なんてどうでもいいし」

戦争ってなんだよ。

疑問はあつたが無視して質問。

「エナはユウナに襲い掛かったりしないよな？」

俺が確認のために訊くと拳が飛んでくる。

「当たり前。ユウナは……友達だ。当たり前の事を聞くなっ！」

「悪かったって。じゃあ、ユウナこれからは悩みができれば俺かエナ、アリスにでも話してくれ」

コクリとユウナはいつもどおりに頷いた。

よし、これで解決だな。いや、あんま解決してないけどいつか。

「ユウナ様。さきほどは失礼しました。どんな罰も受けるつもりです」

アリスは膝をつき、ユウナのまえに座り込んだ。

ユウナはそれを見て、なぜか頭を撫でた。

「ユウナ様？」

「別にいい。あなたのおかげで決心がついた。ありがとう」

「へ？ いやいやいや。私はいろいろ失礼なことをしました。だ

」

「別にいい。ユウスケ、そろそろ帰る」

ユウナはアリスを放置して俺の腕を掴んで公園を出て行くつもりだ。

「ユウナ様！ 置いていくな」

あつ、また敬語じゃなくなっちゃった。

俺はさすがにアリスがかわいそうなのでユウナに声をかける。

「ユウナいいのか？ あいつ、なんか悲しい感じになってるぞ」

「かまわない。私は怒っていない」

「……もしかして、怒ってる？」

「怒ってない」

うん、本気じゃないと思うけど怒ってらっしゃる。

「あたしは別にいいと思うけどな。まあ、腹減ったし、さっさと帰るぞ」

「私もおなかすいた」

こいつらは自分に正直すぎると思う。

なんとなくいたたまれなけどこいつらに逆らって勝てるとはまったく思わないのですまん、アリス。

俺達は仲の良い家族のように三人並んで家に帰った。

26話 料理という名のモンスター

大変まずい状況になってしまった。

あれから何日か経ち俺の家を取り巻く環境に変化が起こった。

まず、俺の家に護衛だとかでアリスが居座りました。

俺も抵抗したんだが、ユウスケの負担が減るのならとユウナが許可を出してしまい、いつの間にか家の人数が一人増えた。

と言ってもアリスが来てからはまだ一日しか経っていないから特に問題は起きていない。

今日は京也達と共に放課後学校に残って、いろいろはしゃいでいたので家に帰るのが遅れた。

そしたら。

「ふんふんぶん」

家の一角 キッチンが魔の巣窟へと変わってしまった。

なんか紫色の霧に囲まれて、ときおり魔女のような不気味な笑い事が耳に届いてくるのだ。

「ピーピー！ 全員集合！」

俺はすぐさまに二階の俺の部屋にエナとユウナを呼びつけた。さすがにやばいと感じてすぐに集まってくれた。

キッチンで料理をしているのはアリスだ。
あいつはどうかやら料理が下手らしい。

「お、おまえらあれなんで止めなかったんだよ！」

「と、止めたっ。だけど、なにか言つと無言で剣飛ばしてくんだっ
！」

エナがその状況を思い出したのか体を抱くようにして怯えている。
隣のユウナへ顔を動かすと無表情顔に怯えの色がわずかにうかが
える。

一体俺がいない間に何があったんだよ。

「アリスは止めようとする」と『もう少しでできるから我慢してくれ』
って」

何を我慢するんだ。もちろんもう少しでご飯ができるよって意味
だろうな。

ただ俺には「もう少しで胃の中の物をすべて出せるぞ」って意味
に聞こえてならないぞ。

お、恐ろしい。

「ユウスケ。何かいい案はない？」

ユウナがそう言ったのに対して、俺自身、顔を歪ませるしかなか
った。

なにも思いつかない、打つ手がない。

料理が下手なやつっていうのは大抵自覚していない。
というか、何をどう血迷ったらキッチンが紫色の霧に包まれるんだ？

さつき見た光景は思い出すだけで胸がいがいがしてくる。
いい案じゃないけどあるとしたら、

「食わない、だよな」

ただそれをどうするかだ。俺達はそれぞれ頭を悩ませる。
誰も何も言わなくなった静かな部屋は外の音がよく聞こえる。

『みんなできたぞ。早く下りて来い』

ドアによって声が阻まれ小さくなっているはずだがアリスの声はよく透き通っていて
耳に届いてしまった。

「一つ作戦がある」

焦りだした俺達はユウナの呟きのように小さな声に一縷の望みをかける。

だけどユウナの言った作戦はエナとユウナが助かって俺は死ぬかもしれないものだった。

「作戦決行はアリスがこの部屋のドアを開けた瞬間。合図は私が出す」

ユウナの小さな声が部屋に響く。

トントンと階段を上ってくるアリスの足音が一步近づいたたびに死

刑へと近づいていく俺。

そして俺の部屋の前で足を止め「入るぞ」と言い、ドアを開け放つ。

「うー」

ユウナの残酷な一言が俺の体にのしかかる。
仕方なく俺は言われたとおりに、現れたアリスへと抱きついた。

「　　っ!?!」

突然抱きつかれたアリスは顔を真っ赤かんにして驚いている。
その隙にエナとユウナはアリスを超えて下の階へと向かう。

作戦は至って簡単。

俺がアリスを怒らせ、アリスを二階に足止めしている間に二人が夕飯と言うなのモンスターを排除する。

被害は俺だけ。

現実逃避から戻り、アリスの様子をうかがう。

アリスは全身を震わせて、怒っている？　みたいだ。
さ、作戦通りだ。これで俺は全身ボロボロ決定だ。

「そ、そのいきなりこういうことをしないでく、くれ」

体を震わせ体全身を赤くしているんじゃないかってぐらいに顔を赤くしているアリスは俺が想像していたのとは違った態度を見せる。

てつきり剣でぐさぐさいたぶるのかと思っていたんだがすつげえ
恥ずかしそうにしていた。

何か見てるこつちが恥ずかしくなってしまうぐらいに。

「ああ、悪い。ちょっと足を滑らせちまったんだよ」

これは俺が今の一瞬で考えた考えうる最高のいい訳だ。
こつすれば少しは許してくれるかもという俺の期待は……なぜか
あっさりぶつ壊れた。

ピシシッ！ と凄まじい音を立ててアリスの顔が引き攣る。

それと同時に体からさつきまでの赤さは消え、顔には猛烈に冷たい
表情を浮かべている。

「さっきにはおまえの意思はないのか？」

いまいち状況が分からないがまったく感情の籠っていない機械の
ような声は聞いただけで鳥肌がたつ。

意思はありすぎている。

だけど、正直に言ってしまうえばそれこそバットだ。バットエンド
なんだ。

だから、心苦しいけど嘘をつく。

「いや、ほんと悪い。足何かにぶつけて躓いちまったんだよ。やつ
ぱ部屋はちゃんと掃除しないと。うんうん」

腕を組んでしきりに頷いていると、冷や汗も少しは収まってくる。

だけど、アリスは恐ろしいことをしやがった。

アリスは無言で腕を振ると、ストーン、足元に剣が突き刺さる。
俺はそれを見て、引き始めていた冷や汗が噴火した。

27話 料理という名のモンスター 2

「つまり、おまえの意思は一割も入っていないんだな？」

糾弾するように、威圧的に睨んでくるアリスは両手に剣を持って軽く素振りをする。

なに！？ なんなの！？

俺の頭の中は疑問符で埋め尽くされている。そりゃあやばい。頭の中が疑問でいっぱいになってもアリスはそんなの関係なさそうな感じで剣をふる。

頭を悩ませながらアリスの怒りにまかせた一撃を避ける。理解ができない。

意志がないならああ、偶然かならしょうがないなあ。で、済むと思ってたのに……。

「たぶん、入ってないです、ヒイツ！」

アリスは両手の剣を適当に振り回す。

紙一重で怒りに任せた一撃を避け這うようにして部屋を後にする。

作戦変更だよ、こんちくしょうー！

あいつらは果たして任務を遂行したのか？

「おい、優介逃げな！」

ズガガガガッ！

階段を降りると同時に階段の一段目に剣が数本、床に刺さる。

もしもあと少し階段を降りるのが遅かったら……想像したくない
ね。

剣が階段に刺さって階段が壊れた！　なんてもう嘆かない。

魔法を使えば自分で直せるしな。

「ユウスケ！　こっち終わったぞ！」

外へ逃げるために玄関の方へ向かっていた俺の背中に元気なエナ
の声がかかる。

どうやら向こうの作戦は終了したようだ。

俺は呼吸をしてからアリスのほうにできるかぎりの笑顔で振り向
く。

「アリス夕飯食おうぜ！」

なるべく明るく語りかける。

アリスは階段を降りたところで剣を数本浮かせていた。

聞こえてるよね？

まだ怒り顔だったが数秒後に俺の言葉がようやく頭に届いたらし
い。

途端にさっきまでの憤怒の形相を変え、嬉しそうに綻ばせる。

「あ、ああ。そうだったな。夕飯だったな」

剣を消し、何度か考えるような素振りを見せる。

「なら、私の料理を食べて感想を聞かせてくれ。それでさっきのはナシにしてやる」

「お、おおっ」

どうしよう。もしも向こうに行つて料理がなかったらどんな反応をするんだろう。

ユウナの作戦ではエナとユウナが平らげたことにするんだっただけど……大丈夫か？

アリスなりには一生懸命作つてたんだもんな。一口くらい食つてやつても……いや、死ぬか。

悪いと思う気持ちもあつて何とも言えない気分だった俺は、しかしそんな心配はリビングに行つてすぐに消えた。

あんぐりと口をあけてリビングの上に残っている料理というなのモンスターを震える指で指差す。

なんで残っているんだよ、一人分。

俺がいつも食べる場所に一人分の食事が置いてあるのですがそれはいつたいたいんですか？ お供えですか？

エナとユウナに詰め寄つて詰問してやりたいのだが。

「エナと、ユウナ様は『刺激的だった』というありがたい感想をくれたぞ。ほらさっさと食べる」

アリスが俺の隣に座って本当に嬉しそうに微笑んでいる。横目で二人を見ると胸を押さえて苦しそうにしていた。

捨てるだけでもあの被害か。

アリス、あんたは美人だ。

できれば料理がうまい美人になってほしかった。
ここまで来たら腹を括るしかないよな。

俺は青と赤を混ぜた紫色に近い謎の固形物を箸で掴み、ゆっくりと口元に運んでいく。

臭いだけで頭がいたい。手をあげて呻いているエナやユウナの様に俺もなるのか？

ゴクリ。

恐怖で息を吞んでしまった。

心なしか鼓動が速まっている。

落ち着け俺の心臓。大丈夫だ一応食品だ。

自分に言い聞かせて、俺は特に何も考えずキッチンのほうを見てしまった。

あれは何、だ。

ボーリングボールが半分削られておいてあった。

……冷や汗が止まらないよ。

「な、なあ。あそこにあるボーリングボールのようなものは何だ？」

俺が訊くとアリスはしまったといった顔を作った。

なんだそれ。やっぱり俺への嫌がらせか！？

「そ、そのあれは隠し味なんだ。まさか、見られるとは……。これじゃあ、隠した意味がないじゃないか！」

怒る視点が全然違う。

「そもそもあんなもんいれねえよ、クソツたれ！」

俺は掴んでいた物体を皿に戻した。

多少はギャルゲーの主人公みたいな気分で食ってやってもいいかなとか思ってたけどあれは俺のキャパシティーを億単位で外れてる。

だけど隣の悪魔さんは許してくれない。

俺がおいたブツをアリスが自分の箸で掴んで、

「ほ、ほら食わしてやる。あーん」

顔を紅潮させながら箸の下に手を置き、俺の顔の前まで持つてくる。

俺の顔を見ないようにわずかに逸らしながら、着々と近づけてくる。

俺は食ってはいけないのに、なぜか口を開けてパクリ。

食感はゴリゴリ。

チョコクッキーが入っているかのようにゴリゴリしている。

そんな食感をどこか客観的に考えていると。

エナがどかどか走ってきて、アリスと俺の間に割り込む。
どこか怒っているみたいだ。

「あんた離れる！ ユウスケ、あたしが食わせてやる」

こいつには何か言ってやりたい事があつたな。

「オマエノセイダロ」

俺は意識が朦朧としてきた。あれ、死ぬのかな？

「ほら、食べえ！」

ゴミ箱にゴミを投げ入れるように口に固形物を押し込んでくる。
それを食べた瞬間、ブラックアウトした。

地獄の日から何日経っただろう。
今朝、エナに起こされるといふ珍しい出来事があった朝食の場での事。

四人でテーブルに座って食事をしている最中に、俺の携帯に連絡があった。

誰だろう、見たことのない番号だ。

電源をおして「もしもし」と出ると、

『優介くんですか?』

どっかで聞いたことのある声、どこだっけな。

「あー。失礼ですが誰ですか?」

俺の声を聞いた少女は笑ってから、

『自己紹介がまだでしたね。私はレンニャーです。エナちゃんの一応母親です、義理ですけどね。あと学校の先生です。あと荷物届けに行きましたよ』

荷物って言うとおのちっこい女の子か。

って、あれで母親!? つうか、

「エナの!?!?」

「あたしが何だ！」

思わず声に出してしまいエナが髪を逆立たせながら飯を食べる。残りの二人も俺の声にわずかに反応して聞き耳を立てているね。

「エナちよつと待ってくれ。詳しくは後で話す」

エナの方はとりあえず放っておき電話に向き直る。

「それで母様は何か御用ですか？」

ふざけていってやると笑い声が耳に入る。

『あははは。これから話すことはエナちゃんには絶対に言ってはダメですよ』

レンニャーさんはふざけたように笑った後、真面目な声で続ける。

『エナと同じ魔戦士育成学校の生徒の一人、リンゴという女の人。上の世界からそちらの世界へと行きました』

はい、でました。上の世界ってなんなんだよ。つつか学校って。

前にエナは行ってないって宣言してたよな。

「ええと、レンニャーさん訊きたい事があるんだけど上の世界ってなに？」

『エナちゃんからやつぱり聞いてないんですね。はい、上の世界って言うのは私達魔戦士がいるところ。下の世界と仲が悪いです。まあ、私もエナちゃんもそんなの気にしてないんですけどね』

まじかよ。俺はエナを見るとエナはクエスチョンマークを頭に複数浮かべる。

まあ、こいつがユウナと仲良くしているのが一番の理由だよな。

「じゃあ、この地球はなんていうんだ？」

『もちろん上と下の間なのですから、地球です』

「全然もちろんじゃないから！」

うん、エナの母親だ。義理らしいけど。

『冗談です。そこは中の世界。上と下とも仲は悪くない、いろいろな意味でそこは中の世界です』

「なるほどね。詳しい事はよく分からないが、リンゴってやつがこっちの世界へ来るとなにかまずいことでもあるのか？」

最初の話題へと戻る。

レンニャーさんは少し困ったような声で、

『リンゴちゃんはエナちゃんと仲が悪いんですよ。もしもリンゴちゃんがこの世界にいるって知った瞬間にエナちゃんはリンゴちゃんと戦うと思いますよ』

なんだよ、ただの喧嘩か。

俺はもつと深刻な事を想像していたのでちよびつと安心。

「聞きたいことがあるんですが、いいですか？」

『いやですよ』

俺はにこつと苦笑いしたまま固まってしまった。

『冗談です。なんですか？』

くすくすといたずらが成功した子供のよ様な笑い声が聞こえる。

おいおい、今は結構ひどいぜ。

俺はとにかく思いつく限りを詰問する。

「なんで携帯の番号知っているんですか？」

『エナに教えてもらいました』

勝手に教えんな！

「この剣？ ボールペンってなんですか？」

『呪われています。装備を外す事はできません』

「まじめにお願いします」

俺がそう伝えると一度間を置いてから。

『そーですね。あなたのは魔戦士がもつ『アーム』という物の亜種と言つのが一番分かりやすいかもですね。『アーム』は魔戦士しか使う事ができないはずだったんですがあなたのいる地球に昔私が落としちゃったんですよ。慌てて回収したんですが地球は随分と荒ん

でいたらしく、あらゆる憎悪などで『アーム』はちよつとワルになつてしまつていて、人の姿にはなるわ、なつたと思つたら愛想がないわで、結構困つてたんですよね』

はふうとため息を携帯にかけたのか、ぼふうと変な音が出た。耳にわずかなダメージだよ、こんちくしょー。

「もしかして、俺厄介事を押し付けられたの？」

『いえいえ、私達を選んだのではなく、その剣を選んだんですよ。剣は人間に憎しみを覚えていきます。あなたの持つてる剣も同じだと思いますけどまあ、頑張ってください』

「ええ、投げやりだな」

『はい、私今忙しいんですよ。後で電話してください』

「くそ野郎！ あんたがかけてきたんだろっが！」

『野郎じゃないですよ。ではでは』

「あつ　ちよつと待つてつて……切りやがった」

リダイヤルしてみてもかからない。

俺は頭を振つて、今のは忘れよう。

細かく考えるのは嫌いなんだ。

エナには黙つてないとだよな。

ちらとエナを見ると楽しそうにくるくる回りながら食事をしてい

る。

人がいろいろ頭を悩ませている間も随分と楽しそうだな。

「誰からの電話だったんだ？」

アリスが気になるのかよけいな事を聞いてくる。

「なんでもない」

短く一言で言ったのが悪かったのかもしれない。
アリスはさらに怪しんだ目で俺に質問してくる。

「相手は女だったな。誰だ？」

わーお、耳がいいね。

はあ、仕方なかった俺は唯一の女友達である色葉の名前を借りる
事にした。

「色葉だよ。ほら、何組だったか忘れたけどよく俺のクラスに遊び
に来るやつだ」

「いや知らないが、まあ、いい。なんだったんだ？」

「特になんでもない」

結局こう言うしかなかった俺は味噌汁を啜って誤魔化す。
うまいな。

「今日は誰が作ったんだ？」

俺はこいつらが来てから朝食を自分で作る事がなくなった。
大抵エナがご飯を作っているのでエナの方を見てみるが首を横に
振る。

となると、

「…………ユウナか？」

コクリ。満足顔のユウナがえっへんと胸をわずかに張る。
ないけどな。

「優介。そろそろ学校に行つたほうが良くないか？」

アリスは壁にかけてある時計を見る。

確かに。いつもはこの時間に家をでているのでそろそろ出たほう
がいいかもな。

「むう。あたしも学校に行きたい」

「だったら自分の故郷に行けばいいだろ」

口をついて出た言葉。

エナは俺の言葉を訊いて悲しそうに目を伏せた。

さっきまで元気に訳のわからない踊りを繰り出していたくせに、
今では固まってしょぼんとしている。

「…………あそこに行つてもつまらない」

エナは淡々と告げてリビングから出て行った。

階段を登る音がしたので二階に向かったはずだ。

どうしたんだ。俺が行った言葉が悪いのか？

周りの二人も理由は分かっているように首を曲げているだけだ。

「行く、か」

俺はこの空気から脱出するためにイスから立ち上がる。

「アリス先行っててくれ、ちょっとエナと話してくる」

「……そうか。まあ、遅刻しないよう気をつけるんだな」

アリスが出て行くのを最後まで見ずに俺はエナの後を追う。

二階に行き、エナの部屋を覗くと体育座りして落ち込んでいた。

「おーい、どうしたんだよ」

俺の問いかけにエナはどう跳んだのかわからないが跳び俺にドロップキック。

横っ腹にめり込んで俺は壁に直撃だ。

「どうもしてない！ ユウスケはさっさと学校に行け！」

げしげしと俺を踏んでくる。

痛い痛い！ ごめんって、ほんともう学校行くから！

「あたしも後で学校に行ってやる！」

ズバツ！ 見事な回転と共に蹴り出した足が俺を吹き飛ばし、いい感じに階段を転がり落ちてしまう。

……死ぬかもしれない。

体を起こしてどこか傷がないか調べてみたがまったく無事だ。

丈夫過ぎるぞ、俺。

「大丈夫？」

俺が無様に転がり落ちる音を聞いてか、リビングからひょこっと顔を出しているユウナ。

「だ、大丈夫だ。あと何かエナがご機嫌斜めだから気をつけてくれ」

「分かった。これ……」

ユウナは弁当箱を両手で持って、とことこ俺のところまで歩いてくる。

ついでにかばんも持ってきてくれている。

二つを受け取って、感謝。

「ありがとな。この弁当もユウナが作ってくれたのか？」

うんうんと二度頷く。なるほど大事な事だから二度言いますってことか。

ユウナは本当にいい子だなあ。

俺はホクホク気分で学校に赴いた。

28話(後書き)

話もそろそろ終わりに近づいています。
新しいのもかこうと思っっています。

29話

「今日は私の家に来ませんか？」

昼休み。

ユウナが作った弁当をつつきながら俺とみどりのところに来た色葉が宣言した。

みどりは特になにも言わずにもくもくと購買のパンを食べている。ちなみにいつもはいる京也は今日はいない。

アリスは学校ではまったく俺に関わる事をしないので今はこの三人で食事を取っている。

色葉は自分で持ってきた弁当を俺の机に置いて食べています。

「それは俺に言ってるのか？ それともみどり？」

俺が確認で訊くと色葉は箸を啜える。

「私は優介を誘っているんですよ？ みどりは……うん、さようならですね」

「僕は今日はやるゲームがあるから別にいいよ。優介楽しんでおいでよ」

なんだそれは。俺が死地に赴くのを安全圏で見守っているつもりか？

まあ、今はユウナの愛情籠ったお弁当を食べているのでテンシヨ

ンは高いので。

「別にいいけど。また、急だな」

「そ、それは特に理由はありませんよ。たまには優雅にお茶でもしませんか？」

はっ、鼻で笑い飛ばしてやる。

優雅になんて言葉は色葉から一番遠いと思うんだ。

じゃじゃ馬とかなら合ってるな。

「放課後迎えに来ますから逃げたら怒りますよ？」

「分かってるって。そんじゃ」

「まだ帰りませんから。昼休みはずっとここにいますから」

ええ。俺は疲れた表情を作る。

作るというか本当に疲れるんだ。

結局昼休みの終わりを告げるチャイムがなるまで他愛もない話を続けた。

俺は言われたとおり教室の自分の席に座って色葉がくるのを待っていた。

「優介待ちました？」

「待ちすぎてイスと同化するところだった。さて、行くか」

カバンを担いで教室の入り口で嬉しそうに綻ばせている色葉の所まで行く。

何の会話もなくそのまま校門までいき色葉の家の大きな車に乗り込む。

リムジンって実在してたんだ。

車に乗っているとときも色葉は何も言わずときおり寂しそうな表情になっていた。

「どうしたんだ？ 腹でも減ったか？」

からかい混じりの声で俺は隣に座っている色葉に訊くと、色葉はははと乾いた笑いを浮かべるだけだった。

なんか空気が悪い。

俺と色葉がこんな話しにくくなったことなんか今までにないぞ。

気にしないようにして外の景色をいつたい何分見ていたのだろうか。

いつの間にか色葉の家の豪邸についていた。

「相変わらずでけーよな」

もう、驚くこともない何度も見たことのある色葉の大きな家。

「別にでかくないですよ？ 普通です、普通」

「いやいや、これででかくなかったら俺の家は犬小屋か？」

「でも、この家はどちらかというところ小さいですよ？」

「ああ、知ってる」

こいつの家はこれはなんだ？ 別荘みたいなものだ。
本家はもっとでかい。

家の入り口まで車で移動する。

俺は自分でドアを開けようとしたら、

「どうぞ、お嬢様？」

男の執事のような人が外からドアを開けてくれた。

「俺は女じゃないし、あんたわざとだろ」

「いえいえ、冗談じゃないですよ」

中性よりの顔たちの金髪ヘアの男の人は俺より歳上みたいだ。
敬語、敬語っと。

「ゴーニさんこの人が優介です」

色葉が俺の紹介をしてくれたので俺は頭を下げる。

「秋田優介です。ええと」

俺が言いよんでいるのを見て、察してくれたゴーニさんは綺麗

にお辞儀をしながら。

「ゴーニです。最近色葉様の家に仕えることになりました、優介さんの話は色葉様から聞いております」

ゴーニさんは何か含んだような笑いで色葉を眺める。

俺もつられてそちらを見ると顔を赤らめてわたわたしている色葉がいた。

「ゴ、ゴーニさん！ 余計な事を言わないでください！」

「失礼しました。とりあえず、二人とも中に入ってください」

ゴーニさんは悪びれた様子もなくすくすく笑ったまま中に入っていく。

一体全体何が起きているのかさっぱり俺は首を傾げるしかないね。

色葉よ。なぜ俺の方をちらちら見て顔を赤らめているんだ？

理由を教えてくれ。

放心状態の色葉は「早く入りますよ！」とか言っただけで俺の腕を引っ掴んで家へと誘導する。

首どころか体を捻るほどに俺は、色葉が顔を赤らめている理由が分からなかったが色葉に従って中に入っていた。

大きな部屋の中で俺は紅茶を飲んで適当に話をしている。
あんな紅茶って好きじゃないんだよなあ。

「優介ゲームでもします？」

「うーん、お前の家にあるゲームでお前に勝てるやつが一個もない
気がするんだけど……」

色葉はかなりゲームが強い。

色葉の家にあるゲームで勝負でもしてみろ。

負けっ放しストレスマックスの状態で家に帰る事になるだけだ。

「たまにはこうやってのんびりと過ごすのもいいだろ」

世間話でもして時間を潰すなんて何て平和なんだろう。
宣言どおり俺達は他愛のない話をし続ける。

そんな時に俺の携帯がポケットで震える。
誰だろう。

携帯に出る前に一言色葉に入れてから、出る。
相手はアリスだ。

『今すぐに家に戻って来い……ごぶ』

最後に何か吐き出した音がしたぞ。

だけど、アリスの声があまりにも真剣だったのでふざけた事を言
える様子じゃなかった。

「どうしたんだよ。早く用件を言ってくれ」

『ユウスケバカ！ あたしだ！』

電話の相手が代わった。

話を通じるとは思えないが訊いてみる。

「いきなり焦った様子でアリスが電話して来たんだがどうしたんだ？」

『あたしも、よく分かんないんだけど……』

なら電話をアリスに戻してくれ。

『ユウナがいないんだ！』

「お、おい。詳しく教えて！」

携帯を握りつぶすようにして怒鳴る。

色葉に驚かれちまうよ。と思って色葉のほうを見るがない。代わりにゴーニさんがいた。

まあ、いいや。

『それなんだけど。さっきこの家に魔戦士が一人来たみたいなんだ。そいつが家を破壊してアリスがやられてユウナが……いない？』

魔戦士がユウナを攫ったって事か？　なんで？　どして？

いや、でもユウナのいた世界と魔戦士のいる世界は敵同士なんだ

から攫われてもおかしくはないのか。

「とりあえずアリスに代わってくれって!」

『アリス気絶して話せる状況じゃない』

エナが淡々と告げる。

くそ。考えるのはあんま得意じゃないけど考えるか。

ユウナが何者かに攫われたか、どこかに遊びに行っているか。ただ、俺には嫌な予感しかない。

決まってこういうときの予感は当たるもんだ。

つまり、今起きる最悪の状況が起きているかもしれないんだ。

魔戦士がユウナを攫った。今はこの事実だけでいい。

『ユウスケ場所分かったぞ。ええと、あんたが行ってる学校の近くにいるはずだ! 今どこいんだ!?』

「分かった、アリスは大丈夫なのか?」

『ああ、一応な。ただ、相手はかなり危険だ。私も正面から戦ったがまったく歯が立たなかった』

この声はアリスか。どうやら大丈夫みたいだな。

「アリスも来れるのか?」

無事なのを確認する手間は省き、今気になることを尋ねる。

『いや、私は傷を塞ぐだけで精一杯だ。私はこれから吸血鬼と忍者に報告をしに向かう』

「分かった。エナ俺の居場所も魔力探知でわかるのか？」

エナに訊いたのでアリスは電話をエナに渡してくれたようだ。

『ああ、ていつか魔戦士の向かってる方向はユウスケがいるところの近くだぞ』

「え？ まあ、分かった。じゃあ、俺の所まで来てくれ」

『めんど』

めんどじゃねえよ！

『まあ、いいけど。見えるところにいるよっ』

「おっ」

そこで電話がぶちっと切られる。

はあ、どっするかな。

とりあえずここにいると色葉の家に迷惑がかかっちゃまうよな。

「ゴーニさん俺急用ができたので帰ります。色葉に伝えといてください」

「はい、分かりました。お気をつけてください、ね」

ゴーニさんがニコッと笑う。
俺はカバンを持ってその場を後にした。

30話

エナとはすぐに合流する事に成功した。
物騒な大剣を右手に担いでな。

「エナ、ユウナはどこにいるか分かるか？」

合流した俺はユウナの居場所をすぐに尋ねる。

エナは指を一本立てて、その場で廻る。

何やってんだ、早くしろ。

「あつちだ！」

エナはびたつと止まり、指差した方向はこの街のあまり人気のないほうだ。

あそこは確か廃墟のマンションがそのまま残ってたな。

そのせいであそこら一角は人気ひんがない。

今はどうでもいいけどな。

エナはすぐにそちらへ走っていき、俺もエナの背中を追いかける。
走ること数分。

俺がさっき考えていたマンションの前に立ち止まったエナは上を見上げる。

当時は七階まであったマンションは工事により今は二階までしかない。

エナは腕を組んで何度か確認するように頷く。

「ここだ！ 魔戦士もいるけどなっ」

元氣一杯なのはユウナに会えるからか？

俺は気が気じゃないんだけどな。

マンションの壊れたドアを潜り中に入っていく。

一階をエナに任せ俺は二階へ。二階に上るための階段もあちこち壊れており今にも崩れそうだ。

二階にのぼり人影を探すが誰もいない。

俺はとりあえずこの場所をアリスに伝えてから、一階を探しているエナのところに行く。

「ユウスケ。ここ見てみる」

どや顔で足元を指差している。

俺が視線を落とすとそこには隠し階段があった。

「よく見つけたな」

俺が感心して口を出た言葉を顔をわずかに染めて、

「あ、当たり前だ！ あたしは世界最強最弱だからな！」

馬鹿と天才は紙一重、と。

俺はエナより先に階段を降りて行く。

無視したわけじゃない。単純に俺が先に行けば危険が合っても被

害は俺だけだからな。
優しいだろ、俺。

「置いてくな！」

そんな意図はまったく理解してくれないけどね。
後ろから蹴りをかましてくれやがったエナに引き攣った笑みをやる。

そんな軽い気持ちで俺はエナと足を進めて行く。
地下にはただの一本道だけが延々と続いていて、俺の体は精神的に疲れ始めてきた。

「あそこ。バカユウスケちよつと隠れる」

エナがちっこい体を活かして匍匐前進で歩いていく。
エナの向かったほうには道ではなく部屋があり、そこには光があった。

俺は気になったがエナは案外考えてくれてるからここは言われたとおり待機してよ。

エナはひょこつと顔を出して、中を確認してから俺に目配せをする。

こっちに来いって言っているようだ。

俺は足音を立てないようにゆっくりと歩いていき、エナの横に並ぶ。

エナが右手で指差した方を見ると、いた。

ユウナ。ともう一人の女の子。誰かは分からないので首を傾げると。

「リンゴだ。あいつこっちに来てたんか……ぶっ潰してやる」

物騒な事をボソツと呟くエナ。

エナの声は震えており、怒りの様子が見て取れた。

今にも飛び出しそうなエナの腕を掴みながら中の状態を確認。特にユウナには怪我はなさそうであった。

女　リンゴとかいう奴のほうを見る。

栗色のロングの髪をしている女の子はかわいい。

魔戦士とかいう女の子は全員美少女なのか？

前にきたエナの親もかわいかったし……そこに住みてえな。

なんて冗談はやめて、何で魔戦士がユウナを攫ったのか。その理由が分からない。上の世界と下の世界は仲が悪い

俺も最初はそれが理由だと思ったんだけどだったら攫わないでその場で殺せばいいはずだ。

だとしたら、何だ？　もしかしてユウナの力を狙っているのか？　どんなに考えてもあいつの考えは分からないよな。

だったら簡単だ。あいつをとっつかまえて吐かせればいい。

「エナ、あいつは俺たちがここに来ている事は分かっているのか？」

「人を誘拐するようなやつに頭が狂ってるなんて言われたくないな」

エナは大剣をリングから抜いて再び構える。

「ユウナを連れ去って、何する気だったんだ！」

大剣を震わせて怒鳴るエナに、にこにここと笑っていた顔を俺が腰を抜かすかと思っただほどに冷たい表情で返した。

「そんなの、命令ですから。私が彼女を連れてくれば、変わりに力をくれるって言いましたからね」

誰かに命令されて。今までの聞いた情報から考えればリングに命令したのはユウナを狙うやつだろう。

ただ、相変わらず疑問が生まれる。

今は考えてる暇はないから忘れよう。

「エナ、さつさとこいつ倒してここから離れるぞ」

ここにどんな敵がこれから来るかわからない。

もしも吸血鬼が100人来ましたよなんてことになったら俺もエナも終わりだ。

「ユウスケ、あたしはあんたをしょうがなしに信用してやるから…」

…一緒にあいつ倒すぞ」

エナも状況は分かっているようだ。

「二人とも私のことはいいから逃げて！」

今まで一言も発しなかったユウナが言った言葉はちょっと悲しいもんだった。

「ユウナ、だから俺達を信用しろって。こいつ倒して、またのほほんと毎日過ごそうぜ」

ユウナはなおも食い下がる様子はないので、仕方ない。
ユウナは無視して戦ってやる。

「あはははは。私を倒すって？ 最弱の魔戦士に力のない地球人の二人が私に勝てるわけあるわけがないじゃない。まあ、いいですよ。そこまで死にたいのなら相手してやりますよ」

どこからか、二本の剣を取り出して掴む。

特に構えたりはしてないことから俺達を舐めてるのは分かりきっている。

さて、どうするかな。

31話

最初の一撃で決める。

俺はそう思ったのと同時に剣を出して突きつける。

「そんな急がなくてもすぐに殺してやりますよ」

俺の攻撃は避けられた、が。

俺がひそかに毎日剣の能力 未来視の力を練習してるのだ。

だから、こいつが俺の攻撃を持つてる剣で受け、もう片方の手にある剣で斬ってくるのも見えみえだ。

それを見切って避け、蹴りをお見舞いする。

「ちっ。面倒なやつですね……」

これもあっさりと避けられてしまった。

「あたしもいるぞ!」

大剣で横なぎに一撃を披露するエナ。

俺は姿勢を低くして俺の上を通過するエナの剣を見送る。

「そんな攻撃が効くと思ってるんですか!？」

エナの攻撃を片方の剣で止めさっきと同じように斬る。

俺はエナの小さい体を引っ張り、リングの攻撃からエナを回避させ、剣で斬る。

二本も剣があるってのは随分と面倒だ。
まずは一つぶっ壊してやるしかないな。

エナを後ろに放り投げると同時にエナが手放した大剣をエナを放り投げた手で掴んで、回転力をあわせて斬りつけてやった。

「なっ！」

さすがにさつきまで平然と俺達の攻撃を捌いていたリングもこの一撃には焦ったらしいね。

慌てたように一つの剣で俺の攻撃をガードする。

だけど、今回の攻撃は人ではなく武器を狙ってるんだ。

「おらあああああ！ぶっ壊れる！」

渾身の叫びに渾身の一撃をあわせて俺は斬るといふより叩きつけるといった感じで剣を叩く。

剣に当たったのはわずかの間。

ぴしと一度音を出したと同時に剣はぴしからバキへと変化して…
…完全に折れた。

「死ねボケ！」

俺は後ろから駆けてきたエナにバトンを渡すようにして俺の剣を渡す。

エナは素早い動きでリングの両腕を思いつきり斬った。

「ッ！」

斬られた両腕からはとめどなく血が溢れ出て、見ていて気持ち悪くなってくる。

エナは絶対に軽い剣を使ったほうが強い。

なんでこんな大剣を使っているのか理解ができない。
でもこれで終わりだろ。

リングは両腕から剣を落としてその場にうずくまっている。

両腕の傷はかなり深くとてもじゃないけど動かせそうには見えな
い。

あれは出血多量で普通の人間なら死んでるぞ。

魔戦士は血の量が異常なのかまったく弱ってないね。

こっちをキツと睨んでいるもん。

敵じゃなければ知り合っておきたいぐらいに綺麗な女の子はその
綺麗な顔を怒りで凄まじく歪めていた。

「殺す殺す殺す！ 絶対に殺してやる！」

傷口の血の中に戻すかのように腕を押さえたまま、血色のいい顔
をホラー映画の如く歪めている。

ちょっと止血をしないとまずいんじゃないかなあと思っていたん
だけどもまだ大丈夫そうだ。

「その腕でどうすんだよ。エナ、こいつはどうすればいいんだ？
警察にでも連れて行けばいいのか？」

「こいつは魔戦士だからあたしのママ　先生を呼ぶ」

ママと呼ぶときに顔を真っ赤にして訂正する姿が可愛かったな。

「ふんじゃ、まあ。縛ってでもおっか」

「……何勝った気でいるんですか？」

俺がエナと話をしているわずかな時間の中にリンゴは身を起こしていた。

なんで、立ってるんだ？

俺は視線をリンゴの腕の傷口に目をやると、その傷は完全に塞がっていた。

「お、おいエナこいつ復活してんぞ！」

「は？　へ？　何でだ？」

魔戦士ってやつが丈夫なのはエナが負傷したあとを見ているので知っている。

回復力があるのは知っているがまさかこんな早くに回復するなんて。

「ふふふ。よわっちいエナは自己回復魔法をレンニャー先生に教えてもらってないんですね。魔力で自分を回復させる。こんなのは常識ですよ、常識！　それじゃ、これも知らないんですね」

ぶわあっ！　とリンゴの体から紫色の何かかが溢れ出る。

なんだ、あれは。

リンゴの方から突風がこちらに向かってくる。

エナも踏ん張っていたが身体が小さく軽いのであっさりと吹っ飛ばされてしまった。

飛ばされたエナは、足に力を入れて踏ん張りを効かせていた俺にぶつかりに来た。

まあ、なんとかエナを抱きかかえるようにしてこらえたんだけど今はそんなことよりあいつが一体何がしたいのか気になる。

今あいつの身体は紫色の何かに身体を包まれている。

「あ、あれは……強化魔法だ！」

「ええと、それは身体能力をあげるとかそんな感じか？」

頭の中にはゲームなどで使ういろいろな魔法が出てくる。

エナは一つ頷いた後、何かまずいことでもあるのか顔を伏せた。

「どうしたんだ？」

「あたし、魔力が少なくてあれが使えないんだ。だから、逃げるぞ」

エナは走り出してユウナの腕を掴む。

俺はいきなり走り出したエナを追おうと足を上げた瞬間。

異様な光景が見えた。

リンゴが瞬間移動のように速く動いてエナの心臓を貫く光景が。

「エナ！ さつさと逃げる！」

それが未来の光景だと気づき俺は叫んだ。

俺はエナの方へ向けていた身体をリンゴの方に向ける。

「逃がすわけ……」

俺はリンゴの方へ向かっていたはずだが、俺の前からリンゴの姿がなくなった。

エナは俺の言葉を聞いていたはずだが、ユウナがいたせいですぐに逃げられなかったらしい。

「ありません！」

リンゴは残った一つの剣でエナの心臓を貫いた。

ざくつと耳に最悪な音と共にエナは持っていた大剣を落とした。

倒れることはない。リンゴの剣に刺さってるからだ。

「エナ！」

すぐに駆け寄りたかったが、リンゴが見たものを凍らせるように恐ろしい表情でこちらを向き、手をかざしてきた。

何かレーザーのようなものが俺に向かって飛んできて身体を吹き飛ばした。

身体に穴開いてないけど、痛い。

飛ばされた身体はぼろい地下の壁に打ち付けられた。

「エナ！ ユウスケ！」

ユウナの悲鳴が耳に届く。

そんな悲しそうな声を出さなくてもいいぞ、死んではないからな。

たぶんそれはエナも同じだろう。

前に身体をぼろ雑巾のようにされたのにケロツとしてたからな。

それはいい。

だけどこのままじゃ俺達は勝てない。

あんな瞬間移動まがいのものをされちまったらいくら剣を振っても当たらない。

どうにかあいつを足止めするような技があればいいんだけど。

「あーっはっは！ほんと無様ですねえ。弱いくせに私に挑んできてそして負けた。ほんと、ばっかみたい」

俺は仰向けに倒れたままりンゴのうざったらしい言葉を聞いていた。

手にはちゃんと剣が握られている。

時間を稼ぐのならこの剣に頼るしかない。

「アルネ。お前なんか魔法使えないのか？」

「ボクが？ 使える事は使えますが……面倒です」

「いや、頼むって。ほらなんか好きなもの奢ってやるから」

俺一人じゃどうにもならないんだ。
金で解決するなら楽なもんだ。

「……じゆるっ。仕方ありません。ボクがあいつを抑えます。エナ
を使って仕留めてください」

手元の剣が人型になり涎を垂らす。武器はなくなった。
口元を拭きながらアルネは俺を起き上がらせてくれた。

「ほんとになんでもですよ？」

「わ、分かったって」

俺は軽くほこりを払って屈伸。
十分身体は動く。よし、やるか！

32話

エナの救出と大剣の確保。

俺はそれを遂行させるために走り出した。

俺に気づいたリンゴは身を強張らせるほどの笑みで俺を待ち受ける。

「おらあっ!」

武器は俺の拳。

鋭く突き出された俺の拳はあっさりと避けられた。

分かってる。

俺の力じゃどうしようもないことは分かってる。

だから、この攻撃はエナからリンゴを離す為の、倒すための攻撃じゃない。

俺の攻撃を避けて、

「あはははははっ! 死ね!」

気色悪く叫びながら、剣を俺に向かって薙ぐ。

あぶねっ!

紙一重でそれを避けて、宙返りするかの如く蹴り上げる。まったく当たらない。

「遊んでるんですか?」

腹に鈍い痛みが走る。

ゆっくりと視線を下げていくと、腹に剣が突き刺さっていた。

くそ、やられた。

血がぼたぼたと剣の先から落ちている。

「どうですか？ 痛いですか？ 死にそうですか？ ……なんです
かその目は？」

嗤っていたのかと思ったら、興味のないような目で俺の顔を覗き
込んで言う。

「俺の目がどうした？ 輝いてるか？ くそつたれが！」

剣を手で強く握る。リンゴが引っこ抜こうと力を入れているが、
はは。

力だけなら俺のほうがあるみたいだな。

「そんなことしてどうするんですか？」

さらに力を加えて抜こうとする。

俺も負けじと力を入れるが、あっ、ちよつとまずい。

「こっつするんだ、よー！」

腹の痛みはすべて忘れる！

俺は剣を割り、前に飛び出してリンゴの剣から逃れる。

それと同時に止める物がなくなった腹からは血が溢れ出てきて、

俺は痛みで顔をしかめる。

「まさか、割るなんて、馬鹿だけあって馬鹿力なんですな」

余裕のある言い方だが、それでも剣を折られたことは頭にきたらしい。

全身を纏う魔力があふれでたと思ったら、リンゴの身体を保護するように纏わりついていく。

「エナを殺す前にあなたから殺しましょう」

ゆっくりと、じわじわとなぶるように歩いてくる。

俺にはもう立つほどの体力なんて残ってない。

一歩来たら、片手で腹を押さえながら後退していくだけ。すぐに限界 壁により道は塞がれてしまった。

「これで、終わりです！」

右手に魔力を纏わせ、拳をあげる。

終わった。アルネのやつ、何もしてくんないじゃんか！

今までいろいろ大変だったなあ。

まあ、楽しかったからいいか。

俺が半ばどころか9・9割りほどあきらめていたそのとき。

「これ以上！ みんなを苛めないで！」

いつもは淡々とした喋り方かしないユウナの叫び声が耳に届い

たと思つたら、リンゴが爆発した。

なにが起きたんだ？

「ったく。なんでこう、邪魔が入るんですか!？」

リンゴはめんどくさそうに叫んだ後、声の発信源に顔を向ける。
ユウナ。

おま、戦えたの？

「それに、魔法を使うのが下手すぎですよ、ファルセルトさん」

馬鹿にするような声音でそちらに手を向ける。

「魔力があつてもそんな下手な使い方じゃ、ダメージはまったくないですね。魔法は、こうやるんですよ!」

向けた右手からは丸い炎が現れ、どんどん大きくなっていく。

お、おい!

あの魔法は初めてエナが使った炎の魔法の極大バージョンか!?
あんなもん喰らつたら全身やけどじゃすまないぞ!

「お、おい! やめろ!」

俺は痛む身体を引きずってリンゴを止めようと試みる。

くそ、もう、なんで身体怪我してんだよ!

「ええ、やめますよ。ファルセルトに怪我でもさせたら私が殺され

ちやいますから。はい、ドーン」

俺の方に向き、やばそうな炎をこちらに飛ばす。
距離はほとんどない。

まだ直撃まではcmの単位でだがある。
頬が熱い。

ちりちりなんて可愛らしい物じゃなくて、ぼうぼうと頬を焼く。
まさか俺はこんがり焼けて死ぬのか？

できれば、布団の上で死にたかった。

俺が悲観的に今までの事を思い返していると、俺が爆発して吹っ
飛んだ。

「いた……くない？」

俺は爆発で吹き飛ばされて。リンゴから大分距離が離れていた。
もちろんさっきの炎の弾は俺に当たる事もなく、壁を燃やしてい
た。

壁が壊れかけているんですが……この建物大丈夫か？

「ユウスケ！ 大丈夫？」

さっきの爆発はユウナのだったか。
確かにダメージはないみたいだ。

「ユウナ、何か久しぶりに触った気がする」

俺は余っている片手でユウナに触れる。

ユウナは触れて一秒後に手を叩き落としやがったよう。

「今はそれどころじゃない。エナもいる」

ん？ どうやら俺に気をとられている間にエナも回収済みのようだ。

エナはぼろぼろに傷ついていて、見るに堪えない。

「この傷は治せないのか？」

ユウナに訊ねるがふるふると首を左右に振る。

「大丈夫。時が癒してくれる」

「……なんだその原始的な療法は」

まあ、大丈夫ならいいか。

「傷は塞げても、ダメージは残る」

「よし、俺とエナの傷を塞いでくれ」

「ダメージのこるよ？」

「いって、ほらさっさとしてくれ」

ユウナの手から発せられた緑色の魔力が俺の腹部を包んでいく。魔力が消えたと思ったら、おお傷が塞がってる！

確かに痛いが出血による死は免れた。

「エナをよろしく頼む」

「分かった。無茶はしないで」

「おっ」

さて、ラウンド……2いや、3かな？
3ラウンド目開始だ。

33話

「はっ！」

アルネが何かを叫ぶとリンゴの身体が止まった。
と思ったら、

「うわああああああっ——っ！」

悲鳴をあげた。

うるさい、耳を両手で押さえてしまっほごにうるさい。

一体なにが起きてるんだ？ アルネが何か言ったら次の瞬間リン
ゴがやられた？

意味分からん。

「あ、アルネ！ 何したんだ？」

俺がアルネの姿を確認してから、尋ねると、ふふと奇妙に笑った。

「ボクは呪いから生まれました。だから、呪ってやっただんです」

「ええと、釘で藁人形でも刺したのか？」

「まあ、そんな感じですよ。それより、クレープ買ってください！
たらふく！」

目をきらきらと輝かせて、アルネはねだってくるが今すぐにそれを叶えるのは不可能だ。

俺がリンゴの方を見ると、リンゴは地面に倒れていた。
おいおい、俺の活躍はないのかよ？

最後にかっこよく倒してやろうと思ったのに、俺のいきごみを返してくれよ。

っと、がらがらと音をたてて崩れていく、建物。

ここは地下だぞ！

もしもここで潰れたら、生き埋めじゃねえか！

「あ、アルネ！ ユウナ！ 早く逃げるぞ！」

「分かった。エナは？」

「運べるか？」

「無理、先行ってる」

すたすたと逃げ道へと歩いていく。

「アルネ！」

「ボクは歩くの面倒なので運んでください」

人から剣に。剣からボールペンに変わったアルネを俺はポケットに仕舞う。

エナを肩に担ぎ上げ、そのまま帰ろうとしたが……。

しゃあーない。

リンゴの方に行き、ぺちぺち顔を叩く。

「おーい。このままだとお前つぶれるぞ?」

「ぐ……うわあああああ!」

まだ、呪いか?

「アルネこの呪い解けないのか?」

「無理です。ボクの呪い魔法は一度かけたら三日三晩苦しみ続けます。まあ、この呪い自体油断させてなければかかることはないんですけどね」

なんだよ。最強の魔法だと思ってたのにリンゴが馬鹿だからかけられただけだよ。

俺は右肩にエナ、左肩にリンゴを担ぐ。

右は慎ましやかな胸が当たり、左には大きな胸が当たっている。不謹慎だぞ俺。

二人を担いで、脱出。

どンドン崩れていくんだが、上の階は大丈夫なのか?

「早く!」

ユウナが焦ったような声をあげる。

俺はその声を頼りに走る。

いてーよ! 腹の傷がぱっくり開きそうだ。

冷や汗だらだらで俺は一階に戻る。

もう後少しで出口だ。

がらがら音を立てて一階も少しずつ崩れていく。

まずい。入り口を瓦礫が塞ぐように落ちていく。

二人を抱えて、走るのはつらい。

身体が全快しているのなら別に問題はないんだが、ぼろぼろの満身創痕の状態でこれは……死ねる。

「ユウナ！ あそこ爆発させてくれ！」

俺はあらんかぎりの声をあげて、入り口に顎を向ける。

ユウナは走ったまま入り口に手を向けて、魔法を放出させる。

どかんと激しい音とともに入り口を塞ごうとしていた瓦礫が吹き飛んだ。

それにしても、吹き飛んで落ちるときの衝撃で岩は壊れているがユウナの魔法ではまったく傷ついてない。

俺は崩れていく廃墟の走りにくい足場を、二人抱えて全力疾走。

「どりゃっー！」

最後にジャンプをすると同時に廃墟が完全に音を立てて崩れ落ちた。

「っ、つかれたあ」

腹の傷が痛くなる。

二人を寝かして、地面に腰を下ろす。

も、もううごけねーぞ。

「終わったのか？」

突然声が聞こえ驚いた。

外はすっかり日が落ちて、暗くなっている。

こんな時間にこんなところに来るなんてどんな勇気のあるやつだ、
と思っていると、そいつは俺のよく知る人物だ。

「アリス。遅かったな。寝坊か？」

「再起不能近くまで弱っていた身体を動けるまで治したんだから遅くもなる。それで、私は遅かったのか？」

「ああ、一応終わったよ」

俺はユウナに顔を向ける。

ユウナは俺の視線に気づき、首を傾げる。

「よし、帰るか！」

「エナ！？」

いきなり元気よく立ち上がったと思ったら元気よく声を上げる。
と思ったら俺の方にぶっ倒れてきやがった！

傷口にピンポイントに頭をぶつけやがって。

「あたし、身体動かないからおんぶして家まで運べよ」

「どんだけ上から目線なんだよ。俺も怪我人だぞ？」

「あたしのほうが重体だ！」

「人の腹の上で叫ぶな！」

声が振動して傷口に響く。

「そんで、こいつどうするんだ？」

俺は腹に乗っかってるエナをどかして、リンゴを顎でさす。

俺はアリスに聞いたんだが、アリス本人は答えず、代わりにエナが答えた。

「もうすぐ、マ　レンニャー先生がここに来るはずだから、ほっといていいんじゃない？」

「へ？」

「だから、あたしの先生がくんの！」

俺が理解できないと思ったのか、あらためて言い直した。

俺は別に馬鹿じゃないから理解できる。

わざわざ口に出すまでもないので言わないが。

「分かったから、また人をイスにしようとするなって」

俺はまた座ろうとするエナを押しやる。

するとその隙を狙ったかのようにユウナが座ってきた。

もう勝手にしてくれ、俺には損はないし。

俺は二人を無視して、リンゴが逃げ出さないように警戒する。

が、あいつ大丈夫かよとこちらが心配してしまうほどに痙攣している。

呪い怖い。まじ、怖い。絶対にアルネに逆らうのは止めよう。

『聞こえてますよ』

「きゃおっつ！」

『後で……ふふふ』

こえーよ！ まじこえーし！ つうかなんで声聞こえてんの！

『あなたとは契約してるんですよ？ だから、未来視の力もあるんじゃないですか』

はっ！ 今までなんでその事に疑問を抱かなかったんだよ。

「みなさんお揃いで、歓迎パーティーですか？」

くすくす笑いながら、闇夜の空から小さい人が降ってきた。

ああ、この人前に荷物を届けた人だ。

エナの母親でレンニャー先生。
エナと同じくらいの小ささなのにエナの母親という謎さ。

この人いくつなんだろう？
聞いてみるか。

『やめておいた方がいいですよ。じゃないと、死にますよ』

だらだら。

冷や汗が身体全身を駆けていく。

この人たちはこの世界の常識が通用する相手じゃないのは分かってる。

だから、死ぬといわれたらそれが不可能だと言い切ることが出来ないんだ。

「レンニャーさん。ここは任せていいんですか？」

俺は勝手に一人で焦ったまま尋ねる。

「はい、とりあえず、呪いを解除して、後は更正させるだけです。私はリンゴをつれて戻るので。エナ、これからも頑張ってください。優介さん。エナをよろしくお願いします。あとアルネも」

「まあ、面倒見てやってもいいけど。食費とか払ってくれ」

「それじゃあ！」

元気よく声を上げて飛んで戻って行ってしまった。

戻るときに廃墟も直すは俺達の傷も治していくは、とにかくあの

人が凄い事はわかった。

「それじゃあ」

俺は口を開いて、次に続ける言葉を全員で目配せする。

「『帰るぞ！』」

エナは元気よく、ユウナは淡々と、アリスはかっこよく、それぞれ自分の性格らしさで帰宅を宣言する。

その後、俺達は笑った。

34話

家に帰った俺達はユウナを連れ戻す事に成功したお祝いで豪華な夕食を作っている。

アリスには極力手伝わせないようにしてるけど。

「デザートは何にするんだ？」

俺が尋ねるとエナはふふんと笑った後、

「ケーキだ！ ほら、アリスに買いに行かせたスポンジケーキ！」

さっき、いないと思ってたらそんなものを買っていたのか。

「ほら、フルーツの缶詰もあるし適当に乗せよう」

えいと、エナがももを投入。俺は冬に食い忘れた、しおれたみかんをこっそりのつけた。

ユウナは冷蔵庫からプリンを取り出して、落とした！？

「いやいや！ 何やってんの！」

俺が言えることじゃないけど。

というかこれ闇鍋ならぬ闇ケーキになってるぞ！

「では私もこれを」

輸血パックをいれるなああああーっ！

吸血鬼のお前には好物かもしれないが俺達は普通だ。

「じゃ、あたしもこれ入れてやる！」

ラーメンのスープ。

順番にどんどんいろいろなものトッピングされていく。

……固体のはずが液体に変わっていた。

下には皿を敷いていたはずなのになぜか土鍋に。

俺を除いた、四人の女の子 エナ、ユウナ、アリス、アルネ
がしつちやかめつちやか目に付いた物をケーキだったものにぶつ
けていく。

今、にんじんがぶつささったぞー。

あつ、なんか火の玉が入られたぞー。

もう何も言うまい。

俺はテレビのチャンネルを回して、適当に番組を見て現実逃避。

「さて、そろそろメインを入れますか！」

エナの嬉しそうな声が耳に入るが無視。

「そうだな。よし、全員準備はいいか？」

嫌な予感が……。

俺は不穏な空気を感じて、外に通じる窓へと走っていく。

同時にエナとユウナが俺のいたソファに飛び掛っていた。
まさか、な。

最後に俺でもあの中に入れて面白がるつもりか。
そんなおもちゃになってたまるか！

「足よ、動くな」

なんだ！？ 足が全く動かないぞ！

俺が一生懸命足を動かそうとしてもまったく動かない。

まるで石になったかのように……。

「ボクの呪いはあの魔戦士で確認済みですよね？」

「お、お前！ こんなことしてどうなるんだよ！ 頼むって、俺を逃がしてくれ！ 武器だろ？ 俺の！」

「でも、ボクは最優先で面白い事をしようと決めたから」

「迷惑だ！ 限りなく迷惑だ！」

俺は全身を震わせるように力を出す。

すると、パキパキと木が割れるような音と共に少しずつ足が自由になっっていくのが分かった。

この呪いは物理的な物なのか。

だったら、力でどうにかすれば逃げられる。

「うおおおおおお！」

俺はこの街中に響くような声を張り上げ、足を動かす。

なんとか呪縛からは逃れ、前につんのめる。

「よっしゃあ！」

エナが脱出していた俺の足を掴んでいた。

「ちょ、ちょっと待ってって！　なんか、鍋でかいなあ、あんなの
あつたけなあと俺は思ってただけでもしかして……俺をいれるた
めにわざわざ」

買ってきたの？

俺は最後まで言わなくてもわかると思い最後まで言わなかった。

「私が持ってきた」

俺を四人で担ぎ上げる。

俺は神輿か！

「まてまてまて！　あの中に入るって身体を洗う必要があるだろー
が！」

「あらえボケ！」

エナの罵声が耳に入るのと同時に俺は浮遊感を味わった。
その直後鍋に俺は入ったが、中には液体が合ったおかげで痛くは
なかった。

「おまえら、覚えておけよ」

俺の声はしかし、完全に無視されていた。

「かんぱーい！」

「乾杯」

「乾杯だ」

「……かんぱい」

順にエナ、ユウナ、アリス、アルネが楽しんでいた。おいおい。この食品をあいつらは食べるのか？

まあ、食わなかったら俺が食うけどな。鍋の中から楽しそうに笑う四人を見る。

ああ、どいつも可愛いな。そんな幸せ者な俺なんだ。ちょっとのおふざけは目をつぶってやろっじゃねーか。

俺は鍋の中に浮いているスポンジを一つ摘んで食べる。湿ったそれは、少なくともアリスの作った料理よりはマシだった。

ああ、こんな馬鹿みたいな毎日が続いて行くんだ。ふと、思う。

ここ一ヶ月いろいろなことがあった。

前からおかしかった俺の日常は、エナが来た事により、壊された。

だけど、決してそれは嫌なわけじゃなく、むしろ好ましい物だった。

これから先。

ユウナのことなどいろいろ問題はあんだけど、そんなものは俺が全部どうにかしてやる。

だから、ユウナ。もっと俺に頼ってくれよ。

俺は心で伝えた後、鍋から脱出。

身体を洗うために風呂へと向かう。

家の中がこんなに騒がしいのは何年ぶりだろう。

風呂場においても家の中がうるさい。

前まではテレビの音しかこの家の音源はなかったが、今は四人の美少女がいる。

この日々がずっと続いてほしい。

心からそう願った。

34話（後書き）

な、なんとか書き終える事に成功しました。
どうも、火だるまです。

初めて、長編を書いて分かった事。
とにかく難しい。

本当は3ヶ月くらいで書き終えるつもりだったのですが、初投稿から約6ヶ月。

描写力がないのに苦労しながら試行錯誤を重ねて書いた6ヶ月。

まあ、途中他の作品を書いていたりもしましたが。

今、もう一作品書いてすでに投稿しているのですがよかったです。もちろん見てください。宣伝ジャンナイデスヨ。

途中主人公のキャラぶれてね？　とも思っていましたけどどうですか？
作者が気づいたのだから、読者の方たちはもっと敏感に気づいたかもしれません。そこは触れないでください。

新しく書く作品（というかすでに投稿されている作品）ではもっと面白くかけるように努力したいです。

では、読んでくださったみなさん、本当にありがとうございました。
もしもまた読んでくれる機会が会ったら嬉しいですよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0245o/>

神様。俺はアンタに何か悪い事したか？

2011年3月25日00時38分発行